

# 式部小路

泉鏡花

青空文庫



## 序

日本橋のそれにや習える、

源氏の著者にや擬なぞらえたる、

近き頃おとわ音羽あおやぎ青柳の横町を、

式部小路となむいえりける。

名をなつかしみ、尋ねし人、

妾宅と覚しきに、世にも

婀娜あだなる娘の、糸竹の

浮きたるふしなく、情も恋も

江戸紫や、色香いろはの  
手習して、小机うちもたに打凭うちもたれ、  
紅筆さを含める状さまを、垣間かいま  
見みてこそうなず頷うなずきけれ。

明治三十九年丙午十二月

鏡花小史

鳥差が通る。馬士まごが通る。ちとばかり前さきに、近頃は余り江戸向むきでは見掛けない、よかよか飴屋あめやが、衝つと足早あしはやに行き過ぎた。そのあとへ、学校がえりの女学生が一人、これは雑司ぞうしヶ谷やの方から来て、巢鴨すがも。

こう、途絶え途絶え、ちらほらこの処ゆきかを往來ゆきかう姿は、あたかも様々の形した、切れ切れの雲が、動いて、その面おもてを渡わたるに齊ひとしい。秋も半ば過ぎの、日もやつ下りの梯おもかげばし橋はしは、小石川の落葉の中

に、月が懸かつた風情である。

空の蒼々あおあおしたのが、四辺あたりの樹立こだちのまばらなのに透いて、瑠璃るりいろの朝顔こずえの、梢かに擲からんで朝から咲き残つた趣に見ゆるさえ、どうやら澄み切つた夜のよう。

しかし、恰好かつこうをいつたら、鳥が宿つたのと、鵲かささぎの渡したのと、まるで似ていないのはいうまでもない。また真まことの月と、年紀としのころを較べたら、そう、千年も二千年も三千年も少わかかろう。

ただ我々に取つては、これを渡初めした最年長者より、もつと老朽ちた橋であるから、ついこの居ほこりまわりの、砂利場の砂利を積んで、荷車など重いのが通る時は、埃ほこりやら、砂ぼつやら、澆ぼつと立つて、がたがたと揺れて曇る。が、それは大空ながを視ながむる目に、雲はじつ

としていて、月が動くように見えると一般、橋の梯おもかげはうつろわず、あとはすぐに拭ぬぐったような空気の中に、洗った姿となるのである。ちようど今人の形のいろいろの雲が、はらはらとこの月の前を通り去った折からである。

橋の中央なかばに、漆の色の新しい、黒塗の艶つややかな、吾妻下駄あずまげたを軽かろく留めて、今は散った、青柳の糸をそのまま、すらりと撫なで肩がたに、葉に綿入れた一枚小袖、帯に背負しよいあげ揚くれないの紅は繻珍しゅちんを彩る花ならん、しゃんと心なしのお太鼓結び。雪の襟脚、黒髪と水際立つて、銀の平打ひらうちの簪かんざしに透すかし彫ぼりの紋所、撫子なでしこの露も垂れそう。後おくれ毛げもない結立むすびだてての島田鬘まげ、背高く見ゆる衣紋えもんつき、備わった品の可よさ。留南奇とめきの薰馥かおり郁ふくとして、振ふりを溢こぼる縮ちりめん緬めんも、緋桃ひももの

燃ゆる春ならず、夕焼ながら芙蓉ふようの花片はなびら、水に冷く映るかと、  
寂しらしく、独りしお悄たたずれてゐんだ、一人にんの麗人たおやめあり。わざとか、  
櫛くしかざりの飾もなく、白もとゆいき元結ひとむすび一結ひとむすび。

かくても頭重つむりそうに、頸うなじを前へ差伸ばすと、駒下駄うまげがそと浮いて、肩を落して片手をのせた、左の袖がなよやかに、はらりと欄干の外へかかった。

ここにその清きこと、水底みなそこの石一ツ一ツ、影をかさねて、両方の岸の枝ながら、蒼空あおぞらに透くばかり、薄く流るる小川ひとすが一条じ。

流ながれが響いて、風が触かつて、幽かすかに戦そよいだその袂たもと、流は琴の糸が走るよう、風は落葉を誘うよう。

雲が、雲が、また一片ひとひら、……ここへかすり緋の羽織、縞しまの着物、膨らんだ襦しやつ衣、式かたのごとく、中折なかおれを阿弥陀あみだに被かぶつて、靴はを穿はいた、肩に画板をかけたのは、いうまでもない、到る処、足の留とどまる処、目に触るる有らゆる自然の上に、西洋絵具の濃いのを施す、絵を学むきぶ向むきの学生であつた。

広くはあらぬ橋の歩み、麗たおやめ人の背後うしろを通つて、やがて渡り越すと影が放れた。そこで少しばらく時立留つて、浮雲のただよう形、熟じつと此方こなたを視ながめたが、思切さまつた状さまして去つた。

その傍かたわらに小店こみせ一軒、軒には草鞋わらじをぶら下げたり、土間には大根を土のまま、煤すすけた天井には唐とう辛がらし。明らさまに前とおりの通へ突出して、それが売物の梨、柿、冷えたふかしいも藪いもに、古い精進庖丁も

添えてあつたが、美術家の目にはそれも入らず。

店には誰も居なかつた。昨日の今時分は、ここで柿の皮を剥いて食べた、正午まわりを帰り路の、真赤な荷をおろした豆腐屋があつたに。

## 二

学生の姿が見えなくなると、小店の向うの竹垣の上で、目白がチイチイと鳴いた。

身近を通つた蹠音には、心も留めなかつた麗人は、鳥の唄も聞えぬか、身動きもしないで、そのまま、じつと。

秋の水は澄み切つて、鮎あゆの鰭ひれほどの曇りもないから、差さ覗しのぞくと、浅い底に、その銀の平打の簪が映つて、流ながれが糸のようにかかると、小石と相撃つて、夏かつぜん然として響くかと、伸びつ、縮みつする。が、娘はあえて、過あやまつて、これを遺失おとしたものと、手に取ろうとするのではない。

目白がまたチイと鳴いて、ひっそりと、小さな羽を休めた形で、飛ぶ影のさした時であつた。

下行く水の、はじめは単みなかみに水上みづかみの、白菊か、黄菊か、あらず、この美しき姿を、人目の繁き町の方へ町の方へと……その半襟なまひらの藤色と、帯おビの錦にしきを引動かし、友禅ゆうぜんを淡く流して、ちらちら靡なびして止やまなかつたのが、フト瞬ゆづく間淀よどんで、静しずまって、揺れず、なだ

らかになつたと思うと、前髪も、眉も、なかだかな鼻も、口も、  
咽喉のんどの幽かすかに見えるのも、色はもとより衣紋えもんつきさえ、明あかるくなつ  
て、その半身をありありと水底みなそこに映したのである。

おもかげ  
倂はその名である。月のような日中ひなかの橋も、斉ひとしく麗人たおやめの姿  
を宿した。

それまでたたずんだ娘おもいの思は、これで通つたものであろう。可愛い  
唇べにの紅を解いて、莞爾にっこりして顔を上げた。身は、欄干に横づけに。  
と見ると芳紀ほうき二十三？ 四。目色めつきに凜りんと位はあるが、眉のかけり  
婀娜あだめいて、くつきり垢あかぬ抜けのした顔かおぞなえ備。白足袋つまの褌はずれ  
も、きりりと小股こまたの締つた風采とりなり、この辺あたりにはついぞ見掛けぬ、  
路地に柳の緑を投げて、水を打つたる下町風。

恍惚うっとりと顔を上げ、前途ゆくてを仰ぐように活々した瞳をぱつちりと睜みひらいたが、流ながれを見入つて、疲れたか、心にかかる由ありしか、何となく弱々と、伏目になつてうつむいて、袖口を胸で引き合わすと、おのずからのように、歩あしが運んで、するする此方こなたへ。

渡り越して、その姿、低い欄干を放れると、梯橋は一点の影も留めず、後になつて、道は一条ひとすじ、美しくその白足袋の下に続いた。

さて小店の前を通つた時、前後あとさきに人はなし、床几しょうぎにも誰も居おらず、目白もかくれて、風も吹かず、気は凝つて寂しんとしたから、その柿と、梨と、こつこつと積んだのが、今通る娘のために、供そ物なえものした趣があつたのである。

通りかかりに見て過ぎた。娘の姿は、次第に橋を距つて、大きく三日月形なりに、音羽の方から庚申塚こうしんづかへ通う三ツ角へ出たが、曲つて孰方いずかたへも行かんとせず。少し斜めに向をかえて、通を向うへ放れたと思うと、たちまち颯さつと茜あかねを浴びて、衣きぬの綾あやが見る見る鮮麗あざやかに濃くなつた。天晴あつぱれ夕雲くれなゐの紅くれないに彩られつと見えたのは、塀あふに溢あふるるむらもみじ、垣根めぐを繞めぐる小流こながれにも金欄きんらん颯みなきと漲つたので。

その石橋を渡つた時、派手な裾すそ捌さばきにちらちらと、かつ散る紅、かくるる黒髪、娘は門かどを入つたのである。

「真平まっぴら御免を。」

一ツ曲つて突当りに、檜ひのき造づくりの玄関きちんが整然まっしかくと真四角まっしかくに控

えだが、娘はそれへは向わないで、あゆみの花崗石みかげいしを左へ放れた、おもてから折まわしの土塀なかばの半に、アーチ形の木戸がある。

そこを潜くぐつて、あたりを見ながら、芝生ひろを歩つて、梢こずえの揃つた若木の楓かえでの下路したみちを、枯れたが白銀しろがねの縁へりを残した、美しい小笹おささを分けつつ、やがて、地つちも笹も梢も、向うへ、たらたらと高くなる、堆うずたかい錦しとねの褥しとねの、ふつくりとしてしかも冷やかな、もみじの丘へ出た時であつた。

向ううらに海のような、一面鏡の池がある。その傾斜面に据えた瀬戸物の床几に腰をかけて、葉色の明りはありながら、茂りの中に、薄暗く居た一人の小男。

## 三

紅葉もみじの中に著いちじるく、まず目に着いたは天窗あたまのつるりで、頂はヤ兀はげておもしろや。耳際うしろから後へかけて、もじやもじやの毛はまだ黒いが、その年紀としごろから察するに、台湾云々というのでない。結髪時代の月代さかやきの世とともに次第に推移おしうつつたものであるう。

無地の紬つむぎの羽織、万筋の袷あわせを着て、胸を真四角まっしかくに膨らましたのが、下へ短く横に長い、真田さなだの打紐うちひも。裾すそ短みじかに靴はいを穿て、何を見得にしたか帽子を被かぶらず、だぶだぶになつた茶色の中折、至極大ものを膝の上。両手を錨つばの下へ、重々しゅう、南蛮鉄、五枚しころ鍔はちかぶとの鉢はちかぶと兜かぶとを脱いで、陣中に憩つた形でござつたが、さてそ

の耳の敏い事。

薄い駒下駄運びは軽し、一面の芝の上。しかるに疾より聞きつけたと覺しく、娘の立姿、こぼるるもみじの葉の中へ、はらりと出でて見ゆるや否や、床几を立て、恭しく帽子を踵の辺まで、手とともにズツと垂れて、真平御免！ と啓したのである。

「ええ、御免下さいまし、甚だ推参なわけで、飛んだ失礼でございますが、手前通りがかりのもので、」といい出る。

娘は上から伏目で見た、眦が切れて、まぶちがふツくりと高いよう。

その気おのずから、脳天を圧して、いよいよ頭を下げ、

「は、当御館におかせられましたは、このお庭の紅葉を、諸

人に拝見の儀お許しとな、かねがね承つたでありますので、戸お外もてから拝見いたしましたしてさえ余りのお見事。つい御通用門を潜くぐりまして、うかうかこれへ。

実は前もつてちよつとお台所口まで、お断りを申上げまして、御承諾を頂戴いたそうかにも心得ましたが、早や拝見御免とありますれば、かえつてお取次、お手数てかず、と手前勘てまえかんに御遠慮を申上げ、お庭へ参つて見ますると、かくの通とおり。手前の外には、こう、誰一人拝見をいたしておりますものがございません。ほい、こりや違つたそうな、すれば、大方、だろうぐらいに考えて風説をいたしますのを、一概にそうと心得て粗忽そこつせんばん千万な。

若いものではございませず、分別盛ざかりを通り越していなから、と

恐縮をいたしましたしてな、それも、御門内なら、まだしも。

無<sup>ぶしつけ</sup>躰にも、ずかずか奥深く参りましたで、黙って出て参るわ

けにも相成りませず、ほとんど立場をなくしております儀で。

ええ、どうぞ貴<sup>あなた</sup>女様、大目に御覧下さりますよう、また少々拝

見の処も、あいなりますることとでございましたら、御<sup>おゆる</sup>赦しのほど

を、あらためてお願い申します。」「

と句は伸びたが淀まぬ口上、すらすらと陳<sup>の</sup>べ立てた。

疾<sup>と</sup>くから何かいいたそうだった娘は、その隙<sup>ひま</sup>のないのに言<sup>ことば</sup>を含

んで黙って待ったが、この（お願い申しまする）に至って、ちよ

いと言<sup>ことば</sup>が切れたので。ト支<sup>つか</sup>えたらしい、早急には、いい出せない

し、黙っていると、低頭したままにいる。はツと急<sup>せ</sup>いたか、瞼<sup>まぶた</sup>を

染めた、気の毒なが色に出て、ただ、涼しい声で、

「はい、」といった。

「お差支さしつかえはないでしょうか。」と、少しずつ顔を擡もたげる。

「御免なさいな、私は、あの、この家のものじやないんですよ。」

「へ、何、お邸のお嬢様ではいらつしやいません？」

「貴下あなた、不可いけないんですかねえ、私もやつぱり見に来たものなの。」

小男は胸を反そらして笑い、

「成程なつ、御夥間おなかまですかい。はははは、可ようございましょうと。

まあ、お掛けなさいまし。何ね、愚ぐ々ぐ々ぐいや今の口上で追おっ払ばら

いませ。貴女がお嬢様でも、どうです、あれじや厭いやとはいえます

まい。」

「そう、ほんとうにお上手ね、」と莞爾にっこりした。  
ちとこの返事は意外だったか、熟じつと瞻みまもつてて、

「や、」帽子の下で膝をはたり。

「人形町においてなすった、——柳屋のお夏さん。」

#### 四

「こんち今日は、今日ア、」

かみさんが、

「ああい、」といつて、  
上あがりがまち框かまの障子を閉め、直すぐその足で台

所へ、

「誰？ おや、床屋さん、」

「へへへへへ、どうも晩おそくなりまして済みません、親方がそう申しました、ええ、何だもんですから、つい、客がございましたもんですから、」

あわせ 袷の上に白の筒袖、仕事着の若いもの。かねて誂あつらえの剃刀を、

あわせて届けに來たと見える。かんぬしが脂やに下さがつたという体裁、

笏しやくの形の能代塗のしろぬりの箱を一個、掌ひとつてのひらに据えて、ト上目づかいに差出

した。それは読めたが、今声を懸けたばかりの、勝手口の腰障子  
は閉まったり、下した流ながしの板敷に、どツしり臀しりを据えて膝の上に

頤おとがを載せた、括くくり猿ざるの見得はこれいかに仕し。

「まあ。」

奴は、やつこ目をきよろきよろして、

「へへへへへ。」

「御世話様でした。」といつてただ受取つたのが、女房の解せない様子は、奴もとより承知之助。

台所にしゃが踞んだまま、女房の、藍あいみじん微塵の太ふと織おり紬つむぎ、ちと古び

たが黒くろ縷じゆす子の襟のかかつたこぎつぱりした半はん纏てんの下から、秋

日和で紙の明るい上框の障子、今閉めたのを、及および腰こしで差さしのぞ

き、

「可い塩あん梅ばいに帰りましたね。」

「誰たれさ。」

「今来やがった野郎でさ。」

これで分つた。女房はうなず頷いて、

「ああ、今の。何だろう？ お前さん知ってますか。」

「知ってますツて、とんだ奴やつです。」ともう一度首を伸ばして見る。

女房も振返つたが、受け取つた剃刀をそのまま、前まえ垂たれを挟んで、粹いきにし躡がみ、

「何、町内の若い衆しかい。」

「じゃ、おかみさん、こつちじゃ御存じないんですか。」

「見た事もない人さ、でもお嬢さんはどうだか。」

「へい、何てつて来やがつたんで。」

「ええ、御免下さいまし、こちら様のお嬢様はお内ですかッてい

つたがね。」

若い衆しゅ、板の間に手をかけて、分別ぶんべつありそうに、傾いた。白いのを着た姿は、前門の虎に対して、荒神様こうじんさまの御前立おまえだてかと頼母たのもしく見えたので。

「いったんだがね、もつともお留守だからお留守だといったら、じやまた後ほどツて帰ったがね。」

いいいい、くるりと身をかえして立つと、踞すわんでいた腰を伸ばし切らず、直ぐそこに、てらてらの長火鉢。

「誰方どなたでございますえツて聞いたら、何にもいわないで、への字形なりの口で、へへへはちと気障きざだったよ、あああ。」

と傍かたわらの茶棚の上へ、出来て来たのを仰向あおむいてのせた、立膝で、

煙草盆たばこぼんを引寄せると、引立てひつたてるように鉄瓶をおろして、ちよいと触つてみて、埋いけてあつた火を一挟み。

番煙草と見ゆるのに、長煙管ながぎせるを添えて小取廻しに板の間へ押出した。

「まあ、一服おあがんなさい。」

さほど思案に暮れるほどの事でもないが、この間待つて黙つて控えた。やっこ奴、鼠のように亀甲羅字べっこうらうを引いて取り、

「おかみさん、頂きます。」

「まずいよ、私ンだから。」

「どういたしましたして、へい、後にまた来ますツて。」

「いったがね、何かい、筋が悪いのかい。」と斜ななめに重忠という身

で尋ねる。

「悪いの何の！ から、手のつけられた代物しろものじゃないんですよ。」

「ゆするの？」

「いいえ、ゆするも、ゆすらないも、飲んだくれ、酒ツ癖の悪い、持て余しものなんですわっし。私どもの社会ですがね。」

「おや、やっぱり、床屋さん。」

「床屋にも何にも、下町じゃ何てますか、山手やまのてじゃ、皆みんなが火の玉の愛吉ツていいましてね、けん険難な野郎でさ。」

## 五

「三厘もんでもありさえすりや、中なか汲くみだろうが、焼しょう耐ちゆうだろうが、徳利の口へ杉すぎ箸ばしを突つ込こんで、ぐらぐら沸にえ立たせた、ピンと来て、脳天へ沁しみます、そのね、私わつ等しらで御覽なさい、香においを嗅かいだばかりで、ぐらぐらと眩め暈まいがして、背後うしろへ倒れそうなやつを、湯ゆのみコップあおで煽あおりやがるんで、身体からだ中の血が燃えてまさ。

ですから、おかみさん、ちよつとでもあん畜生に触るが最後、直すぐに誰やけどでも火傷をします。火の玉のような奴で、東京中の床屋と  
いう床屋、一軒残らず手を焼いてしまったんで、どこへ行つても  
店口から水をぶツかけて追い出すツて工合ですから、しばらくね、  
消えました。

多日しばらく、誰の処あいつへも彼奴の影が見えねえで、洗桶あらいおけから火の粉を吹き出さないもんですから、おやおや、どこへ潜うちつたろう、と初手うちの中は不気味でね。

（上げ板を剥めくつて見ろ、押入の中の夜具じゃねえか、焦臭きなくさいが、愛吉の奴がふて寝をしていやあがるだろう。）

なんてつて親方徒でやいが、串戯じょうだんにもいったんですが、それでもざつと一年ばかり、彼奴あいつの火沙汰ひざたがなかつたんです。

すると、おかみさん、どうでしょう、念にや念いの入いった、この夏、八月の炎天に、虚空こくうを飛んで、ごろごろと舞い戻りやがつて、またぞろ、そこから転あがって歩行あるくでき。へい。」

といって煙を吹いた。顔が赤く、目が円い。この若いもの、余

程おびえているのである。

余りの事に、はじめは笑つて聞いていた女房は、なぜか陰気な顔をして、

「厭いやだよ、どこから舞い戻つて来たんだねえ。」

「それがどうです。そら、そういった工合で、東京中は喰い詰める——し、勿論何でさ、この近在、大宮、宇都宮、栃木、埼玉、草加から熊ヶ谷、成田、銚ちようし子。東じゃ、品川から川崎続き、横浜、程ヶ谷までも知つていて対あいて手にし手がないもんですから、飛んで、逗ずし子、鎌倉、大磯ね。国府津こうづ辺まで、それまでに荒しやあがつたんでね、二度目に東京を追出おんでてもどこへ行つても何でしょう、おかみさん。

(は、愛吉か、きなツくさい。)

と鼻ツつまみで、一昨日おととい来い！ と門口かどぐちから水でしよう。

火の玉が焼やけを起して、伊豆の大島へころがり込んで行つたんですつて。芝居ですると、鎮西八郎ためとも為朝たごが凧を上げて、身代りの鬼夜叉おにやしやが館やかたへ火をかけて、炎うちの中で立腹たちばらを切つた処でさ。」

「ああああ、」と束ね髪が少し動いて頷く。

「月に一度、靈岸島から五十石積が出るツてますが、三十八里、荒海で恐ろしく揺れるんですつてね。甲板へ潮を被かぶつたら、海の中で、大概消えてしまひそうなもんですけれど、因果と火氣の強い畜生で、消火半きえはんを打たせません。

しかも何です、珍いくらしく幾干か残して来たんですぜ。

何しろ、大島なんですからね、おんな婦女が不断着も紋付で、ずるずる引摺りひきずそんな髪を一束ねの、あたま天窗へ四斗俵しとびょうをのせて、懐手で腰をきろうという処だッていいますぜ。

内地から醤油、味噌、麦、大豆なんか積んで、船の入る日にや、男も女も浪打際へ人垣の黒ばかり。はるか遙の空で雲が動くように、大浪の間に帆が一つ横になつて見える時分から、爪立つものやら、乗り出すものやら、やあ、人が見える、と手を拍たたいて嬉しがるッていう処でさ。

さすがに火の手を上げなかつたもんですから、そら、ちつとばかり残つたでしょう。

処で、炎天を舞い戻ると、もう東京じゃ、誰も対あいて手にしないこ

とを知つてますから、一番自前で遣<sup>や</sup>らうというんで方々捜したそ  
うですがね。

当節は不景気ですから、いくらも床店の売もの、貸家はあるに  
やありますが、値が張ったり、床屋に貸しておくほどの差配<sup>おおよさん</sup>人、  
奴<sup>やつこ</sup>の身上を知つていて断つたりで、とうとう山の手へお鉢をまわ  
すと、近所迷惑。あいにくとまたこの音羽続きの桜木町に一軒明  
いたばかりのがあつたんでさ。

そこへ談<sup>はなし</sup>を極<sup>き</sup>めましたね、夏のこツたし、わけはありません。  
仕事着一枚の素<sup>すっぱだか</sup>裸。七輪もなしに所帯を持って、上げた看板  
がどうでしょう、人を馬鹿にしやがつて！——狐床。」

## 六

「その狐が配つたんでさ。あとで蚯蚓みみずにならなかつたまでも、隣近所、奴やつこが引越蕎麦ひっこしそばを喰つた徒てあいは、皆腹形みんなはらなりを悪くしたろうではありませんか。

開業の日から横町大騒ぎになりました。というは、何です、まあ、口あけのお客と、あとを二人ばかり仕事をしたツていいますが、すぐに祝酒だ、とぬかしやあがつて。店をあけたまま、見通しの六畳一間で、裏長屋の総井戸をその鍋釜なべかま一ツかけない乾いた台所から見晴しながら、箒ほうきを畳へ横ツ倒しにしたまんま掃除もしないで、火の玉小僧め、表角の上州屋から三升と提込んでね、

おかみさん、突当りの濁酒屋どぶろくやから、酢章魚すだこのこみを、大皿で引いて来てね、

友達三人で煽あおったんでさ。

友達といったって、まともなのは、附合いませんや。自分じや仏だ、仏だといいますが、寝釈迦ねしゃかだか、化地藏ばけじぞうだか、異体の知れない、若い癖に、鬼見たような痘痕あばたづら面で、渾名あだなを鍍金めつきの銀次ぎんじツて喰い詰めものが、新床だと嗅かぎ出して、御免下さいまし、か何かで、せしめに行った奴を、おともだち、お前さんも不景気で食えねえのか、飯はないが酒はあるてって、引摺り入れた役雑やくざとね。

もう一人は車夫くるまやでき。生れてから七転びで一起もなし、そこ

で通名とおりなをこけ勘かという夜よなし。前の晩たなだに店立たなだてをくつたんで、  
 寝処ねどこがない。禪ふんどしの掛かけがえを一条ひとすじ煮染にせんめたような手拭てぬぐい、こいつ  
 で顛はちまき巻まきをさしたまま畳たたみみ込んだ看板かんばん、兀ぶげちよろの重箱ひとつが一箇ひとつ、  
 薄汚うすけえ財布さいふ、ぎツとこれで、身しん上しょうのありツたけを台箱たいばこへ詰め  
 込んだ空からぐるま車くるまをひいて、どうせ、絵えに描かいた相馬あまの化城ばけじろ古御ふるご  
 所ところから、ばけ牛うしが曳ひいて出でようというぼろ車くるま、日中ひなかは躰いざりだつて乗  
 りやしません。

ごろりごろりとやって、桜木町さくらぎちょうを通とりかかつて、此奴こいつも同おなく路ち  
 地床ぢばの開業かいぎやうを横目よこめで見たみたからぬかりませませんのき。

右みぎのね、何なにですつき。にぎり屋やの軒下のきげへ車くるまを預あづかりかけて、苜蓿うまごやし  
 のしとつたような破毛布やぶれげつとを、後生ごせい大事だいじに抱かかえながらのそのそと

入り込んで、鬼門から顔を出して、若親方、ちとお手伝い申しましようかね……とね。

此奴等、そこで三人、虫拳で寄り合をつけたんでき。」

「驚いたねえ、火の玉に鍍金に、こけだえ。まるで三題噺ぼなしのようじゃないか。さぞ差配おおよさま様がお考えなすつたろう、ああ、むずかしい考えものだね。」

思わず警句一番した、女房も余りの話、つい釣り込まれてふき出したが、ひるがえ翻つて案ずるに、わらいごと笑事ではないのである。

「串じょうだん戯ぎじゃないよ。」

と向き直つて、忘れていた鉄瓶を五徳の上。またちよいと触つてみたのは、これからお茶でも入れる気だろう。首尾が好いと女

世帯せたい、お嬢さん、というのは留守なり、かみさんも隙ひまそうだ。最も  
 中なかを一火ひとひで、醬油おしたじをつけて、と奴やつこ十七日だけでも、小遣こづかいが  
 ないのである。而已のみならず、乙姫様が困くろうとわれたか、玄人くろうとでなし、  
 堅気かたぎでなし、粹じだらくで自堕落の風のない、品なまめがいいのに、媚なまめかしく、  
 澄おとなしましたようおとなしで優容おとなしやか、お侠きやんに見えて懐かしい。ことに生垣  
 を覗のぞかるる、日南ひなたの臥がりゆう竜りゆうの南枝みなえにかけて、良よき墨すみ薫かほる手習草紙  
 は、九度山くどさんの真田さなだが庵いおりに、緋ひ緘おとしを見みるより由緒よしありげで、奥床  
 しく、しおらしい。憎にくい事こと、恋こひの手習てのりするとは知れど、式部の藤  
 より紫濃むらさきく、納言なごんの花はなより紅淡くれないき、青柳町あおやなぎの薄紅梅うすこうばい。  
 この弥生やよいから風説うわさして、六阿弥陀詣ろくあみだもうでがぞろぞろと式部小路を  
 抜ぬける位ほど。

月夜鳥もそれかと聞く、ほととぎす時鳥の名に立つて、音羽九町の  
すずみだい納涼台は、星を論ずるにいとま違あらず。関口からそれで飛ぶほたる螢を追  
 ぎまに垣根に忍んで、おれを吸つたやぶ藪ツ蚊が、あなたの蚊帳かやへと  
 まつた、と二の腕へ赤い毛糸を今でも結えているこの若い衆、願ねがわ  
 くはそのおかえりを、半日ここで待つ気である。

## 七

ここにおいてか、いよいよ熱心。

「でもその、拳ぐらいで騒ぎが静まりや可いいんですが、酔が廻る  
 と火の玉め、どうだ一番相撲を取るか、と瘡やせツぼちじやあります

がね、きちがいみず狂水が総身そうみへ廻ると、小力が出ますんで、いきなりその箒ほうきの柄を蹴け飛ばして、血眼ちまなこで仕切ったでしょう。

可よかろう、で、鍍金めっきの奴が腕うでまくりをして、ト睨にらみ合うと、こけ勘しづうちわが洩しづうちわ団扇きつを屹きつとさして、見合つて、見合つてなんて遣やつたんですつて。

表も裏も黒山のような人だからだろうじやありませんか。

晴の勝負でさ。じりじりと寄合つて呼吸いきが揃そろつたから颯さつと引くと、ハツケもノコツタもあつたもんですか。

火の玉め、鍍金めっきの方が年とし紀し上で、私わつしあ仏ぶつの銀次ぎんじだなんて、はじめツから挨拶あいさつが癩しやくに障さやつたもんだから、かねてそのつもりだつたと見えまき。

喧嘩には馴なれてますから素す敏しこい。立つか立たないに、ぴしや  
 ぴしやと、平掌ひらてで銀の横つらツ面ひっぱたを引叩いた、その手が火柱のよう  
 だから堪たまりません。

鍍金の奴、目がくらんで、どたり突つんのめ倒る。見物喝采やんや。愛吉も、  
 どんなもんだと胸を叩いたは可いが、こつちあ蒼あおくなつて、

(何の意趣だ。)

と突つった立ち上ると、

(はり手というんだ。お行司に聞いてみねえ。)

と、空そらうそぶ嘯そぶいて高笑いをしたでしょう。

こけ勘はこけてるから、あツ氣に取られて、黙つてきよろきよ  
 ろしているばかり。

(可し、相撲にや己おれが負けた、刃物で来い。)

とこちらも銀でさ。すぐに店へ駆け出して剃かみそり刀を逆手に取つて構えたでしょう、もう目が据すわつて、唇が土気色。」

「どうしたい。」

「火の玉は真赤まつかになつて、

(何を、何を。)

ツていいながら、左の肩で寸法を取つて、尺取虫のように、じりり、じりり。

(愛吉さん。)

五ごんつく合ふるまわれたお庇かげにや、名も覚えりや、人情ですよ。こけ勘はお里が知れまさ、卜かじぼう楯つかま棒へ搦つかまつた形、腰をふらふらさせ

ながら前のめりに背後うしろから、

(愛吉さん、危あぶえ、危あぶえ、危あぶえ。)

ツて洪団扇で煽あおいだのは、どういふものか、余程よっぽどトツチたよ  
うだったと、見ていたものがいふうんでして、見物まぶわツとなる騒動さわぎ。  
どツちを取とりおさえようにも真剣まけんで、一人は剃刀かみばしだから危あぶうござ  
んす。

その内に火の玉が、鍍金の前いなかを電びかりのような斜はすツかけに土間どまを切  
つて、ひよいと、硝子戸がらすどを出たでしよう。集たかつていたのは、バラ  
バラと散る。

(遁にげるかツ。)

で、鍍金の奴やつが飛びつくと、

(べらぼうめ、いくら山手やまのてだつてこう、赤城に芝居小屋のあつた時分じやねえ、見物の居る前めえいのちで生命の取遣りが出来るかい、向う崖がけの原ツ場ばまでついて来い、殺してやる、来い！)

というさせと前へ立つて駆け出したんで、皆みんながぞろぞろとついて行くと、鍍金の奴は一足おくれで、そのあとへ、こけ勘。

ところがね、おかみさん、いざ原場はらつばの頂上うつつへ薄りと火柱が立つて、愛吉の姿があらわれたとなる。と、こけ勘はいきせい切つて追ひあがりましたが、遠巻にした見物も、二人の徒てあいも、いくら待つても鍍金が来なかつたというじやありませんか。

その筈はずでさ、来ないも道理。どさくさ紛れに、火の玉の身しんしよ上うをふるつた、新しいばりかんを二挺ちようくし、櫛くしが三枚、得物に持つ

た剃刀をそのまま、おまけに、あわせ砥とまで引攪ひっさらつて遁亡フイなんですつて。……

類は友だつていいいますがね、此奴こいつの方が華表とりいかずが多いだけに、火の玉の奴しよいア脊負しよいなげを食つて、消壺しょうへジュウ……へへへ、いい様さまじやありませんか、お互おたがです。」

女房怪けしからず、と剃そつた痕あとに皺しわのまじつた眉まゆを顰ひそめ、

「お互おたがツて、じゃ今来た愛吉あいきちツてのもちよいちよや盗ぬするの。」

「いづれ、そりやね。」

「気味きが悪いね、じろりと様子を見ていづれ後程きざ、は気障きざじやないか。」

「ですからね、何ですよ、気をおつけなさらなくツちや不可いけませ

ん、この頃は恐ろしく、さがり切つていやあがるんでさ。」

## 八

「もつともその何ですよ、開業式の日、ばりかんなんぞ盗まれたのが、けちのついた印なんでさ。焼やけを起してあくる朝、おまんまを抜きにしてすぐに昼寝で、日が暮れると向うの飯屋へ食いに行つて、また煽あおりつけた。帰りがけに、（おう、翌あした日ツから、時分時にや、ちよいと御飯おまんまですよツて声をかけてくんねえよ。三度々々食いに来ら。茶碗と箸はしは借りて行くぜ、こいつを持って駆出して来るから、）

ツて、両手に片々ずつ持つて帰った。妙なことをすると、  
 内へ帰つて、どたり大胡坐おおあぐらを搔込んでね、燈あかりは店だけの、薄暗  
 い汚い六畳で、その茶碗のふちを叩きながら、トテトンツツトン、  
 不孝ものだが相談ずくで、

酒になりなよ江戸の水。

なんて出鱈目でたらめに怒鳴るんですつて、——コリヤコリヤと囃はやして  
 ね、やがて高たかい 軒びき、勿論ひとり唯ツきり一人。

「呆あきれた奴だねえ。」

「から箸にも棒にもかかるんじやありません。私わつしなんぞが参りま  
 すと、にごり屋のかみさんが沁しみ々じみ愚痴をいいますがね、勘定は  
 いうまでもなく悪いんです、——連つれを引張ひっぱつて来りやきつと喧嘩。

そうかと思うと、そこいらの乞食小僧を、三人四人、むくんだ  
 茄子なすのどぶ漬のような餓鬼を、どろどろと連込んで、食いねえ食  
 いねえツて、煮ツころばしの湯気の立つお芋を餌えに買ツて、ニヤ  
 ニヤ笑いながら、ぐびりぐびり。

何でもそいつらを手馴てなずけて、掏摸すりや放火つけびを教えようツていうん  
 です。かかつたもんじゃありませんや。

ところがね、おかみさん、女ツてものは不思議とこう、妙に意  
 固地なもんで。四丁目の角におふくろと二人で蜆しじみ、蠣かきを剥むいてい  
 ます、お福ツて、ちよいとぼツとりしした蛤はまぐりがね、顔なんぞ剃ありに  
 行つたのが、どうした拍子か、剃毛そりげの溜たまつた土間へころりと落おち  
 たでさ——兇きようじようもち状じよう持もちには心しんから惚ほれて、「

と密そつと言つて厭いやな顔がん色しよく、ちと遺恨があるらしい。

「(愛吉さん、詰らないもんですが、)

なんてやがって、手拭てぬぐいや巻煙草まきたばこを運びませ。

いつか中も、前垂まえだれの下から、目筈めざるを出して、

(お菜かずになさいな、)

と硝子戸がらすどを開けて、湯あがりの顔を出す、とおかみさん。

珍らしく夜延よなべでもする気がして、火の玉め洋燈ランプの心を吹きなが

ら、呼吸いきで点れともそうに火をつけていた処。

(入へッて遊びねえ、遊びねえよ。)

ツたが、初心うぶですからね、うじうじ嬌態しなをやっていた、とお思

いなさい。

いきなり、手をのぼすと、その新造しんぞの胸倉むねぐらを打ぶ拵つかめえて、ぐいと引摺ひきずり込みながら硝子戸がらすどを片手でぴツしやり。持っていた洋ラ燈ンブの火屋ほやが、パチン微塵みじん、真暗まつくらになったから、様子を見ていた裏長屋のかみさんが、何ですぜ、殺すのか、取って食うのか、生な血まを吸うのかと思つたつていうんですぜ。

やがて何ですとさ、火の玉の野郎が台所口から廻つて、のそのそ戸外おもてへ出て行くから、密そつとそのあとを覗のぞくと、新造がね、薄暗うすくい中にぼんやり幽霊のように坐っていましたッて。

愛の奴はどこへ行つたらうと思つと、お定りのにぎり屋。

(おう、媽かかあ々が出来たから、今日は内で飯を喰うんだ、道具を貸してくんねえ、)

とまず七輪を一つ運んだでさ。あとで鍋に醤油を入れてもらつて、茶碗を二ツ、箸二人前。もう一つ借込んだ皿にね、帰りがけにそれでも一軒隣の餅菓子屋で、鹿の子と大福を五銭が処買つたんですつて、鬼の涙で、こりや新造へ御馳走をしたんですとさ。

そら、食いねえは可いが、燈あかりは点けたそうですけれど、火屋なしの裸火。むんむと瓦斯がすのあがるやつを、店から引摺つて来た、毛だらけの椅子の上へ。達引たてひかれたむき身をじわじわ、とやって、  
 (阿魔あま、やい、注ついでくりや。)

と前はだけの平胡坐ひらあぐら、ぬいと腕まくりで突出したのが飯喰茶碗。

五合ごんつくを三杯半に平げると、

(こう、向うへ行つて、取つて来い、)

は乱暴じゃありませんか。

打たれそうだから、おどおどして、白鳥を持って立ちにや立つたが、極きまりの悪そうに、うつむいた、腰のあたりを、ドンと蹴上げたから堪たまりませんや。」

## 九

「(あれ)といつてどたり横倒れになつて、わツと袂たもとを噛かんで泣くと、

(三日辛抱が出来るかい、べらぼうめ、帰れ、)

とばかりで、蹴つけた脚を投出したまんま、あおむ 仰向けにふんぞり返つて、ええ、いびき 軋び。

その筈で、はず 愛の奴だつて、まさか焼跡の芥溜ごみためから湧わいて出たげじげじ 蝮へびじゃありません。十月腹を貸した母親がありましたね。こりや何ですつて、つくだしま 佃島いづまの弁天様の鳥居前に一人でよしずばり 葦簀張あしすぢを出しているんですつて。

冬枯れの寒さあたり中毒で、茶釜の下に島の朝煙の立たない時があつても、まるで寄ツつかず、不幸な奴ツちやねえけれど、それでも、（大島の磯へ出て、日本の船を見い見いたした時にや、おつかあ、めえ お前めえを思い出した、）

と今度店を持った折に、一所になろうツていったそうですが、

どうして肯入きぎいれるもんですか、子を見ること何とかというわけで、三日酒のまず、喧嘩をしないでいたら、世話になろうといいましたとさ。

どんなもんです。

考えて御覧なさい、第一その新造なんざ、名からして相性があわねえんです、お福なんて。

彼奴あいつが相当に、抱ツこで夜さり寝ようというのは、こけ勘が相応なんで、その夜なしの貧乏神は縁があつたと見えまして、狐床の序開き、喧嘩以来、寝泊りをしていたんです。

お福ツ子は倒れたなり、突伏つつぶしていましたツて。先刻さつき餅菓子を買われた時、嬉しそうに莞爾にっこりして、酌をする前に、それでも自

分で立つて、台所の戸障子を閉めて、四辺あたりを見たから、その時は戸袋へ附着くつついて、色ツぽい新造の目を遣過やりすごしておいて、閉めて入ったことを、破れた透間すきまから、卜覗のぞいていた、その裏長屋のみさんが、堪たまらなくなつたでしよう。」

「そうだろうともさ。」

「そこで何です。見るに見かねて、密そつと入つて、お福ツ子の背中を叩いて、しくしく泣いているのを手を引いてね、台所口から連れ出したは可いいが、店から入つたんで跣足はだしでしょう。」

それまで世話をして、女房かみさんがね、下駄をつまんで、枕頭まくらもとを通り抜けたのも、何にも知らず、愛の奴は他愛なし。

それから路々宥なだめたり、賺すかしたり、利害を説くやら、意見をす

るやら、どうやら、こうやら。

でもまあ、目白下の寄席の辻看板のあかりで、ようよう顔へあてた袖をはずして、恥かしそうに莞爾にっこりしたのを見て、安心をして帰ったそうですが、——不安心なのは火の玉の茅屋あばらやで。

奴やつこ裸火の下に大の字だから、何、本人はどうでもいいとして、近所ちかから、火の元が危いんでね、乗りかかった船だ、また台所から入って見ると、平気なもんで、ぐうす、ぐうすう。

鼠ねずみが攫さらったか、それとも長屋うちの腕白がしよこなめたか、五錢が餅菓子一つもなし。

から、だらしがねえにも何にも。

そこで、火の用心に、洋燈ランプはフツと消したんですが、七輪の鍋

下の始末をしなかつたのが大ぬかり。

もつとも火のある事は気がついたそうですが、夜中にや、こけ勘が帰つて来る。それまでは隣家となりの内が、内職をして起きている、と一つにや流ながしもと元もとに水のない男世帯、面倒さも面倒なりで、そのままにして置きました。さあ、これが大変。」

「失火やったかい。」と膝の進むを覚え、火鉢うしろを後に、先刻さつきから摺ずつて出て、聞きながら一服しようとする。心を得て、若い衆しゅが拭ぬぐつて返した、長煙管を、ほとんど無意識に受け取つて、煙草盆を引寄せる。

若いものも台所へ下した流ながしの板から、橋を架けた形で乗り出し、「お前さん、とうとう小火ぼやです。」

「ね、行やつたろう。」

果せるかなと煙管をト——ン、

「ふう、」と頷うなずきながら煙を吹く。

「夜中の事で。江戸川縁べりに植えたのと違つて、町の青柳と桜木は、間が離れておりますから、この辺じや別に騒さわぎはしませんでしたが、ついこの月はじめの事です。」

「私やもうぼけてしまつて物わすれをするからね、確たしかには覚えていないが、お待ちよ、そういや、お湯屋でちらりと聞いたようにも思うね。」

「は、何なんしろ居まわり大騒動。」

## 十

「いずれそれ、焦ッ臭い焦ッ臭いがはじまりでさ。隣から起て出ると、向うでも戸を開ける。表通じや牛込辺の帰りらしい紋付などが立留まる。鍋焼が来て荷をおろす。瞬く間にひま十四五人、ぶらぶらとあっちへこつちへ。暗やみの晩でね、空を見るのもありや、羽目板を撫でるのもあり。

その内に、例のかみさんが起きて出て、きつとだよ、それじゃ、とすぐに狐床の前へ行つた時分にや、もう蒸気を吐くように壁を絞けむつて煙が出るんで、けたたましい金切声で床屋さん、親方！とこんな時だけの親方、喚わめいても寂しんとして返事がないんで、構わ

ず打壊せツて、氣疾きばやなのががらりと開けると、中は真赤まっか、紅色べにいろに颯さつと透通すうるように光つて、一畳ばかり丸くこう、畳の目が一ツ一ツ見えるようだツたてこツてす。

台所へ行く柱ゆなんざ、半分がた火になつて障子の棧かをちよろちよると、火の鼠ねずが伝つたうように嘗なめてました。と哄どつと、皆みんなが躍り込こむと、店へ下り口くちを塞ふさいで、尻しつをくるりと引捲ひんまくつて、真俯まうつぶ伏せに、土間へ腹はらを押おツつけて長くなつてのたくツていたのが野郎やろうで、蹴けなぐつて横よこへ匆はねた袷あわせの裾すそなんざ、じりじり焦やけていましたとさ。

此奴こいつもう黒焼くろやきけかと思おもうと、そうじゃないんで、そら通とれますまい、構かまわず踏ふんで、飛とび上あつた人があつたそうです。

すると、しやツきりと起きました。

(や、なぐり込みに来やがったな、さ、殺せ、) というと、椅子を取って引立てて、脚を掴んでぐんと揮つた。一番乗りの火がかりは、水はなし、続く者なし、火の玉は突立ったり、この時、戸が開いたのと、人あおりで、それまで、火で描いた遠見の山のようだった。蒸焼のあたり一面、めらめらとこう掌をあけたように炎になったから、わツというど、うしろ飛びに退つちまつたそうですよ。

(来やがれ、此奴等、一足でも寄つて見ろ。)

と炎を脊負つて、突立つて椅子をぐるぐるとまわすんですつさ。何でも小石川の床店の組合が、殺みに来たと思つたんだそうで、

奴は寝耳で夢中でさ、その癖、燃えてる火のあかりで、ぼんやり詰めかけてる人形ひとがたが認みえたんでしよう。煙けむが目口へ入るのも、何の事はありません、咽喉のどを締められるんだぐらいに思ったそう  
でね。

あとで聞いたたら、大勢につかまって焼殺される夢を見ていた処ですって、そうでしょう。寝返ねがえりに七輪を蹴倒して、それから燃え出して、裾へうつる時分に、熱いから土間へころがって、腹を冷していたんだそうで。巡査おまわりの姿が、ずツと出た時、はじめて  
我に返ったか、どさくさ紛れに影が消えたそうですが、どこまで乱脈だか分かりません。火の玉め、悠々落着いて井戸端へまわって  
出て、近所隣から我れさきに持ち出した、ばけつを一箇ひとつ、一杯汲く

み込んで提げたは可いが、汝うぬが家の燃えるのに、そいつを消そうとするんじゃないんで。店先に込合っている大勢の弥次馬うしろの背後へ廻つて、トねらいをつけて、天窓あたまともいわず、肩ともいわず、羽織ともいわず、ざぶり、滝の水。」

「大変だ、」と女房。

「そら、ポンプだ、というところからからと高笑いで、水だらけの人間が総崩れになる中を澄まして通つて、井戸端へ引返ひっかえして、ウイなんて酔醒よいざめの胸のすくおくび曖ひとだかでね、すぐにまた汲み込むと、提げて行くんです。後からあとから人集りひとだかでしょう。直すぐにざぶり！

差配おおよの天窓へ見当をつけたが狛犬こまいぬへ驟雨ゆうだちがかかるようで、一番面白うございました、と向うのにこり屋へ来て高話をしますと

ね。火事場にや見物が多いから気が咎めるかして、誰も更あつたまつて喧嘩を買つて出るものはなし、交番へ聞えたつて、水で消さずに何で消す、おまけに自分の内だといや、それで済むから持ったもんです。

ところが済まないのは差配おおやの方です。悪たれ店子たなこの上に店賃は取れず、瘡やせた鱗うわばみでも地内に飼つて置くようなもんですから、もう疾とくにも追出しそんなものを、変つた爺おやじで、新造が惚ほれるようじや見処があるなんてね、薬罐やかんをさましていたそうですが、御覧なさい。愛吉が弥次馬に水を浴びせている内に、長屋中では火を消して、天井へもつかないで納まったにや納まりましたが、その晩ていたらくの為おぞけ体には怖毛を震つて、さて立退たちひいて貰いましたよ、御近所

の前もある、と店立たなだての談判にかかりますとね、引越賃でもゆるる気か、酔のこんにやくので動きませんや。」

## 十一

「じゃ仕方がない。こういうこともあろうためだ、路は遠し、大儀ながら店請たなうけの方へ掛け合おうと、差配おおやさん、ぱつちの裾をからげにかかると、愛の奴やつのうろたえさ加減ツたらなかつたそうである。その店請というのは、何ですよ。兜かぶと町ちようの裏にまだ犬の屎くそが、あろうという横町の貧乏床で、稲荷いなりの紋三郎てつて、これがね、仕事をなまけるのと、飲むことを教えた愛吉の親方でさ。

だから狐床ツてくらいなんで。鯨しやちほこに鯪しやちほこ、末社に稲荷。これに逢  
 っちゃ叶いません。その癖奴が、どんな乱暴を働いたつて、仲間  
 うちから、いくら尻を持って行つても、うけはしないんですがね。  
 対手あいてが差配おおやさんなり、稲荷は店請の義理があるから、てツきり  
 剣呑みと思つたそうで、家主の蕎麦屋そばやから配つて来た、引越ひきこの蒸せ  
 籠いろろうのようだ、唯ただいま今あけます、とほうほうの体で引退ひきさがつたん  
 で。これで、梟けりがつけば、今時ここらをうろつくこともないんで  
 すが、名は体をあらわ顕あらわしますよ。

止せば可いに、この貧乏くじをまた自分で買って出たのが、こ  
 け勘そこつなんでさ。

(先晩の麩そこつ忽そこつは、不残のこらず手前でごございます。愛吉さんは宵から寝

ていて何にも知りやしねえもんですから、申訳のために手前が身体からだを退ひきます。ツて、言いつたでしよう。

差配さばいの癖くせに、近所きんじよじや、掛売かゐを厭いやがるほど、評判ひやうばんの工面こうめんの悪い親仁おやしだからねえ、これをまたのみこむ奴やつでさ。

（貴様あなたは何だ、おらがの内の、汽車くるまぎらいな婆ばあさんを積たく込んで、小火ぼやのあつた日から泊とりがけに成田なりたへ行いつていた男おとこだけけれど、申まを訳しを脊負しよつて立たつて、床屋とどろを退散たいさんに及およぶというなら、可よ々し心得こころえた。御近所ごきんじよへ義理ぎりは済すむ。）

と、くだらねえじやありませんか。

何なにだつて意固地いこちな奴等やつら、放火ひつけ盗賊たうそく、ちよツくらもち、掏摸すりの兄あ哥にい、三枚目さんまいめのゆすりの肩かたを持つもつんでしよう。

どうです、おかみさん、そういつた奴ですからね、どうせ碌な  
こツちや来やしません。いづれ幾干か飲代でございましょう。  
それとも、お嬢と、おかみさん、二人へ御婦人ばかりだから、ま  
た仕事でもしようというんで様子でも見に来せやあがったか。

から段々落ちに、酒も人間も悪くなつて、この節じゃ、まるで

狂やまいぬ犬のようですから、何をどう食ツてかかろうも知れませんや。

何なんしろ火の玉なんでね。彼奴あいつの身体からだのこすりついた処は、そこか

ら焦げねえじや治まらんとしてあるんで。へい鼬いたちが鳴いてもお呪ま

禁じないに、柄杓ひしゃくで三杯流すんですから、おかみさん、さつさと塩

花をお撒まきなさいまし。おかみさん、」

といったが、黙っている。

「え、おかみさん。」

頸うなじを垂れて屈託そう、眉毛のあとが著るしく顰ひそんで、熟じつと小首を傾けたり。はてこの様子では茶も菓子もと悟ったが、そのまま身退くことを不得えざ。もう一呼吸ひといきずるりと乗出し、

「何、また何でさ、私わつしどもが、しばらく見張わっていてお上げ申しても宜いいでさ。いよいよとなりますりや、内にや、親方も、今日はどこへも出ないでいるんで、」

「いいえね。」

と女房は、煙管の鴈首がんくびを、畳に長くうつむけたるまま、心ここにあらずでもなかつたらしい。

「いくらか、飲代どころなら構かまいはしないけれど、お前さんの話

しぶりでもその今の愛吉とかいう若い衆しゅが、火の玉だの、火柱だの、炎だの、小火ぼやだの、と厭いとにこだわっているから心配なんだよ。はてな、」と沈んで目を閉じる。

「へい、気になりますかね、何ぞ……」

「どうもね。心配なのさ、こうやってお前、私がおもりをしている方はね、妙に火たに崇たられていなさるのさ、いえね、丙ひのえうま 午うまの年でも何でもおあんなさりやしないけれど、私が心でそう思うの、二度までも焼け出されておいでなさるんだからね、」

「どこで、へい？」

「一度は、深川さ、私たちも風説うわさに聞いて知っているが、木場一番といわれた御身代がそれで分散をなすつたような、丸焼。

二度目が日本橋の人形町で、柳屋といってね、……」

## 十二

「もうその時分は、大旦那がお亡くなんなすったあとで、御新姐ごしんぞさんと今のお嬢さんとお二人、小体こていに絵草紙屋をしておいでなすった。そこでもお前火災にお逢いなすったんだろうじゃないか。

もつともその時の火事は、お宅からじゃなくって、貰い火でおあんなすったそうだけれど、ついお向うの気の違つた婆さんの許とこから、夜の十二時というのに燃え出すと、直ぐにお店へあおりつけたもんだから、それという間もなし、それにお前さん、御新姐

は煩つていらしたそうだし、お生命いのちに別条がなかつただけで、お嬢さんも身体からだばかり、跣足はだしでお遁にげなすつたそうなんだよ。「へい、それで何ですか、こつちの方へお引越しなすつたんですかね。」

「いいえ、三年前の秋の事さ、その後御新姐のちさんもお亡なくなんなすつたそうだもの、やっぱり御病氣の処へ、そんなこんなが障つてさ。」

旦那様もまたそうなんだよ。火事で、それだけの身代けむが煙けむになつた御心配から起つた御病氣だろうじゃないか。だからほんとに火は祟かつているんだよ。」

と何となく声も打沈んでいったのであつた。

この扇屋の焼けた時、新聞に黒くなって描かれた焼あとの地図も、もうどこかの壁の破れに貼はられたろう。家も残らず建揃った上、市区改正に就つて、道は南北に拡がった、小路、新道しんみち、横町よこまちの状さまも異かわったから、何のなごりも留とどめぬが、ただ当時絵草紙屋の、下町のこの辺にも類たぐいなく美しいのが、雪で炎を撫なずるよう、見る目にも危あやういまで、ともすれば門かどの柳の淡き影さす店みせ頭さきに亘たらず、とさかに頬ほ摺おすりする事のあつた、およそ小さな鹿ほどはあつた一羽との軍とう鶏まる。

名を蔵くら人蔵んど人といつて、酒屋の御用の胸板のけぞを仰の反げらせ、豆腐屋の遁にげ腰こしを怯おびしたのが、焼ける前から宵よい啼なきという忌いまわしいことをした。火沙汰ひざたの前兆である、といったのが、七日目の夜中なぬかに

不幸にして的中した事と。

当夜の火元は柳屋ではなく、かえつてその不祥の兆きざしに神経を悩まして、もの狂わしく、井戸端で火難消滅の水垢離みずごりを取つて、裸は体だかのまま表通まで駆け出すこともあつた、天理教信心の婆々ばばの内そそうびの麁匆火であつた事と。

それから、数万の人ごみ、軍いくさのような火事場の中を、どこを飛んだか、潜くぐつたか、柳屋の柳にかけた、賽さいが一箇ひとつ、夜よのしらしらあけの頃、両国橋をころころと、邪慳じゃけんな通行人の足に蹴られて、五が出て、三が出て、六が出て、ポンと欄干から大川へ流れたのを、橋向うへ引揚げる時五番組の消防夫しごとしが見た事と。

及び軍鷄とうまるも、その柳屋の母娘おやこも、その後行方のちの知れない事と

は、同時に焼けた、大屋の隠居、酒屋の亭主などは、まだ一ツ話にするが、その人々の家も、新築を知らぬ孫が出来て、二度目の扁額が早や古びを持って来たから、さてもしばらくになった。

「じゃ、お内のお嬢さんは柳屋さんというんですね、屋号ですね、お門かどふだ札の山下お賤しずさんというのが、では御本名で。」

「いいえさ、そりや私の名だあね。」

「おかみさんの？　そうですかね。」とちとおもわくのはずれたかおつき顔色。こんなのはその手に結んだ紅毛糸べにの下に、賤という字を書いてはってあろうも知れぬ。

「だって、私だって名ぐらいはあろうじやないか。」と鉄漿かねつけた歯を洩もらしたが、笑うのも浮きたたぬは、渾名あだなを火の玉と聞い

たのが余程気になったものであろう。

やつこ  
奴そんな事は無頓着で、

「へへへ、そりや何、そりやそうですが、じやお嬢さんは何とおしやるんでございますね。」

「お夏さんさ。」

「お夏さん？」

あだ  
「婀娜な佳いお名だろう。」

「すると姓は何とおっしゃるんで、柳屋は、何でしょう絵草紙屋をなすつた時の屋号でしょう。で、何ですか、焼け出されなすつてから、そこで、まあ御娼売、」

「御商売？」と聞き直した目の上に、嶮も、ああ今は皺しわになった。

「深川の方で、ええ、その洲崎すざきの方で、」

女房聞くや否や、ちと高調子に、

「お前、何をいうんだね。」

「だって、おかみさんは何でしょう、弁天町に居たんでしよう。

やまのて山手だってそのくらいな事は心得てるものがありますぜ、ちや

んと探索が届いてまさ。」

いささか軽かろんずる色があつて、ニヤニヤと頤あごを撫でる。女房お

賤はこれにはびくともせず、自若として、

「ああ、そうさ、私は、そうさ。ちつとね、お客さまをお送り申していたんだがね。落ちたといつちや勿体ない、悪所から根を抜いて、お庇かげさまでこうやって、おもりをしているんだがね。お嬢

さんが、洲崎になんぞ、お前、そんなことをおくびに出したつて済まないよ。素しらの堅しら気でいらつしやらあね。」

「ですからさ、皆みんなが不思議だツていつてるんで。いずれこうちよいちよいこのお二階へいらつしやる方があるツてのは、そりや分つていますけれど、どうもそのお嬢さんの御身分が分りませんが、ええ、おかみさん。」

### 十三

「ねえおかみさん、可いいじやありませんか、町内のこツてさ、話してお聞かせなさいよ、ええ、おかみさん。」

早やいつの間にか自堕落に、板の間に腹はらんば這いになった。対手あいて

がソレ者と心安だてに頤あごづえ杖ついで見上げる顔を、あたかもそれ、  
わか少い遊おいらん女の初会しよかいぼれ惚を洞察するとう目色めつき、瘦やせた頬をふツく  
 りと、凄すげいが優すげらしい笑を含んで熟じつと視ながめ、

「こりやお前さん、お錢あしにするね。」

「え、」

「旨うまく手繰うまつて聞き出したら、天井でも御馳走ごちそうになるんだろう。  
 厭いやだよ、どこの誰はに憚はって秘かくすツということはないけれども、そ  
 りや不可いけないや。」

「嘘々々、」

口とがを尖らせ、慌とがてた早口、

「串、串戲じょうだんをいっちや不可ません。誰がそんな、だつてお前

さん、火の玉の一件じゃありませんか。ええ、おかみさん。

私等わつしたちが口を利くにやこつちの姉さんの氏素性来歴を、ちやんと

吞込んでいなかつた日にや、いざつて場合に、二の句が続かない  
だろうじやありませんか。」

「それだよ、その事だよ、何も、押借おしがりや強談ゆすりなら、」

しかり、押借や強談なら、引手茶屋の女房の、ものの数ともし  
ないのであつた。

「別に心配な条すじじやないがね、風説うわさを聞いたばかりでも火沙汰が  
ありそうなのが氣になるのさ。余り老込んだ取越苦勞じやあるけ  
れどね、火事にや上が危いから、それとなく二階にはお寝かし申

さないようにしているんだからね。」

氣きがかり懸かなのはこればかり。若干いくらか、お錢あしにするだろう、と眼光

炬きよのごとく、賭物かけものの天井を照らした意氣さかんの壮なるに似ず、いいかけて早や物思う。

思う壺と、煙草盆のふちを、ぱちぱちと指で弾はじいて、敗軍一時に盛り返し、

「火沙汰、火沙汰！ どうせ、ゆすりのかたりのと、氣の利いた役者じゃありませんや、きつと放火つげびだ、放火だ、放火だ。」

ばたばた足の責太鼓、鑿とうとう々と打鳴らいて、かツかと笑い、

「何、それも、どさくさ紛れに葛籠つづらたんす箆しよを脊負しよい出そうツて働きのあるんじやありませんがね、下がった袷あわせのじんじん端折ぼしよりで、

唧筒ポンプの手につかまって、空腹すきはらで喘ぎあえながら、油揚あぶら揚げのお煮染で、お余を一合戴きたいが精せい充満いっぱいだ。それでも火事にや火事ですぜ。ね、おかみさん、だからどうにかしますから、お話しなさいよ。でなけりや、明日ともいわないで火の玉がころげ込みますぜ。放つ火けびだ、放火だ、放火だ、

と尻上りに畳みかけて、足を上下へばたばたと遣つたが、「あ、」というのとたちまち寂滅ひっそり。

むつくり飛上つたかと半身を起して捻向ねじむく氣勢けはい。女房も、思案に落した煙管を杖ひと。斉ひとしく見遣つた、台所の腰障子、いつの間に細目に開いて、ぬうと赤黒い脛すねが一本。赤大名の城が落ちて、木曾殿打たれたまいぬ、と溝どぶの中で鳴きそうな、どくどくの裕あわせの

棲、膝を払つて蹴返した、太刀疵、鍵裂、弾疵、焼穴、霰のよ  
 うにばらばらある、態も、振も、今の先刻。殊に小火を出した物  
 語。その時の焼つ焦、まだ脱ぎ更えず、と見て取る胸に、背後に  
 炎を負いながら、土間に突伏して腹を冷した酔んだくれの倅さえ  
 歴々と影が透いて、女房は慄然とする。奴は絵に在る支那兵の、  
 腰を抜いたと同おんなじ一形で、肩のあたりで両手を開いて、一ひと縮み  
 になつた仕事着の裾すそに日くあり。戸外おもてから愛吉が、足の※指おやゆびの股  
 へ挟んで、ぐツとそつちへ引くのであつた。

腰をずるずるずると、台所の板に摺すらして、女房の居る敷  
 居の方へ後しりごみ込こみ込こみしながら震え声で、

「串、串じょうだん戯ごをするな、誰だ、誰だよ、御串戯もんですぜ。藪やぶか

ら棒に土足を突込みやがって、人、人の裾を引張るなんて、土、土足でよ、足、足ですよ、失礼じゃねえか、何、何だな、誰、誰だな。」

障子の外で中音に、

「放火よ。」

「や！」

## 十四

蒼あおくなつて、咽喉のどで、ムウと呼吸いきを詰め、

「愛吉さんか、まあ、お入んなさい、煙草たばこがあります。」

うろ　うろみまわ　す目が坐らず、

「おかみさんもお在いでなさらあ、お入いんなさい。」

「うんや、こう、お友達、お有ありがと難がとうよ。汝てめえにすっかり棚おろしをされちまつちや、江戸中は構かまわねえが、こちら様つらばかりや、面つらが出せねえ、やい。

出ろ、こん畜生。

出ろ！」

というど、ぐいと引くのと同時であつた。足の指に力はないが、氣に打たれたか、ひよいと腰、ひよろり板の間の縁が放れて、腰障子へふツと附くつ着つく。

途端に、猿えんぴ臂びがぬツくと出て、腕でむずと驚わしづか掴かみ、すらりと

開けたが片手業、疾いこと！ ぴっしやりと閉ると、路地で泣声。

「御免なさい、御免なさい。」

というのが聞える。膝を立てて煙管について伸上った女房は、八ツ下りの日が明るく、あかり窓から、てらてらと自分の前垂にも射して、ほこりのない、静な勝手を見るばかり。

戸の外で二ツ三ツ、ばたばたと音がする。

「堪えて下さい、堪えたまえ、愛吉さん、愛吉さん、」

「堪えた、堪えたとも。こう私アな、生れてから今日ほどものを堪えたことはねえんだ。ははははは、」

と高笑を鼻に取って、

「へ、へ、堪えて大概聞いていたんだ。お友達、おい、お友達、

てめえ  
 汝が口で饒舌しやべつた事を、もしか、ひとこと一言でも忘れたらな、私あつしに聞きねえ、けちりんも残らずおさらいをして見せてやらい。こん、

畜生、」

「苦あツ」

「あれ、お前さん方、そこで喧嘩をしちや困りますよ。」

女房は思わず立つた。

「おかみさん、」

と奴やつこ、弱よわい事、救すくいを呼ぶ。

「来やがれ、さあ、戸外おもてへ歩べ。生命いのちを取るんじやねえからな、

ひとどおり  
 人通ひとどおりのある処ところが可いいや、握にぎりこぶし拳こぶしで坊主にして、お立合たちあい

お目に掛けよう。来やがれ、」

ざらざらと落葉を踏む音。此方の一間と壁を隔てた、隣の平家との廂合へ入って、しばらく登音が聞えなくなつた。が、やがて胸倉を取つて格子戸の傍の横町へ揉んで出たのを、女房は次の座敷へ行つて、往来に向いた出窓の障子から伸上つて透かして見た。

その間に、座敷中を行つたり、来たり、勝手口から出ようとして、上<sup>あがり</sup>框<sup>がまち</sup>を開けようとして、止めたり、引返して坐つたり、煙草を呑もうとしたり、見合わせたり、とやかく係合いに氣を揉んだのは事実で。……うっかり長煙管を提げたツきり。

ト向うが勲三等ぐらいな立派な冠木門。左がその黒堀で、右がその生垣。ずつと続いて護国寺の通りへ、折廻した大<sup>おお</sup>構<sup>がまえ</sup>の

地じつづき続で。

こつち側は、その生垣と向い合つた、しもた家やで、その隣がまたしもたや、中に池の坊活いけばな花の教授、とある看板のかかつた内が、五六段石段を上つてあが高い。その竹垣を隔てて、角家がト○の中に（の）を大く（あり）と細筆で書いたのを通へ向けて、掛けてある荒物店みせ。斜はすかけに、湯屋の白木の格子戸が見える。

椿、柳、梅、桜、花の師匠が背戸と、冠木門の庭とは、草も樹も、花ものを、枝も茎にたわわに咲かせて、これを派手に、わざと低い生垣にし、——まばらな竹垣にしたほどあつて、春夏秋の眺めが深く、落葉も、笹の葉の乱れもない、綺麗きれいに掃いたような小路である。

時に、露、時雨、霜と乾いて、日は晴れながら廂の影、ひさし 自おのずか

然らなる冬構がまえ。朝虹の色寒かりしより以来このかた、狂いと、乱れと咲

きかさなり、黄白の輪揺ようえい曳して、小路の空は菊の薄雲。

ただそれよりもしおらしいのは、お夏が宿の庭に咲いた、初はつも

元結とゆいの小菊の紫。蝶の翼の狩衣かりぎぬして、櫛れんじ子に据えた机の前、

縁の彼方あなたにたたずむ風情。月出でたらば影動きて、衣紋えもん竹なる不断

着の、翁おきな格子なごうしの籬まがきをたよりに、羽織の袖に映るであろう。

内の小庭を東に隣となつて、次第に家の数が増して、商家はないが

向い向い、小児こどもの泣くのも聞ゆれば、牛乳屋で牛がモウモウ。――

――いや、そこどころでない、喧嘩だ。喧嘩だ！

## 十五

赤大名のずたずたあわせが、廂ひあわい合を先へ出ると、あとから前のめりに泳ぎ出した、白の仕事着の胸倉をつか掴んだまま、小路うちの中で、

「ええ、」

と小突いて、入いりかわ交つて、向むかいの生垣に押つけたが、蒼やっこざめた奴の顔が、赫かっと燃えて見えたのは、咽喉のんどを絞められたものである。

女房はハツと思つた。

「みみずやろう蚯蚓野郎、ありツたけ、腹の泥を吐いツちまえ。」

「う、」

と唸うなつて、足をばたばたともがく状を、苦笑いで、睨ねめつけなが

ら、手繰つて手元へドン、と引くと、たこ 尻かと見えて面くらう、自分よりは上背も幅もあるのを、糸目を取つて絞つた形。今度は更に小路の中途に突つ立たたせた。

「わ、わ、」

と大おおな口おきを開あいて、ふうふうと呼い吸きをはずませ、拝はみたそうな手て附づをする。

此こ方なたは屹きと二の腕うでから条すじを入いれた握にぎり拳こぶしを、一文字に衝つと伸のした。

女房は思おもわず伸の上の上の顔かほを出いして、またハツと思おもつた、腹はらの裡うちで、

「ああ、悪い処へ……」

がらがらと車が来て、花の師匠の前で留まった。内まで引きつけでもする事か！

「さ、お立合、この泣ッ面を御覧じろ。」

と、あわや打据えんとしつっ前後あとさきを見た無法ものは、フトその母衣ほろうちの中に目を注いだ。

これより前さき、湯屋の坂上の蒼空あおぞらから鬢たなびく菊の影の中、路地へ乗り入れたその車。鬢まげの島田の気高いまで、胸を屹きと据えていたが、母衣に真白な両手が掛かると、前へ屈かがんだ月の倂おもかげ、とばかりあつて、はずみのついた、車は石段で留まったのであつた。

車夫の姿が真直まっすぐに横手に立った。母衣がはらりとうしろへ畳まる。

一目見ると、無法ものの手はぐツたりと下に垂れて、忘れたように、掴んだ奴の咽喉のんどを離した。

身をひるがえ翻すと矢を射るよう、白い姿が、車の横を突切つて、一呼ひと

吸いきに飛んで逃げた。この小路の出口で半身、湯屋の格子を、間あわいの

ある脊後うしろに脊負しよつて、立留つて、此方こなたを覗のぞき込むようにしたが、

赤大名の檻ぼろすがた褻姿、一足二足、そつちへ近づくと見るや否や、フ

イト消えた、垣越のその後姿。ちらちらと見えでもするか。刻苦

精励、およそ数千言を費して、愛吉を女房の前に描き出した奴は、ここに現実した火の玉小僧の姿を立たせて、ただひめのりの看板に、あツけなく消えてしまったのである。

女房は三たびハツと思つた。

無法者が、足を其方そなたに向けて、じりじりと寄るのを避けもしないで、かえつて、膝掛を取つて外すと、小褌こつまも乱さず身を軽く、ひらりと下に下り立つたが。

紺地に白茶で矢筈やはずの細い、お召縮緬めしちりめんの一枚小袖。羽織なし、着流きながしですらりとした中肉中脊。紫地に白菊の半襟。帯は、黒くろじ縹ゆす子と、江戸紫に麻の葉の鹿の子を白。地は縮緬の腹合はらあわせ、心なしのお太鼓で。白く千鳥を飛ばした緋ひの絹縮みの脊負しよいあ上げ。しやんと緊しまった水浅葱みずあさぎ、同模様おなじの帯留で。雪のような天鷲絨とうてんの緒を、初霜薄つまさきき爪かろ先に軽く踏ふまえた南部表なんぶおもて、杵まさきの通つた船底ふなぞ下駄こげた。からからと鳴らしながら、その足袋はぎ、千鳥、菊、白が紺地にちらちらと、浮ゆらいて揺ゆらいでなお冴さゆる、緋もんりんずの紋綾子

の長襦袢。ながじゆばん はらりとひらめく、八ツ口、裳もすそ、こぼれず、落ちず、香を留めて、小路を衝つと駈け寄る姿。

かくてこそ音羽なる青柳町のこの枝道を、式部小路とは名づけたれ。

冠木門の内にも、生垣の内にも、師匠が背戸にも、春は紫すだれの簾をかけて、由縁ゆかりの色は濃こまやかながら、近きあたりの藤坂に対して、これを藤横町ともいわなかつたに。

「愛吉、」

と垣の際。上の椿を濡れて出て、雨の晴間を柳に鳴く、鶯のよな声をかけると、いきなり背後うしろから飛びついて、両手を肩へ。年も三ツ、三年越。火難以来ここにはじめてめぐり逢った。柳屋

のお夏は二十はたちを越した。脊丈さえ、やや伸びて、楽に上から負わ  
 るるように、袖で頸うなじを包んだのである。

もつとも愛吉の身はすくんだから。

## 十六

「愛吉。」

と直ぐ続けて、肩越に臈ろうた長けた、清すずしい目の横顔で差さし覗のぞくよう  
 にしながら、人も世も二人の他ほかにないものか。誰にも心置かぬ状さま  
 に、耳許みみもとにその雪の素顔の口紅。この時この景、天女あり。寂せ  
 然きぜんとして花一輪、狼に散る風情である。

「どうしたの、まあ、しばらくだったわねえ。」

「へい、」とただ呼吸をつくようにいう、悪髪結の垢<sup>あか</sup>じみた裕<sup>あわせ</sup>の肩は、どつきり震えた。

一たび母衣<sup>ほろ</sup>の中なる車上の姿に、つと引寄せられたかと足を其<sup>そ</sup>方<sup>なた</sup>に向けたのが、駆け寄るお夏の身じろぎに、乱れて揺<sup>ゆら</sup>ぐ襦袢の紅<sup>くれない</sup>はツと末<sup>うらがれ</sup>枯<sup>こ</sup>の路の上に、燃え立つを見るや否や、慌ててくるりと背後<sup>うしろむき</sup>向<sup>む</sup>、踵<sup>かかと</sup>を逆に回<sup>めぐ</sup>らしたのを、袖で留められた形になつて、足も地<sup>つち</sup>にはつかずと知るべし。

追っかけて冴えた調子、

「よく来たことねえ、愛吉、」

「へい、」

「逢いたかったわ！」

「へ、」とばかりさえ口に消えた。

お夏はいよいよ爽さわやかに、

「懐しいよ。」

といて、その前髪を、ひやりと肩。片頬かたほを襟うすに埋めた時、

「……………」

腕組をした、しかみツ面。げじげじのような眉が動いて、さも重こなたそうな首を此方に捻ねじむ向けんとして、それも得えせず。酒の汚点しみで痣あざかと思ゆる、皮の焼けた頬を伝うて、こけた頤あぎとへ落涙したのを、先刻さつきから堪たまりかねて、上あがりがまちがまちへもう出て来て、身体からだを橋みまもに釣るばかり、沓くつぬぎ脱の上へ乗り出しながら、格子戸越みまもに瞻みまもった、女房

が見て呆あっけ気けに取られた。

時にお夏の背後うしろへ、密そつと寄つたは、乗せて来た車くるま夫まで。

トもじもじ立迷つたが、横合から、

「お傘を、お嬢様。」

「あいよ、」

その時袖が放れたので、愛吉は傍かたわらに人のあるのを知つて、じろりと車夫の姿を見る。

格子うちの中うちから、

「若わか衆いしさんこちらへ。」

と声をかけて、女房は土間を下りた。

「ええ、こちら様で、」

車夫は、はじめてここがその住居すまいと心着いた風である。

愛吉が、

「寄越よこしねえ、」

で差出した手首は、綻ほころびた袖口をわずかに洩もれたばかりであるが、肩の怒りよう、眼がんの配り、引手ひったくり繰くりそうに見えたので。返事と、指図と、受取ろう、をほとんど三人に同時に言われて、片手に搦こんだ蝙蝠傘ことうもりがさを、くるりと一ツ持直したのを、きよとんとしてみまわしたが、罷まかり違ちがうと殺しそうな、危けん険のんな方かたへまず不取敢とりあえず。

「じゃ、親方、」

「む、」

と取ったが、縷しゆすばり子張のふくれたの。ぐいと胴どうなか中ちゆうを一つ結え

て、白の鞋こはぜで留めたのは、古寺で貸す時雨の傘より、当時はこれが化けそうである。

愛吉は、握にぎりふと 太な柄を取つて、ベそを搔いた口許を上へ反そらして、

「こりや、酷ひどいや、」

「おや、お世話様でございますね。」

と女房は格子を開け、

「貴女あなた、お帰んなさいまし。」

「ああ、ただいま、」といいながら帯をぎゆうと取出した。

小菊の中の紅くれないは、買って帰った鬼灯ほうずきならぬ緋塩瀬ひのおぜの紙入で。  
可愛かわゆき銀貨を定めの賃。

「御苦勞様。」

「お持ちなすつたものはこれツきりかね。」

「や、まだ台函だいばこに、お包が、」とすツ飛んで取りに駆けつけたは、火の玉小僧の風体ふうたいに大分だいぶん怯おびえているらしい。

「酷さいや、お嬢様さん、見つともねえや。こんなものをさして歩行あるいて、こりや、貴女ンですかい。」

「可いいいじやないか。」

と莞爾にっこりしたが、勝山よぎかりの世盛よせには、団扇車こしもとで侍女こしもとが、その湯上りの霞を払った簪かんざしの花の撫子なでしこの露なでしこを厭いとう日覆ひおおいには、よその見る目もあわれであった。

## 十七

「いえ、そりや、あの私んでございますよ、ほほほほ、」  
と女房も寂しい微笑<sup>ほほえみ</sup>。

愛吉心着いて其方<sup>そなた</sup>を見向き、

「ええ、さようで。へへへへへ、先刻はどうも、」

とそれもこれも弱った顔色<sup>かおつき</sup>。

お夏は耳敏<sup>さと</sup>く聞きつけて、

「おや、さつきも来たの。」

女房のいらえぬ前<sup>まへ</sup>、慌てて調子高に愛吉はごまかす気、

「だって、お嬢様<sup>さん</sup>、見ツともないや、」

「可いよ。」

「日、日傘をさしてお歩あ行きなさいな、深張ふかばりでなくつてもです。」

「人が笑いますよ。」

「誰が？ え、何奴どいつが笑うんで、」

と、すぐにひらめく眉の稲妻。

お夏は真面目に、わざと澄いました顔で、

「威張いったって不可いません、」

「それだって、馬鹿ばかンつら。」

「でもさ、」

「何故なぜ、お嬢様、」

「笑う人はね、お前より強いんだもの。喧嘩をしたって負けま  
よ。」

といい得て、花やかに浅笑せんしょうした。お夏さん残らず、御存じ。  
女房思わず吹き出して、

「ほほほほほ、」

狐床の火の玉小僧、馬琴の所謂いわゆる、きはだを管なめたる唾おうしのごと  
く、喟然きぜんとして不言ものいわず。ちようど車夫が唐縮緬の風呂敷包を持  
つて来たから、黙って引手繰るように取った。

「さあ、お入りな。」

後姿でお夏は格子を、

「おばさん、緩ゆつくりだったでしょう、」

女房が前へ立つて、

「お疾はようございましたこと、何は、あの此こ間ないだから行つて見たいツて、おつしやつてでした、佛橋、海晏寺かいあんじや滝の川より見事だツて評判の、大塚の関戸のお邸とやらのもみじの方は、お廻りなすつていらつしやいましたか。」

「いいえ、路順が悪かったから、今日は止したの。」

深川からじや大廻りでね、内の前を二度通るようなもんですもの、出直しましょうと思つて。

でも車だから、かえりはぶらぶら歩行あるきにして、行つて見ようかと思つたんですがね、お茶の水辺あたりまで来ると、何だか頻しきりに気が急せいてね、急いで急いでツていうもんだから、車夫が慌いててさ。

岐き殿どの坂ざかだツたかしら、ちつとこつちへ来る坂下の処で、荷車に一度。ついこの先で牛車に一度、打ぶ附つりそうにしたの。虫が知らせたんだわね、愛吉、お前のお庇かげで、

と入ったまま長火鉢に軽く膝を支ついて、向うへ廻った女房に話しかけたが、この時門口を見返ると、火の玉はまだ入らず、一件の繻子張ひっさを引提ひげながら、横町の土六尺、同おんなじ一処をのそりのそり。

「お入りなね、何をしてるの、愛吉、お入んな、さあ、」  
「お前さんお入んなさいましとき。」

女房のこのときがちと木戸になった。愛吉入いりそびれて、またのそり。

「あら、劍舞をしてるわ、ちよいと、田舎ものが宿を取りはぐしたようで、見つともないよ、私の情いひひと人の癖くせにさ。」

引手茶屋の女房の耳にも、これは破天荒なことをいって、罪のない笑顔を俯うつむ向け、徒いたずらに衝つと火箸で灰へ、言ことばを消した霞に月。

「私の仲なかよし好よしなの、でも役やくざ雑ざつなんです。先さつ刻き来た時とききつとまた威張きつてぞんざいな口でも利きいたんでしよう、それで極きまりが悪わるいんだよ。」

と取とり做なすようにいいながら、再び愛吉を顧かみて、

「馬鹿だわねえ。」

「さあ、お前さん、どうぞ。」といった、これならば入いられる。

「ほんとうになまけもんで仕しようがないの、」

「お、」

「酔ッぱらつちや喧嘩するが商売なの。」

「お嬢、」

「その癖弱いだよ。」

「お嬢さん、」

と行詰つて、目と口を一所に、むッ。突当つたように句切りながら、次第かまににじり込んだかま框の上。

割膝かしこで畏かしこまって、耳を搔うないてすく頸を窘め、貧乏ゆすり一つして、

「へへへ、口の悪いツちやねえ、お嬢ツ公。」

「でも虫が知らせたんだよ。愛吉、お前のお庇かけで、そうやってさ、もうちつとで車が引くりかえりそうになりました。」

「済みませんでございます。」

「済みませんでございます。」と口真似をしたが、何となく品があつた。

「人を馬鹿にしていらつしやら、」

「先刻さつき一度来たんだって、」

「ええ、つい、その、」

額おでこをびつしやりで頸うなじを抱える。

「それではお前、入って待つておいでなら可いいのに、戸外おもてへ出る

もんだから、また掴合いなんかするんだわ。

おばさん、この人はね、なじみ馴染のない町内へ来ると、誰とでも喧嘩をするの、」

とはじめて座につき、火鉢の前に落着いた。お夏もこの時気がついて思わず袖で口を蔽い、

「まあ、」

とばかり、わずかに堪こらえて、

「ほほほ、愛吉、お前、その膝の上の蝙蝠傘こうもりがさをどうにかおしよ  
。」

「ややや」というと、慌てて落した、うっかり膝の上に、ト琴を抱いた姿だった、毛繻子の時代物を急いで掻い取り、ちよいと敷

居の外へ出して、膝小僧を露出しに障子を閉めておさ圧えつけたは、  
よつほど余程とツちたものらしい。

女房は年紀としの功、先刻さつきから愛吉が、お夏に対する挙動を察して、  
 非ず。このわかもの壮佼、強請ゆすりでも、緞さしうり売でも。よしやその渾名あだなのご  
 とき、横に火焰かえんしや車を押し出す天魔のおとしだねであろうとも、  
 この家やに取つては、竈かまどの下を焚たきつくべき、火吹竹に過ぎず、と  
 知つて、立たちどころ処ところに心が融けると、放火ひつけも人殺もお茶うけにして  
 退のけかねない、言語道断の物語を聞く内にも、おぞ毛を震つて、  
 つまはじきをするよりも、むしろいうべからざる一種あわれの憐あわれさを感じ  
 じて、稲妻のごとく、胸間にひらめき渡る同情の念を禁ずること  
 を得なかつた。自分の不思議が疑団氷解。さらりと胸がすくと、

わざとではなかったが、何となく無愛想にあしらったのが、こ  
こで大いに気の毒になったので。

「まったくねえ、お前さん、溜池ためいけから湧わいて出て、新開の埋立  
地で育ったんですから、私はそんなに大した事だとも思いません  
でしたが、成程、考えて見ると、そのお持物は、こりやちと変で  
したね。

もうね結構なものとは思わないけれど、今朝お出かけの空模様  
じゃ、きつと降ろうとも思われませんし、そうかって、一雨来な  
いでもないようだったもんですから、傘もお荷物と思つて、つい  
それをね、お嬢さんもまた、澄してさしていらつしやるんだもの  
。」「歎息するものごとし。

「ですから、何でさ、日傘をおさしなさりや可いというんじやありませんか。」

「愛吉、笑うというのにね、」

「いえさ、ですから、誰が、」と直ぐ力む。

「でも何ですよ、この辺じや不思議がりますよ。」

私もね、ありようは持っていますね、つくだしま 佃 島 へおまいりを

する時ぐらいしか使わないもんですからね、今でも、通用するだろうと思ひましてね、」

「おばさんは通用ツていうの。」

「どうかしたんでございますか。」

「それをさ、おささせ申しましてね、暑い時でござんした。」

ここへ引越して、しばらく経たつて、護国寺が直ぐだといひますから、音羽々々ツて音ばかりだったでしょう。

行つて見ましようツて、お嬢さんをおさそい申して、不断のまんま、ぶらぶら片陰になつて出かけたんですよ。

はかま袴を召した姉さん方が、フンといつてお通んなさる。何だか背うしろ

が見られる処を、小児衆が大勢で、やあ、狐の嫁入だつて、ばらばら石を投げたろうじやありませんか。お顔もお頭つむも、容赦なみちばた路傍へおしやがみなさる。私はね、前からお抱き申して立つてましたがね。

そら、傘からかさに化けた、というと、ろくろへポンポン当るから、気がついて、私が取つてね、すぼめて帯へさしたんです。騒ぎは、

それで静まりましたけれども、その時黒子ほくろ一つないお身体からだへ、疵きずがついたろうじやありませんか。」

## 十九

お夏は袖をくるりと白く、

「こなよ、愛吉。」

いわれたその二の腕の不審紙。色の褪あせたのに齒を嚙かんで、裾すそに火の粉も知らずに寝た、愛吉が、さも痛そうに、身ぶるいした。

三人ひと齊ひとしく慥然ぶぜんとせり。

女房しめやかに口を開き、

「ですからさ、時節ですよ。何だってお前さんねえ、私なんざ話  
しに聞いて、何だか草双紙にでもあるように思っていました。木  
場の勝山様さんのお一人子のお嬢さんが、こうやって私等風情と、一  
所においでなさるんだもの、まったくですよ。」と年紀としだけに論  
すがごとく、自らは悟りすましたようにいったのであるが、何の  
おかみさん、日傘が深張ふかばりになったのは、あえて勝山の流転の  
とき、数の奇なるものではない。

「まだまだね、お前さん、このくらいなことじゃないんですよ、  
もつともつと変っておいでなすつたんですよ。」としんみり言う。

ほぼその幼馴染おきななじみ馴染とでもいっつべき様子を知って、他人には、  
堅く口を封ずるだけ、お夏のために、天に代りて、大いに述懐せ

んとして、続けてなお説いおうとするのを、お夏は軽かろく手真似でで留めた。

「およしなさいな、まあ後でゆつくり。おばさん、お土産があるんだわ。

可いもの。

でも、愛吉、お前は、これね、」

とあられもない。指で口許を挟む真似、そしてその目の仇気あどけなさ。

「え、私わっしあ、私あ、もう、」と逡巡しりごみする。

「もうなもんですか。御馳走ごちそうするわ。

おばさん、良いでしょう。」

と火鉢に手をかけ、斜めに見上げた顔を一目。鬼神おにがみなりとて

否むべきか。

「可ようございますとも、行つて取つて参りましょう。ついでに何ぞ見繕つて参ります。」

愛吉は忙いそがわしく膝を立て、

「私わつしが、私が参りますよ、串じょうだん戯ごじゃない。てツて、飛出すの

も余り無遠慮過ぎますかい、へ、」と結んだ口と、同じ手つきで天窓あたまを搔く。

「何、お前さん、晩の支度もあるんですよ。」

「おばさん、私ゆが行きましようか。」

「御串戯ばかり、」

「だって私のお客ですもの、酒屋へなんぞお気の毒です。」

「飛んだことをおつしやいまし、——先生様も貴女のお客じゃありませんか。」

気の毒がるのをいじらしそうに沁しみ々じみといったが、軽くかろ立った。酒と聞いて、気もそぞろで、この（先生様）といった言ことばは、この時愛吉の耳には入らなかつたのである。

「ああ、そういうえね、」

お夏は火鉢を隔てながら、膝を摺寄せるように、裳もすそを横に。

「晩に来るって、」

女房は立ちかけたのを坐り直した。

「おや、それはまあ、まあ、貴女、お音信たよりがございましたかい。」

「途中でね、電話をかけたの、」

「直接じかに、」

「いえ、花井さんと呼んで託ことづけて貰いました。」

「花井さん、例のですか、」

「ああ、」と頷うなずく。

「それでは、その分も、」

「ああ、そうね。」

「いずれ、何も召めし食あがるようなものはありませんけれど、」

「私がいいものを買って来たの。」

女房は茶棚の上を、ト風呂敷包がそれである。

「よく、お気が着きましたねえ。御褒ごほうび美びに、それこそ深張を買っ

てお貰いなさいまし。」

かぶり  
頭をふつて、

「要らない。」と活潑にいった。

「でも貴女、貴女が、そんなにお気がつくんですもの。可うござ  
います。貴女がおつしやいませんでも、私からお強請りねだ申しまし  
よう。」

「おばさん、気がついた御褒美なんて、不可いけないの。先生が怒るも  
のなの。」

「へい、何でございますえ。」

「何だか、怒るものよ、おばさん当てて御覧なさい。」

「……………」

黙ってつくづく見たばかり、当てものして遊ぼうには、ちと年と紀しが老けていた。

「当てて御覧。愛吉、」

と唐突だしぬけにこつちを呼んだ。この時まで、お夏が女房といいかわした言ことばは、何となく所帯染みて、ひそめいて、傍かたえぎ聴ききするもののの耳には、憚はばかる節があるようであつた。

いかばかり酒に咽喉のどが鳴つても、あいにく耳が澄まされて、お夏の口から、（先生）というのを聞いて、はツと胸こたに応こたえたのは、

風説うわさに聞いて尋ねて来た、式部小路の麗人たおやめはさる人の、愛おもいも妾めかけのであるといふのである。

果してそれが柳屋のならんには、米が砂利になる法もあれ、お困いなどは、推参な！ 井戸端の悪口穴あなうめ埋にして、湯屋の雑言焼消そう、と殺気を帯びて来たのであるから、愛吉はこれは、と思つた。

ト同時に、この内証話からは、太くいた自分が遠ざけられ、憚はばかられ、疎うとまれ、かつ卻しりぞけられ、邪魔にされたごとく思つたので、何となく針むしろの筵。眉も目も鼻も口も、歪んで、曲つて、独りで拗すねて、ほとんど居いた堪たまらないばかりの心地。

もうお夏の、こう隔てのない、打開けた、――、敵かたきうち討うちの、

駈落かけおちの相談をさるるような、一の（当てて御覽）がなかつたら、

火の玉は転がつて、格子の外へ飛んだであらう。

が、忽然こっぜんとして青天、急にその膝へ抱き上げられたように感

じた。ただし不意を喰くらつたから、どきまぎして、

「酒、酒です。」

と筒抜けのぼやけ声。しかも当人時ならず、春風胎蕩たいとうとして、

今日九重このこのえにおい来る、菊や、菊や——酒の銘。

お夏は驚いて目を瞪みはつた。真面目に啞然あぜんたるものこれを久しゆ

うして、

「駄目。おばさん、この人はね、酒だか私だか分らないの。ちよ  
いと早く呑まさないよ、私を嚙かじろうも知れないよ。」

「お嬢さん、」と例の敗亡はいもう。

「唯今、ですがお嬢さんは、ほんとうに何を買っていらつしやいました。大概そんなことはありますまいが、もしか、つくど不可いけません。」

「可いのよ。先生のめしあがるもんなんざ、ねえ、愛吉、」

「まあ、貴女、」

「可いの。ねえ愛吉、お前が来ると知れているのなら、呼ばなくツてもいいんだっけね。」

首尾は大極だいごく上々吉、愛吉堪りかねて、

「御、御串戲ごじょうだんおつしやらあ。」

「どれ、急いで行って参りましょう。」

と女房は、半纏はんでんの襟しぼりを扱しいて立ち、台所へ出ようとして、少々気がかり、

「貴女え、」

「ああ、」

「先生がいらっしゃらなくて、寂さみしい、寂さみしい、とおっしゃりながら、お憎らしい。あとで私が言附けますよ。」

「ああ、可いとも、ねえ、愛吉、姫ひいさま様がついている人なんか、ねえ。」

いささかもその意を解せず、偏ひとえに膝ひざを揺ゆつて、

「御、御、御串戯おっしゃあ。」

「ちよいと、愛吉さん、」

と女房優しく呼びかけ、

「よく、おもりをして下さいよ。お泣かせ申さないように、可よござんすかい。お前さん、また酒と間違えて飲んじまっちゃ不可ませんよ。」

「御、御、御、御串戯おつしやらあ。」

勝手の戸がかたりとしまると、お夏ははらりと袂たもとを畳たかへ、高かま鬚げを衝つと低く座を崩して姿を横に、継すがるがごとく摺り寄つて、

「どうしたの、お前、」

とて、膝につむりを載せないばかり。

愛吉しやツきりと堅くなつて、居丈高いたけだか。腕を突揃つッそろえて、畏かしこまつて、

「しばらくでえ、」

「愛吉や。」

「お嬢さん……………」

二十一

「まあ、お前どこに居たんだねえ。」

「え、わっし私は何、そこらの芥溜はきだめに居たんですがね。お嬢さんは？」

「私かい、」

「何ですか、蔭で聞きますりや、御新造さんもお亡なくなんなさいましたツて、飛んだ事で、」と震えて蒼あおくなつていう。お夏も心が

激したか、目のふちに色を染めて、

「ああ、愛吉、お前のおともだちの蔵人（軍鶏呼名）もね、人形町の火事ツきり、どこへ行つたか分らないんだよ。愛吉てば、お前、おつかさんが亡なつても、家が焼けても、まるで顔を見せないんだもの。」

お前、おつかさんが亡なつては、私一人ぼつちじゃないか。人形町の内が焼ければさ、私はどこにも行く処がないじゃないか。

それなのに、ちつとも来てはくれないんだもの、随分だわ。「愛吉は堪えかね、堪えかねて、火の粉が入つたようにぐツとその目を圧え、

「だって、だって何でさ、加茂川亘さんて——その、あの、根

岸の歌の先生ね、青公家あおくげの宗匠とこン許へ、お嬢さんの意趣返しに、  
 私わつしが暴れ込んだ時、紹ろの紋附と、目録の入費を現金で出しておく  
 んなすつたお嬢さんを大鼻おおひいき貞いの——新聞社の旦那でさ。遠山金  
 之助さんですよ。

その方に、意見をされて、私のようないけずな野郎が、お嬢さ  
 んと附合つちや、お前さんの何でさ、為にならねえからツて、い  
 われたもんで。

私もね、何ですよ。成程こいつはもつともだ、と思つたから、  
 しかもお宅が焼けた晩でさ、そら、もうしばらく参りませんツて、  
 お暇いとまごい 乞ごに行つたでしよう。

あつし 私あつしも思い込んだんでさ。いえ、何でも参りません。いえ、いえ、

もう御無沙汰いたしますツて、そういったら、お嬢さん、……」  
 としばらくものを言うあたわず、隆たかいが、ぞんざいな鼻すを嚙すつ  
 て、

「たった一人の、佃つくだのおふくろにまで、愛想を尽かされて、湯灌  
 場にさえ屋根代を出さねえじやならねえ奴を、どうお間違えなす  
 ったか、来なくツちや厭いや、寂しい、と勿体至極もねえ。

涙ぐんでおくんなすった。ああ難ありがて有えこツた、と思うと、な  
 おなおお前さん、貴女のお身体からだが大事になつて、御出世の邪魔に  
 なるんだから、と万倍もお前さん、敷居またがを跨またがねえ氣になつたんで  
 せ。

もう何ですぞ、お店たなから出て、あの門かどの柳の下でしよんぼりし

て、看板の賽ころがね、ぽかん、」

と噓くさめの出そうな容体、仰向あおもむいてまたすすり、

「と面つらへ打ぶつかると、目が眩くらんで、真暗まっくらさんぼういでてん  
地も壁も突抜けてそれツきり、どんぶり大川へでも落つこちたら、  
そこでぼんやり目を開けて一番地獄の浄玻璃じょうはりで、汝うぬが面つらを見て  
くれましようと思つたくらいでした。

すると、近間で、すりばんでしよう。私わっしあ自分でどこに居たか  
知りませんがね、火の手はお宅様の見当でしよう。ほい、了しまつた。  
お暇乞はもう一晚我慢をすりや可よかつたが、こりやお見舞にも上  
られねえ。そうかと思やあお嬢さんと御病人きり。蔵人は忠義だ  
つて、羽ばたきをするばかり、袖くわを脚くわえて引張ひっぱり出す方角もある

まいと思ひますとね。矢も楯たても堪たまりませんや。さも貴女と御新造さんが烟けむに捲まかれて赤い舌で嘗なめられていなさるようで、私わつしあ身体からだへ火がつくようだ。そうか、といつてたつた今お暇乞をしたものと地踏じだんだを踏ふみましたが、とうとう、我慢が仕切れねえで、駆けつけると、案の定だ。

まだ非常線も張らねえのに、お門かどにや、枝垂しだれ柳の花火が綺麗に見えましよう。柱は残らず火になつたが、取と着つきの壁が残つて、戸棚かどが真紅まっか、まるで緋ひの毛氈もうせんを掛けたような棚を釣つた上と下、一杯になつて燃えてるのを私あお宅をい行きのち抜けにお出入かなの合あつたお底かげげにや、要害は知つてまき。お嬢さんが生命いのちから二番目の、大事の大事のお雛様。や！ 大変だ。深川の火事の時は、ちようど

お節句で飾つてあつた、あの騒ぎに内裏様の女の方かたの、珠たまのちらちらのついた冠がたった一つ紛失したのを、いつも気にかけておいでなさるくらいだのに、ああ、情ない。」

お夏はこれを、うつとりとなつて聞くのであつた。

## 二十二

「せめてその骨でも拾つて、腕こしらもりでも拵こしらえよう、」

とまっしぐらに立向つた、火よりも赤き気競きわいの血相、猛然とし

て躍り込むと、戸外おもては風で吹き散つたれ、壁の残つた内こもは籠こもつて、

颯さつと黒煙くろけむりが引包ひつつむ。

「無茶でさ、目も口も開きやしねえ、横もうしろも山のような炎の車がぐるぐると駆けてまさ、から意気地はありません。

夢のような気です。まして棄鉢すてばちに目を眠った処を、裾すそからずるずると引張るから、はあ、こりやおいでなすったかい。婆さんが衣きものを脱ぐんだろう、三途川さんずのかわの水でも可い、末期に一杯飲みてえもんだ、と思いましたがね、口へ入ったなあ冷酒の甘露ないんで。呼吸いきを吹返すと、鳶とびぐち口を引掛けて、扶たすけ出してくれたのは、火掛ひがかりを手伝ってました、紋床の親方だったんでさ。

焼あとへね、遠山さんもおいでなさりや、その新聞社の探訪の、竹永丹平というのも来しました。親方と四人でね、柳の根方でしばらく、皆みんなで、お嬢さんの噂ばかりしましたつけ。夜露やら何やら

で湿ッぽくばかしなつて、しらしらあけの寒いのに皆みんな悄おれて別れたでさ、それツきり。

どこへおいでなすつたか、お行方は知れませんや。またもうお目にかかるまいと心じや極きめていたんですから、口へ出して人に聞くのも何だか気が咎めてならねえんで、尋ねるわけにもなりませんで、程たつて、勝山さんの御新造が築地の何とかいう病院で、お亡なくななすつたつて、風のたよりに聞きましたか、ともかくも病院へお入んなさるくらいじや、立派にお暮しなさるんだらう。お嬢さんは、お手車か、それとも馬車かと考えますのが一式の心ゆかしで、こつちあ蚯蚓みみずみたように、芥溜はきだめをのたくツていましたんで。

へい、決してその、決して何でき、忘れたんじやありません。」  
語つて涙を拭う時、お夏ははんけちを啣えていた。

「じや何、あの晩火事の時、火の中へ飛び込んだの、大変ねえ。」

「へ、何、そりや、そんな事はわけなしでさ。熟と大人しくして  
いる時が堪らねえんで。火でも水でも、ドンと来た時はおもしれ  
えんで。へ、何、わけなしでさ。殊にお嬢さん許の灰になりや、  
私あ本望だったんです。」と、思わず拳を握つたのである。

お夏は黙つて瞻つた。その時はじめておくれ毛がはらはらと眉  
を掠めた。

「でもお前、目をまわしたとおいいじやないか。」

「ちよつと、眠つたんで、時々でさ。」

「だつてお前、きつと火傷やけどをおしだろう。」

直垂ひたたれに月がさして、白梅の影が映つても、かかる風情はよも

あらじ。お夏の手は、愛吉の焼穴だらけの膝さすを擦つた。愛吉たらたらと全身に汗を流し、

「ええええ、脇腹を少し焦しましたが、」

「可哀相かわいそうに、お見せな。」

「何、身体中からだ、疵きずだらけだから、からもう何が何だか分かりません」。

とはだかつた胸を慌ててかくした。

「愛吉、それでもお前、無事に逢えて可よかつたねえ、ほんとうによく来たねえ。」

「ですから、ですから、その上がられました義理じゃねえんで、お門口へだつて寄りつく法じゃありませんがね、ちとその、」  
と口籠った。妾めかけ沙汰ぎたの一条で、いいかねたものであろう。

お夏はいささかも気に留めず、

「おいでない。愛吉、お前がそんな事をいつて来ないお庇かけで、私がどんな出世をしたのよ、どんな出世が出来たのよ。」

と詰なるがごとく声強く、

「お前たちを袖にして出世をしたつてどうするの、よ、愛吉、」  
「じゃあ、ど、どうしてお嬢さん、貴女はどうしてどこにおいでなすつたんでございますね。」

はきだめ  
「芥溜はきだめよ。」

「え、」

「私もやっぱり芥溜なの。」

「飛、飛んでもねえ。」

「だって、お前も好すきなんだから可いではないか。」  
と澄ましていう。

## 二十三

その物腰と風采は、人形町の頃よりも、三ツ四ツ年とし紀もたけ、  
藤ろうたさも、なお増まさりながら、やや人に馴なれ、世に馴れて、その芥ご  
溜みためといえりし間、浮世のなみに浮沈みの、さすらいの消息の、

ほぼ伝えらるるものがあつたのである。

愛吉は悚然ぞつとした。

「寒くはなくツて、」

「御串戯ごじょうだんおつしやらあ、」

「だって素裕すあわせでおいでだよ。」

「そこへ行つちや職人でさ、寒の中うちも、これで凌ぐんで、」

「威張つたね。」

「へ、どんなもんで、」と今度は水洩みずばなをすすり上げた握拳にぎりこぶし、

元気かくのごとくにしてかつ悄然しょうぜんたり。

「ほんとうに真面目ねえ、ああ、そう、酒気のない処で、ちと算そ

盤ろばんでも持せて弱らしてやろうかな。」

と莞爾にっこと笑み、はじめて瞳を座敷に転じて、島田の一にぐいとさした、撫子なでしこの花を透彫すかしぼりの、銀の平打が身じろぎに、やや抜け出したのを挿込みながら、四辺あたりを視ながめて、茶棚に置いた剃かみそ刀りにフト目が留まった。

「愛吉、それよりかお前、ほんとうにちよいと困っておくれでないかい。」

「困りますえ。私わっしが、何を。お嬢さん、」

「久しぶりだ、あたっておくれ、」

「お顔を、」

「ああ、私は自分じゃ不器用だし、おばさんは上手だけれど、目が悪いからツて危ながつて遠慮をするしね。近所じゃ厭だし、ど

こへ行つてもしやぼんをぬらぬらなすくつて、暖かい、あぶらツ  
手で掴つかまえられて恐れるわ。困っているの、ねえ、愛吉、後生だ  
から、」

「遣りますかね、」

「ああ、」

「や、そいつあ素敵だ、占めたもんだ。ちようど可いいや、剃刀が  
来ていませ。」

お夏は車で知っている。

「喧嘩をしたもんだから、よく知つておいでだね、おばさんは忘  
れて行つたに。あいかわらず、対あいて手さえありやいがみ合うんだよ

。」

愛吉は勇みをなし、

「あいて對手、對手は紋床の親方だけだ。稲荷に仕込まれましたお庇にや、剃刀を持たせた日にや對手というものはねえんですぜ。まあ、こごと叱言はあとにしてお嬢さん、ちよいとお襟をお預けなせえ。

すつ、するするツと来ら。わっし私あ伊豆の大島へ行きましたかね、から、唐人みたようなお百姓でも、刃あたりが違うと見えて、可いなア—ツていやあがるんで。

こう、ためとも為朝は、おらが先祖だ。民間に下つて剃刀の名人、鎮西八郎の末孫ぼっそんで、勢い和朝に名も高き、曾我五郎時ときむね致だツて名告なつたでさ。」

「太平楽は可いけれど、何、お前大島ツて流しものになる処じや

ないの、大変な処へまあ、」

江の島をさえ知らない娘の驚いたのはさもありません。

「で、お嬢さんはどうしておいでなすつたんで？」

「あれ、はきだめ芥溜をまた聞くよ。そんな事はあとにして、はや疾く困つて

くれないと、暗くなる、寒くなる、さあ、こつちへおいで、さあ

、  
」

足許から美しい鳥の立つよう、すらりと身を起す、その片手に

ハンケチ手巾を持っていたのを、無意識に引くと、放れぬこそ道理なれ。

片端膝にかかったのを、愛吉は我れ知らずつかんでいたのです。

向うへ一所に立とうとすると、足がふらふらとして尻餅の他愛

なき。畳まれたようにぐたりとなる。お夏は知らずに出ようとす

る。手の手巾ハンケチを愛吉が一心になつて掴つかんだ、拳が凝つて指がほぐれず。はツと腰を擡もたげると、膝がぶつかつて蝟たこの脚、ひよろひよろと纏もつれて、ずしん、また腰を抜く。おもみに曳ひかれて、お夏も蹠よろめ踉めく。もつるる裳もすそ。揺ゆらめく手巾。

「おや、」

と思わず熟じつと見られた、愛吉のその顔は……

## 二十四

「お前しびれを切らしたね。ほほほ、」

「むむ、」

気を入れると直ぐに、よたり。

「馬鹿だね。」

「これは！」と片手を畳へ。しっかりと支くと、直ぐにお夏がその手巾で引かれるから、これはとあせるほどなお放れず。

「だらしのない為朝だよ。」

「勢い！ 和朝に、」

強そうな顔をして、ヤツと起きると、ひよろりですん、足を投げてきよとんとする。

お夏は密そつと引いて見て、はらりと放した。手巾を畳に残して、隣座敷へ、すいと立った。背うしろすがた姿で忙せわしそうに、机の前なる紅

入友にいりゆうぜん禅の唐縮緬とうちりめん、水に撫子の坐蒲すわりぶとん団を、するりと座敷の

真<sup>まんなか</sup>中へ持出したは、庭の小菊の紫を、垣から覗<sup>のぞ</sup>く人の目には、  
頸<sup>うなじ</sup>の雪も紅<sup>くれなゐ</sup>も、見え透くほどの浅間ゆえ、そこで愛吉の剃刀に、  
衣紋<sup>えもん</sup>を抜かん心組。

坐りもやらす蒲団の上。撫子の花を踏んで立つと、長火鉢の前、  
障子の際に、投出されたという形。目ばかり光らす愛吉を、花や  
かに顧みて、

「鎮西八郎、為ちやん。」

「や、」

「曾我五郎、時さん。」

「こいつあ、」

「泥<sup>のんだくれ</sup>酔<sup>よ</sup>の愛ちやんや。」

「ええ。」

お夏は片襷かただすきを、背からしなやかに肩へ取って、八口の下あたり、緋ひの長襦袢ながじゆばんのこぼるる中に、指先白く、高麗結こまむすびを……仕方で見せて、

「ちよいと、こういう風でね。」

かくて酒肴しゆくこうの用足しから帰つて来た女房は、その手巾を片襷かただすきに、愛吉あいきちが背後うしろへ廻つて、互交たがいむつまに睦むつじく語かたらいながら、艶えんなる頸うなじにきらきらと片割月のきらめく剃刀。物凄ものざきまで美しく、向うに立てた姿見すがたみに頬ほを並べた双の顔かほに、思おもわず見惚みとれて敷居しきいの際きり。

この躑あしおと音ねにも心着こころかず、余念よねんもない二人ふたりの状さまを、飽あかず視なめてうっとりした。女房にようばうの何なにとなく悚然ぞつとしたのは、黄菊わうきくの露つゆの置

きかわる、霜の白菊を渡り来る、夕暮の小路の風の、冷やかなばかりではなかつた。

明り取りに半ば開いた、重なる障子の薄墨に、ひとはけ一刷黒き愛吉の後姿、うしろつき朦朧として幻めくお夏の背に蔽われかかつて、玉を伸べたる襟脚の、手で搔い上げた後毛おくれげさえ、一筋一筋見ゆるまで、ものの余りに白やかなるも、剃刀の刃の蒼やいばずんで冴えたのも、何となく、その黒髪よわいの齡を縮めて、玉の緒を断たんとする恐ろしき夜叉やしやの斧おのの許もとに、覚悟を極きめて首垂うなだれた、寂しき俤おもかげに肖て見えたのであつた。

\* \* \* \* \*

「いわゆる所謂その影が薄いといった形で。つまり俗にいう虫が知らせ

たんだらうな。」

「ええ、女房かみさんもいっているのでありますし、かような事は、先生の

前じやちといかがな儀ではありませんが、それを聞いた手前なども、またさようかに考えるので、どうも争われないものですよ。」

「いや、一々しやうこん銷魂しやうこんな事ばかりです。幸病さいわい気は良いのですけれ

ども、実に腸九廻はらわたするの思いで聞くに堪えん。が、そこで。」と

問掛けて、後談を聞くべく、病室の寢床の上で、愁しゆうぜん然ぜんとして

まず早こうべや頭こうべを垂れたのは、都下京橋区尾張町東洋新聞、三の面軟派の主筆、遠山金之助である。

「第一手前が巢鴨の関戸の邸の、紅葉の中で、不意に出会でつくわした時もそうですが、沈あかるんだ明あかるい、しかも陰気な、しかし冴ひやえて冷ひや

かな、炎か紅くれないの雲かと思うような四辺あたりの光景にも因りましたろうが、すらりと、このな、」

と円満にして凸凹でこぼこなき、かつ光沢のある天窓あたまを正面から自分指ゆびさしながら、相對して、一等室の椅子にかけたのは同社名譽の探訪員、竹永丹平である。

別に必要はないけれども、その着つけ、背せ恰好かつこう、容貌、風采、就みいて看らるべし。……

第二回の半ばに出でたり。

この処築地あかしちよう明石町、明石病院の病室である。

探訪員は天窓あたまをさした、その指を、膝なる例の帽子の下に差入れた。このいかがわしき古物を、兜かぶとのごとく扱うこと、ここにおいててもまたしかり。

さして、打うちしわぶ咳きき、

「トこの天窓の上へ、艶麗あでやかに立たれた時は、余り美麗で、神々しくツて、そこいらのものの精霊が、影ようごう向むしたかと思ひました。桜の精、柳の精というようにでございませぬ。しかし寂ひっそり寞とした四辺あたりの光景ようすが、空も余りに澄み渡つて、月夜か、それとも深山みやまかと思われるようでありましたのは、天地が、その日覚悟を極きめて死しに行くゆ、美人に対する、かの同情というものを表わし

たのでありましょう。

見ると、——柳屋のだらうじやがあせんか。面と向つてついで  
 ことば  
 言を交わしたということもないのですが、先生、貴下あなたも御同然に、  
 こりや社用外のさがしもので、しばらく行方が知れないのを、酷ひど  
 く心配をいたしておりますで、思わず膝うを拍てまえつて私。

（お夏さん。）と申しました。……

思いがけない様子でした。こりや理もつともだ。実は私てまえの方が思いがけ  
 ないんで。お顔を覚えておりません。誰方どなた、という挨拶で、ちと  
 照れましたがな。以前、人形町辺に居りました時分ちよいちよい  
 お店へ参つて、といつてこの天窓に対して、（肖顔にがおえ画などを孫ど  
 もに買ってやりましたで存じております、）などと遣つたですて。

まず、これへ、と人様のものでお愛想。自分も拝借をしておりましたし、まだ二ばかり据えてありました陶器ものの床几を進めると、悪く辞退もしないで静に腰をかけたんですが、もみじの中にその姿で、いかにも品が良い。これでさげ髪だと何の事はない、もみじ狩の前シテという処ですが、島田の姉さんだから、女大名。

私は太郎冠者というやつ、腰に瓢があれば一さし御舞い候え、  
 といいたい処でがしたが、例の下卑蔵。殊に当日はあすこを心掛  
 けて参ったので、煙草は喫まず、その癖、樹下石上は思いも寄ら  
 ん大俗で、ただ見物も退屈、とあらかじめ、紙に捻つて月の最中  
 というのを心得ていましたから、（ちとお歌でもなさりませんか

、)といたしますとね。

どど一いつか端唄はうたなら、文句だけは存じておりますが、といつて笑顔になつて、それはお花見の船でなくツては肖うつつりません。ここはどんな方のお邸でござんすえ、ツて聞かれたから、(こりや関戸とおつしやる御華族でいらつしやる。)と答えますと、華族さんなの。それでは町人が来ては叱られましようツて莞爾にっこりしました。

「お夏はその時町人といった。

「痛快でがした。——

服装みなりといい、何となく人形町時分から見ると落着きが出て気高

い。てまえ私最初はその関戸伯爵の姫ひいさま様と間違えて、突然低頭に及ん

だからいで、天下この人に限ってはとは思うが、そこは女。

実は乗りたや玉の輿こしで、いずれ、お手車どころたしか処は確に見える。自然と気ぐらいが高くなっているのであるうと、浅はかにも考えたが――違いました。

この江戸えど児、意気まだ衰えず、と内心大恐悦おおい。大に健康を祝そうという処だけれども、酒ありますまい。そこで、志は松の葉越の月の風情とも御覧ぜよで、かつその、憚はばかんながら擲やゆ揄一番しようと思ひ欲して、ですな。一ツ召食めしあがれ、といつて件くだんの餡あんものを出して突きつけた。」

「柳屋のに、」

と金之助は眉ひそを顰ひそめた。

丹平泰然として、

「さよう、」

「驚きますな。」

と遠山は止むことを得ざらん体ていに、

「あの 窈ようちよう 窕ようちよう たるものとさしむかいで、野天で餡ものを突きつ

けるに至っては、刀の切尖きつさきへ饅頭を貫いて、食べ！……といつ

た信長以上の暴虐ぼうぎやくです。貴老あなたも意気が壮さかんすぎるよ。」

「先生、貴下あなたはまた、神経痛ごときに、そう弱っては困りますな

。」

「何、私はもう退院をするんだから構わんが。」

とて愁うれうる色あり。

丹平は打領うちうなずき。

「しかし、仏の像の前で、その言行を録した経を読むと同一おなじです。ここでお夏さんの話をするのは。まあ、お聞きなさい。」  
と声を低うしていった。

この突つきあたり当右側の室に、黒塗の板に胡粉ごふんで、「勝山夏」――  
札のそのかかれるを見よ。

## 二十六

病室の主客しゅかくが、かく亡き佛おもかげに対するごとき、言語、仕打を見ても知れよう。その入院した時、既に釣台かつで昇がれて来た、患者

の、危篤きとくである事はいうまでもない。

「実はその人を歎美して申すのですから、景気よくお話はしますけれども、第一私てまえがもうこういう内にも、（難有ありがたう）といつて、人の志を無にせん風で、最中もなかを取つて、親か、祖父じいさんの前でもあるように食べなすつた可愛らしさが、今でも眼前めさきにちらついているらんでがすて。」

鼻を詰らせながら、掌たなそこで口を拭ぬぐつて咳せきばらい一咳。

「私てまえもな、昨年一人、末ツ児を亡くしたですが、それを思い出しでもこんなじゃない。」

と椅子をずらして、

「で、何でげすか、どうしても六ヶむすしいと申すんで？」

「ああ、看護婦がいます、勿論くわ詳しいことは話さない。

入院した日は、何事もなく静かだったが、一昨日おとといの晩でした。

私は、はじめ串じょうだん戯かと思つた。

うら若い女の声で、

(あつうあつう、)

というのです。

(暑い！ 暑い、)

と聞えて、

(暑いよう、暑いよう、)というのが、夢中むちゆうのようですね。

(快よくなりますよ、直じきによくなりますよ、)とひそひそすかすの

が、幽かすかに聞えるから、ああ、それじゃ病人びやうじんだな、と思つたんです。

ひっそりしたつけが、また、

(熱いねえ！ 熱いねえ、)

(もう直ぐに快くなりますからね、)

(ああ、)

と調子高に、しかし上の空のようにいって、少し気がついたか、  
落着いた声で、

(熱いこと！)

こういってね、それツきり。ひっそり陰気になったが、いや、  
その間、はツと違って、私も呼吸いきがつかないのです。」「

丹平もしめやかに頷くことあまたたび、

「成程なななッ々々成程。」

「二三日もう手はかかりませんから、そこに、」

金之助は扉に並べて一枚を敷いた、畳の隅、鉄の火鉢の方に目を遣つて、

「編物をしていた附添のね、福崎（看護婦）というのに、（どうしたの）ツて聞くと、何も問い返すまでもない。

（苦しいんですよ、）といひます。

（わる不良いのかね。）

（いらしつた時から釣台でしたから、）

それさえその時まで私は気がつかないで居たくらいで。もつとも前晩、夜更けてからちと廊下に入組んだあしおと躑音がしましたつけ。こつやつて時候がい可いから、ひっそり寂寞して入院患者は少いけれども、

人の出入ではいりは多いんですから、知らなかったんです。」

「まさか自分の病院で、治療するというわけにも行かなかったものでありましょう。」

「ははあ、秘密のようですかい。」

## 二十七

「だから私もその、事件の場所へ立会った程な、この度のことに就いては浅からん縁がありますけれども、実は遠慮をして差控えていたのでがす。しかし、経過が、どうか。容体が、どうか。気になって、どうも心配でなりません、ところが、幸い、」

と、いいかけて、はげあたま 元天窓を、はツとおさ 圧え、

「あなた 貴下の御病気を幸いといつては恐縮千万、はははは、」と、あ 四  
た 辺をは 憚わ った内証笑わらい。

「実は私も自分で幸いと思つてゐる。」

「いや、恐縮ですが、また、さほど大した御容体でもなかつたと見えまして、貴下が、こつちへ御入院という事は、まつたく、今け 朝さ はじめて聞いて一驚を吃きつ しました。勿論社の方へは暫時ざんじ 御無沙汰、そんなこんなで、ちつとも存じませんで、大失礼。そこで、すぐにお見舞と申す内にも柳屋の方が主であるよう相済まんですが、もつとも向うへ顔出しをする気はないので。それでなくて ても私商売などは、秘密の秘の字でもある向には、嫌われるで、

遠慮をしますから、悪あしからず。」

「私はまた（何の病気、）と聞くと、

（熱ひどが酷いんでしよう、）といったばかり。

（婦人だね、）

（はい、少わかいお嬢さん、）

（幾いくつ歳ぐらいの、）

（二十はたちか、九でおいでなさいましょう。）

柳屋のはもうちつとになったでしょう、こりや少く見えたんです。

そこまで聞いて、まさか、名は？ とまで尋ねるでもないから、そのままにしましたが、一体何となく継穂そっけのない、素気ない返事

だと思ったんですが、もつともだ。じゃ、山の井先生のために、この病院長が、全院を警戒して秘密にしたんだ。」

「そうでがすとも、ごく内証ですから、はばか憚って、自分の病院があるのに、こつちへ依頼をされたんで。この明石病院の院長は、山の井医学士の親友でがす。

もつとも他の新聞にも出ましたから、事件は、さして秘密じやありますまいが、自分がお夏さんの世話をしておいでだった光みつお起き（山の井医学士の名）さん。

薄々青柳町に困つてある、めかけ妾だ妾だという風説うわさなきにしもあらずだったもんですから、多くは知らんにもせい、」と声をひそめる。

「どうして、私はまた、不意に貴老あなたが見えたのを、神の引合わせかと思う。ちよつと筋向うのが柳屋のだと、声をさえかけて下さつたら、素通りにされても怨まない。実際そうでない、わずか廊下を七八間離れたばかりで、一篇悲劇の女主人公じょ、ことに光栄ある関係者の一人にんで居ながら、何にも知らないで退院する処でした。あとで聞いては千載の遺憾いかんだったに、少くともその呼吸いきのある内に、時ほととぎす鳥と知つて声を聞いたのは、光栄です。私はこれを一声の時鳥だといいます。あの血を吐く声が実に腸はらわたを断つようで。竹永さん、」

おもてと面を上げて、金之助は今もその音や聞ゆる、と背後うしろを憂慮きづかうもののごとく、不安の色を湛たたえつつ、

「引続きこの快晴、朝の霜が颯と消えても、滴つて地を汚さずと  
いう時節。夜が明けるとこの芝浜界限を、朗かな声で鰯——

生鰯と売つて通る。鰯こい、鰯こいは、威勢の好い小児が呼ぶ。

何でも商いをして帰つて、佃島の小さな長屋の台所へ、箆と天

秤棒を投り込むと、お飯を掻込んで尋常科へ行こうというの

だ。売り勝とう、売り勝とうと、調子を競つて、そりや高らかな

冴えた声で呼び交すのが、空気を漉して井戸の水も澄ますように。

それに居まわりが居留地で、寂として静かだから、海まで響いて、

音楽の神が棲む奥山から笏でも返しそうです。その音楽の神とい

えば、見たまえ、この硝子窓の向うに見える、下の外科室の屋

根を隔てた煉瓦造りを。外国婦人が住んでいてね、私なんぞにや

朗々としか聞えんが、およそ目には見えんで、各自てんではその黒髪くもの毛筋の数ほど、この天地の間に、天女が操る、不可思議な蜘蛛くもの巣ぐらひはありましよう、恋の糸に、心の情が触れる時、音ねに出づるかと思うような、微妙な声で、裏若いのが唱となう。ピアノを調べる。時々あの向うの硝子戸を取りまわした、濃い緑の葉の中に、今でも咲いている西洋種のぼつとりした朝顔の花を透かして、藤色ときいろや、水紅色すその裾ひを曳いたのがちらちらする。日の赫かっと当る時は、眩まばゆいばかり、金剛石ダイヤモンドの指環ゆびわから白びやっこう光を射出す事さえあるじやありませんか。

おなじ  
同一色にコスモスは、庭に今盛さかりだし、四季咲の黄薔薇きばらはちよいと覗のぞいてももうそこらの垣根には咲いている、とメトロポリタン

ホテルは近し、耳馴れぬ洋犬は吠えるし、汽笛は鳴るし、白い前えだれ垂おさんした廚女がキャベツ菜の籠を抱えて、背戸を歩行くのは見えるし……」

刻下、口を衝ついて数すひやくげん百言、竹永は我が探訪の職に対し、生殺与奪の権を握れる、はたかれ神聖なる記者として、その意見に服し、その説に聴くこと十余年。いまだこの日のごときを知らなかつた。三面艶つやだね書の記者の言、何ぞ、それしかく詩調を帯びて来きたれるや。

惘然ぼうぜんとして耳を傾くれば、金之助はその筋疼いたむ、左の二の腕を撫でつついった。

「これ実に悔るべからざるハイカラですよ。」

## 二十八

「竹永さん、金之助病やまいのためにこの境に処して、なお巴里パリイ、伊太イタ利リイの歌に魂を奪われず。却つて佃島ちゆうじまの（鰯いわしこ）に心を澄まし、初は冬つふゆの朝の鯉こいにも我が朝ちようの意気いきの壮さかんなるを知つて、窓の入口に河岸へ着いた帆柱の影を見ながら、この蒼あおぞら空の雲を真帆、片帆、電燈の月も明石ヶ浦、どんなもんだ唐人、と太平楽で煩つていたのも、密ひそかに柳屋のお夏を健在、と思つての事であつた。」

いいかけて寂しく笑つた、要するに記者すべの凡ての言は、お夏に對する狂熱ぼっぼつの勃ぼっ発ぱつしたものであつたのである。

「それがどうです。

(熱い、熱い、熱いねえ、)

今もいます通りね、おととい一昨日の晩は、それツきりだったが、昨日のうの午後二時頃にはまた、

(熱いの、熱いねえ、熱いねえ、)

昼間だから、夜分のようにはないんですが、はた傍で何かしきりいつて切に慰めたようだった。

(熱いわ、何て熱いんでしょう、)

とあきらめたように、しかも哀あわれにきこえた処へ、廻診の時間じやないのに、院長が助手と看護婦長とを連れて、ばたばたと上つて見えて、すつとこの室の前を通つたんだね。

そこへ私の看護婦が来ましたが、体温器を掛けにです。戸口へ立ちどま立停つて、しばらくその方を見ていました。

しばらくすると、皆下りて行く。看護婦が入ったから、

(あすこのはわるいのかね、)

(はい、どうも不可ませんそうです、)

……は心細い。

(気の毒だね、)

(ほんとうにお可哀相でございますよ、) と婦人は相身互、また一倍と見える。

私は素人了簡で、何とか、その熱が上らないだけの工夫はありそうなものと思つたから、

(やっぱり冷しているんだらうか、)

(氷ひょうのう囊ななつを七箇でもう昼夜通していますんです。)

(七箇！)

と私は驚いた。

(お頭つむへ一箇ひとつ、一箇枕まくらにおさせ申して、胸ふたつへ二箇、鳩尾みぞおちへ一箇、両足の下へ二箇です。)

こういいいい体温器を入れられた時は、私は思わず、人事ひとごとながら悚然ぞっとした、お庇おしで五分その時は熱が上つたですよ。」

丹平あつけも呆気あきな顔して、

「酷ひどうがすな。」

「酷いんですとも！ でもまあ、氷囊ひょうのうを七ツと聞いて、疾やまいに対し

てほとんど八陣の備だ。そなえいかに何でも、と思つたが不可いけない。

日の暮方に、また、夕河岸の鰹、生鰹、鰯こ、鰯こい——伊太利じやばんさん晚餐の朗々朗ロウロウロウ朗が聞えて、庭のコスモス、垣根の黄薔薇、

温室の朝顔も一際色が冴えようという時、廊下が暗くなると、

(あ、熱々つつつ々々、)と火がついたように、凡すべての音楽を打消して、  
けたたましく言い出したじやないか。

どうです、それがお夏さんだ。

余り何だから、私は廊下へ出て、二三間、そっちの方へ行つて見ました。薄暗い扉ドアに紙を貼はつて、昨日きのうの日づけで、診療の都合により面会を謝絶いたし候——医局、とぴたりと貼つてある。いよいよおだやか穩でない。

それまで見たが、名札を見ようという気もなし、扉ドアはその字が読めるようにこつちへ半ば開けてあつたんですが、向うには、附添と見えて、薄汚い、そういつちや悪いが、それこそ穴だらけのあわせすはだ裕を素膚すはだに着た、風体のよくない若い男が、影のように立っていました。

で、することは看護ですな。昇汞水しょうこうすいの金盃かなだらひと並べた、室外の壁の際の大きな器に、氷囊から氷が溶けたのを、どくどくと開けていました。けれども、私は、その姿の、ぼツとしたのといい、背後うしろだった形といい、折から、その令嬢れいじやうというのを悩ます、病の魔のような気がして、こつちも病人だ、悚然ぞつとしましたよ。

すぐにひよろひよると室へ入って、扉を音もなくひとりでに閉

めるとね、トタンに※と点ばついて来たと思つた電燈が、すぐに忘れものを思い出して引返したように消えたでしょう。

(熱いよ！ 熱いよ！) と言うでしょう。まさに病魔だと思つた奴がじゃ、竹永さん、——可哀相に愛吉ですな。」

## 二十九

「愛吉、愛吉、」

と二ツいつて二ツ領うなずいた、丹平の打うち悄しおれた物腰ふるまい挙動、いかにもいかにも約束事、と断念あきらめたような様子であつた。

「全く病の魔と見えましてがすかな、争われないもんだ。青柳町

の女房は——前ぜん申したごとくで、これをお夏さんの生命いのちを縮める鬼のように思った。覲てきめん面、その剃かみそり刀で殺やつたです。たとい人違いにもしろでがす。」

繰返して重ねて、

「争われないもんだ、争われないもんだ。」

しばらくして金之助が、

「しかし竹永さん、奴やつこあればこそ、お夏さんは、我が柳屋の姉さんで、単に医学士山の井光起君に対するだけでは、尋常、勝山の娘ととに留まる。」

奴なきお夏さんは、撞しゅもく木なき時の鐘。涙のない恋、戦争のない歴史、達たてひ引きのない江戸えど児、江戸えど児のない東京だ。ああ、しか

し贅ぜいろく六でも可い、私はキリストきよう基督教を信じてても可い。

私が愛吉の尻押しをして、権門に媚こびて目録を貪むさぼらんがために、  
社会に階級を設くるために、弟子のお夏さんに、ねえ竹永さん。

……

合弟子の、山河内やまこうちという華族の娘の背せなを、団扇うちわで煽あおがせた。

婦人おんなじゃ不可いけない！ その鬱憤うつぶんを、なり替かつて晴はそうという、

愛吉の火に油を灌そそいで、大の字形なりに寝ね込こませた。

ちようど同じ日に一足後あとれて、お夏なつみさんを娶めとろうという、山の

井医学士の親類が、どんな品行ないぎぎだか、内聞ないぎぎ、というので、お夏

さんの歌の師匠かまがわの、根岸の鴨川かもがわの処へ出向でいたのが間違まちがいの因もとで

す……

今までそこにふんぞり反つて、暴れていた床屋の職人が、その人の使者つかいだというお夏さんを、たとい親だつて好くいおうか。

まして、繻子しゆすの襟も、前まえ垂たれも、無体平生から氣に入らない、

およそ粹すいというものを、男は掏摸すり、女は不見みずてん転てんと心得こころえてる、鯨なまず

坊主ぼうずの青くげだ、ねえ竹永さん。

よくも、悪くも、背中に大蛇おろちの刺ほり青ものがあつて、白木屋で万引

という題を出すと、同氏御裏方、御後室、いずれも鴨川家集の読

人だから堪らない。ぞ、や、なり、かなかな、侍はべる、なんと、手て

爾波にはを合わされて助りますか。……あとで竹永さん、貴下あなたが探

りましたね、第一、愛吉が知っていたんだね。……

お夏さんは人知れず、あの氣象には珍らしい、豪家ごうけが退転たいてんをす

るといふほどの火事の中うちでも、両親で子の大事がる難だけ助けたほど我ままをさした娘に、いい遺のこした遺言とかで、不思議に手習をする、清書きよがき草紙に、人知れず、医学士（山の井光起）の名を書いて、惚ほれ抜いていたんだそうですね。

何と、その恋人を、しかも自分が、師匠のいいつけで煽あおがせられて、口惜くやしがって泣いた、華族の娘に取られようとは、どうです。

一人は医学士の意中を計った親類の周旋。一方はその母親から持込んだ華族の縁談。

山河内定子は、今現に、山の井医学士の令夫人だ。竹永さん。私は蔭ながら、大おおなる責任者だ。

私が愛吉ならきつと行る、愛吉ならずとも、こりやきつと行らねばならん処だ。定子を殺さねばならないわけだ。確だ。たしか

が、幸か、不幸か、二三冊読んでいるから、まさかに剃刀を逆手に取つて、可愛い娘のために、その恋の敵を、暗殺しようとは思わなかつた。

しかし文字もんじのあるものが、目に一丁字いつていじのない床屋の若いものに、智慧ちえをつけて、嵩こうじたいたずらをしたのが害になつたんだから、なお責任は重大です。しばらく行方の知れない内も、寢覚が悪くツてならなかつた。お夏さんがそうと知つたら、私が先んじて行やれば可かつた。私は死んでも可い、そうすれば、まさかに人違いをするようなことはなかつたらう。」

平生に似ことばず言ことばもしどろで、はじめの気きえん焰えんが、述懐となり、後悔となり、懺悔ざんげとなり、慚愧ざんきとなり、果はては独ひとりごと言こととなる。

体温器がばたりと落ちた。

かけ忘れて寝ねまき着まきの懐なごころにずつていたのが、身を揉もんだのですべたのである。我に返つて、顔を見合わせ、二人一所に、ははは——  
歎息した。

### 三十

「串じょうだん戯ごじやないままつたつたくです、私は基督教になつても可い。  
今のその根岸の歌うたよみ人に降伏をして、歌の弟子になつても構わん。

どうかして治してやりたいじやありませんか。」

「いや、先生、貴下あなたは凡すべて空くうにもものをお考えなすつてさえその通りだ。

それから見ると、私てまえは一倍上だろうと思うですがすよ。何故なぜとお

つしやい。あの娘が、これから、わざと殺されに行こうという日、

その菓子もなかの一件でしょう。悪気でしたのではなかったのですが、

死のうという覚悟をした、それも二日三日と間のある事ではない、

四五時間前というのに、もみじの中うちで、さしむかに食べられた

時を思いますと、我てまえもう、ここが、」

と大きな懐中物で、四角に膨れた胸を撫でつつ、

「何ともいえないので、まるで熱鉄を嚙のみくた下す心持ですがすよ。は

あ、それじゃ昨日きのう、晩方にも苦しみましたな。」

「ああ、そうです、」

金之助は話の糸の、乱れた苧おだまき環巻きかえし、

「その、氷嚢をあけていた、厭いやな人影が中へ入る、ひとりでドア扉が閉る。途端に電燈が点くかと思うと、すぐに消えた。薄うすく暗が

を、矢のように、上衣うわぎなしの短衣チョッキずぼん、ちようど休憩をして

いたと見える宿直の医師ドクトルがね、大方呼びに行ったものでしょう、

看護婦が附添って、廊下を駆けつけて来たのに目礼をして、私は室へ戻ったですがね。停電ざんじ暫時あんどうで行燈を点けるといふ、いや、

酷ひどい混雑。

その内に、

(おお、熱い事、)

とその声が、一度不思議に婀娜あだッぽくきこえた。何となく正気でいったように思ったが、看護婦に聞くと注射をしたんだそうであとは昏睡こんすいですと。

それも二時間とは続かない、すぐにまた、

(熱あつ々あつ々あつ！)

は情ないじゃありませんか。

(熱いよ、熱い、熱いよう、)

と夢中で泣く。それはまだしもだ、竹永さん。

(熱いなあ、熱いなあ、)

なあというに至って、私は天窓あたまからこの搔卷かいまきを引被ひつかぶつて、

下へ、下へ、とずり下つて、寢床に沈んだが、なお聞える。

(暑いなあ、暑いなあ、)

そこで、もぐつても、くぐつても両方の肩から水を浴びるよう  
に、ぞくぞくするから堪<sup>たま</sup>らなくなつて、匆<sup>は</sup>ね起きて、きよろきよ  
ろ見ると、その佃の帆柱が見える硝子窓の上の方が、真<sup>ま</sup>暗<sup>くら</sup>に三  
寸ばかり透<sup>すか</sup>してあつたから、看護婦は、と見ると、扉<sup>ドア</sup>を細目に開  
けて、白い身体<sup>からだ</sup>をぴツたり附着<sup>くツつ</sup>けて、突当りのその病室の方を覗<sup>のぞ</sup>  
いてね、憂慮<sup>きづかわ</sup>しそうにしているから、声をかけて閉めて貰つて、

(悪いか、)

(とても、)

(気の毒だ。)

（お可哀相でなりません。）

早くしておくれ、早くさ、早くさ、とその病人のじれる声は、  
 附添が賺すかしても、重かぶりい頭ふを掉ふるんでしよう。

すたすたと廊下を駆ける音。

（幾いくたり人たりついているの、）

（三人です。）

（親たち？）

（いえ、こつちの看護婦と、向うから附いておいでなすった、それはそれは美しい、看護婦さんと、もう一人職人のような若い衆しゅが、もうつきつきりで、この間まツから夜よ一つ夜び一目も寐ねなさらぬで、狂きちがい人のようですよ。）

私は愛吉とは思ひも寄らない、が、先刻見<sup>さつき</sup>た一件だ。

(何だね、それは、)

(家来衆とも見えませんが、お嬢様、お嬢様といつています。多  
分乳母<sup>ばあや</sup>さんの児<sup>こ</sup>で、乳兄弟<sup>ちきょうだい</sup>とでもいうようなんじやありません  
か。何しろ一方なりませんお主<sup>しゆう</sup>おもい、で、お嬢さんがね、あつ  
い、あついとおつしやる度に、額<sup>あぶら</sup>からたらたら膏<sup>あせ</sup>汗<sup>あせ</sup>を流すん  
ですよ。

水天宮様の方角はどちらでがすえ、と聞きましたは、一室に  
大勢ですから、お嬢さんの寝台<sup>ねだい</sup>の下へ、はい込んじや手を合わせ  
て拝みます。

まるで夢中ですもの、すぐに忘れてはまた、

モシ、茅場町かやばちようはどつちでえ、ツちや、寝台の下へもぐり込んで拝みます。

いじらしくツて、皆みんな見ては泣くんですよ。（

といて、涙ぐんでいるだろうじゃありませんか。」

丹平はまた溜ため息をした。

「ああ。」

### 三十一

金之助も吐いきをついて、

「看護婦も話すうちに鼻をつまらせて、

(まるで気が違つたようですよ。つい昨夜、夜中はちつとばかり、すやすやしておいでだつたのですが、七箇ななつもかけた氷嚢が、しばらくの内に溶けますから、始終、氷を割りますが、また夜がふけると、四辺あたりへ響きまして、カンカンツて、凄すごいようだもんですから、うるさかつたと見えて、お嬢さんが、

厭いやな音ねえ、ツて現うつにそうおいしいなさいますと、何と思つたのか、若い衆しゅが、大きな氷の塊を取つて、いきなり、自分の天窗へ打ぶツつけたんですつて。一念か、こなごなに、それはもう、霜柱のように砕けましたツてね、額はすを斜ツかけに打ぶ切つて、血がたらたら出たそうです。それを痛そうな顔もしないで、

モシ、水天宮の方角は、ツて……)

私は皆まで聞かないで、引被つてしまつたが、成程愛公だ。竹永さん、」

「馬鹿め。」

「いや、」

「野郎、しようのない瓦落多がらくただが可哀相に、可愛い奴だ。先生、憎くはない。」

丹平ここでまた椅子を寄せ、

「先生、いかがです、呼ぼうじやありませんか、ちよいとな。」

「どうして顔が見られるもんか。いじらしくツて、」

「しかし………」

遠山は頭かぶりを掉ふつた。時にその眉秀でて鼻筋通り、口を一文字に

結んだ、凜たる記者の風采は、直ちに老探訪をして伏従せしめ得たのであった。

「成程々々、成程。いや、こりや私、ちと了簡が若うがした。」

「今日はなお酷い、夜があけるともう、

(熱いなあ、熱いなあ、)

で、鯉——生鯉も、鰯こも、私の耳にや入らんのだ。もつとも、昨夜は耳について、私も寐られないから、初中うとうとしていたので、とても気の毒で聞くに堪えんから、早くここを引上げようと思っていた処へ、貴老が見えて、こう柳屋のと知れては、何とも口へ出して言う言はない。

昨夜から今日の午へかけて、注射を三度したと聞いたです。

そのせいか、今は寂寞ひっそりしているでしょうがね、さあ、そうと知れると、残酷なように申訳はないが、血を吐く声も懐かしい、これツきり、声が聞えなくなつてどうします。

竹永さん、貴下あなたを今夜は帰さないよ。隣のホテルからお飯まんまが取れるから、それでも食つて、病院だから酒は不可いくんが、夜とともに二人で他所よそながらお伽とぎをする気だ。

そうして貴下あなたが、仏像の前で、その言行録じゆを誦する経文だといつた、悉くわしい話を聞きましたよう。

病人に代つてその人の意気さかんの壮さかんなのを語るのは、少くとも病魔退散きしとうの祈き禱とうにもなろうと思う。」

「至極てまへですが。いや私望たてむ処、先生という楯たてがありや、二日でも

三晩でも、お夏さんの前途を他所よそながら見届けるまでは居坐つて動きません。」

「私も退院の日延べをする。そこで、そこで竹永さん、関戸の邸の、もみじの下で、その最中を食べてからどうしたんです。」  
「てまえ私もずツと乗のりが来て、もう一ツお食あがんなさい、と自分も撮つまみながら勧めました。」

(沢山)とあるから、(それじゃお土産に、)と洒落しゃれにいつて、  
捻ひねつてお夏さんに差着けると、腕かひなもちらりと透きそうに、片袖の振ふりを、黙つてこつちへ向けました、受け入れようというんでね。

(もみじを御見物と見えますが、これから巢鴨へ抜けて、)先生、あの邸はね、私どもが居た池のふちから、通天門と額を打った煉れ

瓦んがの石の門を潜くぐつて、やはり紅葉の中を裏へ出ると、卯之吉うのきちとい  
う植木屋の庭を、庚申塚こうしんづかの手前へ抜けられますわ。

(そこから、滝の川へでもお廻りか、)と尋ねると、(上野へ、)  
という。

私方々の紅葉の風説でたらめなんど、出鱈目でたらめに饒舌しゃべるのを、嬉しそうに  
聞いていなすつたつけ、少し傾いて耳を澄まして、

(可いいことね、)といった。

(はて、)私には何だか分らん。

(お囃子はやしの笛が聞えますよ。)

ちつとも聞えん。

(はてな、)と少々照れたでがす。その癖心寂しいほど寂しん——

花にはあらず七重八重、染めかさねても、もみじ衣の、はだ膚に冷  
 き、からくれない韓紅。

「——閑としてゐるじやがあせんか。」

## 三十二

「お夏さんが、

(聞えますよ。あら、オヒヤラー、オヒヤ、ヒューイ、ねえ、あ貴  
 下、なた聞えましょう。)

と打傾いて、遠くへな、てまえ私を導いて教えるような、その、目は  
 冴えたがうつとりした顔をじっ熟と見ながら聞き澄ますと、この邸じ

やありません。

もみじを隔てて、遙はるかにこう、雲の中で吹き澄ますといった音色ねいろで、オヒヤラー、オヒヤ、ヒューイ、ヒヒヤ、ユウリ、オヒヤラー、アイ、ヒユウヤ、ヒユールイ、ヒヨウルイヒ、と蒼空あおぞらへ響いて、  
幽かすかに耳に留りました。

(成程、お囃子ですな。)

と腕組をして、おつき合いに天窓あたまを突出していると、

(どこでしよう、ほんとに好いいこと。)

といつて葛かつら桶おけを——じゃない——その陶器せとものの床几しょうぎをすつと立ちました。

(ええ、御近所だから、慶喜様のお住居すまいかも知れません。)

(そう、)

といつて、お夏さんが空を仰いで見ましたがね……」

虹を刻んで咲かせた色の、高き梢こずえのもみじの葉の、裏なき錦にしきの帳とばりはあれど、蔽おおわれ果てず夕春日ゆうづくひ、光颯さつと射さしたれば、お夏は翳かげした袖几帳そでぎちよう。

「ちようど、ぱらぱらと散つて来るのが、その夕日よを除けた、袂たもとへ留とどまったのですがね。余りに綺麗だ。これにや相当のワキ師わきしがあろう。

もつとも大抵は禿はげていますで、諸国一見の僧そうになりや、ワキツレぐらいは勤てままろうが、実は私わたし、狂言方きやうげんかただ。

楽屋で囃子の音がすれば、もう引込んで可よい時分。フト気が着

いたのは、悪くすると、こりや出家でない。色ワキをここで待合  
そうなどという、寸法で来たのかも知れん、それだと邪魔になる。  
さらば急いで参ろう、と思えますとね。

妙なことをいいました。

その大木のもみじの下を、梢を見たなり、くるくると廻つて、

(いいえ、お雛ひなさま様が遊ぶんでしょう。ちようどこの上あたりで

聞えるんですもの、そうして、こんな細い、小さな音ねのするのは  
五人囃子が持っている、かわいい笛でなくツてさ。)

異かわつたことのおおせかな哉。お夏さんは熟じツと見ている。帯も襟  
も、顔なんざその夕日にほんのりと色がさして、矢筈やはすの紺も、紫  
のように見えましたがね。

暮れかかつて来ました。夜昼を分けるように、下の土は冷たく濡れて、黒くなつて、裾が薄暗く見えたんで、いや、串じょうだん戯ごはよして余り艶あでやか麗れい過ぎる。これなり天人になつて、雲の上へ舞い昇られてはなるまい、と、のこのこと近く寄つて、

(もう暮れ方になりましたな。)

とさそいをかけると、はつと気がついたように、

(ああ、暗くなつて来た、こんな処に遊んでいるのは焼け出されたお雛様でしようねえ。

こんなに真赤まっかで、これが炎になつたらどうでしょう。そうしたら死んでしまひましようねえ、気味が悪いようになりました。)

と、いうことが少し変だ。

気つけをと思つたし、聞きたくはあつたしで、

(度々御災難でありましたな。唯<sup>ただいま</sup>今は、どちらに、)

(ついこの青柳町のね、菊畑のある横町ですよ。ちとお寄んなさいました。母は亡くなりましたが、おばさんが居ますから、)

成程おばさんが居ますからな筈でがした。……自分は居なくなる積りだから。

(それでは、)

(さようなら、)

と挨拶をして、もう一度梢を視<sup>なが</sup>めなりに、ズツと向うへ、紅葉の下を、うしろ姿になりました。それつきり見返りもしなかつたが、オヒヤ、ヒユウイ、ヒヒヤ、ユウリというのが、いつまで

も私<sup>てまえ</sup>、耳の底に残るんで。独<sup>ひとり</sup>で見送っていると、大浪の裾がどこまでも畝<sup>うね</sup>った形の、低くなつた方へ遠ざかつて行くのが、何となく暮方で、影が薄い。

ト緋色<sup>ひいろ</sup>の雲の、隧<sup>トンネル</sup>道の入口、突当りに通天門とある。あすこのもみじは、実際、そこからが自慢なんです。足も停めず、視めもせず、アーチ形に中の透く、燃え立つ炎のような中へ、消え失<sup>う</sup>せた体<sup>てい</sup>に入ってしまった。

気になる。

私、すぐあとから駆出して、」

「件の通天門くだんを入ると、赫かッと明あかるく、不残真紅のこらずまつか。両方から路をせばめて頬がほてるようだが、それは構わん。

お夏さんは、と見るとこの一条路ひとすじみち、大分長いのもう見えず。きよろきよろ四辺あたりみまわをしたが、まさか消え失せたのじやあるまい、と直ぐに突切つツキつてぐるりと廻ると、裏木戸に早や山茶花さざんかが咲いていて、そこを境に巢鴨の卯之吉が庭になりまさ。

もみじはここも名物だが、ちと遅い。紅あかは万両、南天の実。鉢物、盆石、水盤などが、霞かすみ形がたに壇に並んだ、広い庭。縁には毛氈もうせんを敷いて煙草盆などが出してあり、世界が違ったように、ここは外套がいとうやら、洋服やら、束髪やら、腰に瓢箪ひょうたんを提げた、

絹のぼつち革足袋かわたびの老人も居て、大分だいぶんの人出。その中にもお夏さんが見えますまい。

はてな、巢鴨の通へ出てしまつたか、余り不思議だと思ふ。生垣の外は、馬士まごやら、牛士うしかた、牛車、からくたと歩行あるいて、それらしいのありません。

夢かと思うと、そうじゃない。やつと気が着いた、分らないのも道理こそ。

向うに見える、庭口から巢鴨の通へ出ようとする枝折門しおりもんに、曳ひきつけた腕車くるまの傍わきに、栗梅のお召縮緬めしちりめんの吾妻あずまコオトを着て：：いや、着ながらでさ、：：：立っていたのがお夏さんでね。車は今雇つたのじゃありません、裏道から大廻りに、もみじ邸を卯之

吉の木戸まで廻らせて、ここへ待たしてあつたんで。コオトなぞも預けてあつたものと思われます。で、直ぐに上野へ殺されに行こうとする処だつたのです。一体どこで降りましたか、」

これは探訪も知り得なかつたのであつた。お夏はその日、人知れず、今わのなごりを、浅瀬の石に留めたので。 倅おもかげ橋ばしの倅の、月夜の状さまに描かれたのは、その倅を写したのである。

見よ。(この第一回を。) されば、お夏の姿が、邸くだんのみみじに入ると齊ひとしく、だぶだぶ肥つた、赤ら顔の女房が、橋際くだんの件の茶店の端へ納戸から出て来た。砂利を積んだ車がまたぐらぐらと橋を揺ゆすつたので、砂塵さじん濛もう々もう、水も空も、日が暮れて月が冴えねば、お夏たがたずたした時のように澄みはしない。

ちと疾はやいが晩餐ばんさん。かねてあつらえてあつたから、この時看護

婦が持つて来たので、日はまだ鉄砲洲の帆柱の上に高い。

お夏の病室も、危あやうく物もの静しずかである。

愛吉の咽喉のんどを鳴らしたその夜の酒は、日が暮れてからであつた。

女房は暮合いに帰つて来て、間もなく、へい、お待遠、と台所へ持込んだけれども、お夏の心づけで、湯銭を持たせて、手拭てぬぐいを持たせて、錫すずの箱入の薫の高いしやぼんも持たせて、紫のゴロの垢あかすりも持たせる処ところだつた。が、奴やつこは陰でなく面と向つて、舌を出したから、それには及ばず。

ああまだそれから羽織るものを、もとより男ものは一ツもない。

お夏は衣紋えもんかけにかけてあつた、不断着の翁格子おきなごうしのを、と笑いながらいったが、それは串じょうだん戯。襟をあたつて寒くなつた、と鏡台をわきへずらしながら自分で着た。けれども………愛吉は、女房の藍微塵あいみじんのを肩に掛けて、暗くなつた戸外へ出たが、火の玉は、水船で消えもせず。湯の中で唄も謡わず。流ながしで喧嘩もせず。ゆつくり洗つて、置手拭、日和下駄をからからと帰り途みち、式部小路を入ろうとして、夜目にもしるき池の坊の師匠が背戸の山茶花さざんかを見て、しばらくしたのは、恐らく生れてはじめてであつたらう。

その石壇の処まで来て、詩人が月宮殿かと想うように、お嬢さんの家を見た時、小ぢんまりとした二階の障子あかりに明がさした。

思わず頸うなじをすくめたが、密そつと格子から沓くつぬぎ脱の下駄のぞを覗いて、

すぐに遠慮してひあわい廂合くぐに潜り込んで、ちよろりと台所へ面かおを出す  
 と、開けてはあつたが、働いても居ず、女房は長火鉢かたわらの傍らに、新  
 しい能代のしろの膳ぜん立だてをして、ちやんと待っていた、さしみに、茶碗、  
にざかな煮肴にに、酢のもの、——愛吉は、ぐぐぐと咽喉を鳴らしたが、  
 はてな、この辺で。……………

## 三十四

食事が済む、と探訪員は、渠かれ自みづから經典と称する阿夏おなつぼん品しんを誦よみ

しはじめた。これよりさき金之助は、事故あつて、訪問の客に面会を謝する意を、附添の看護婦に含ませたことはいうまでもない。「話の続は、今その吾妻コオトを着た処でしたな。それから、同おなく、それもやはり、とつて置いたものらしい。藍あいなずみ鼠ねずみの派手な縮ちりめん緬ずきんの頭巾を取つて、被かぶらないで、襟へ巻くと、すつと車へ乗る。庭に居たものは皆一いっとき齊ときにそつちの方。

母衣ほろをきりきりと巻き下ろして、楫かじ棒ぼうを上げる内に、お夏さんは乗りながら、袂たもとから白いものを出した。や、最中を棄てるのかと思うと、そうじやなかつたんで、手巾ハンケチでげす。

でね、妙なことをしたというのは、もう一ツ小さな壇びんを取出して、その手巾の中へ、俯向うつむけにしました。車が二三間駆け出す内

に、はらはらと、肩から胸へ振りかけたと思うと、その壇を、母衣のすかしから、白い指で、往来へ棄てたんでがす。

後で知れました。白書薇しろばらの香水なんで。山の井医学士夫人、子爵山河内定子は、いつでもこの香水の薫がする。

と、お夏さんが愛吉に教えておいたものだッて、いうじやありませんか。

何と驚いたものでがしよう。その袖の香を心当てに、谷中やなかのくらがり坂ざかの宵暗よいやみで、愛吉は定子（山の井夫人）を殺そう。お夏さんは定子になって殺されようという、——まだもつとも、他にほかに暗号あいごも極きめてあつたんではありますかな、髪を洗つて寝首を搔かかせた、大時代な活劇でさ。あの棄鉢すてばちな気紛れものと、この姉あねさ

んでなくツちや、当節では出来ない仕事。また出来でされちや大変  
 だがすのに、とうとう見事みんごと仕出来した。何という向むこうみず不見な寄  
 合でしような。

先生。話は前あとさき後になります、ちようどこの場合だから申し  
 ますがね。私てまえ、前にも申す通り、何んだか気になる。お夏さんの  
 跡から上野へ行つて、暗がり坂で、きやツ！ 天地顛てんどう倒。途轍とてつ  
 もない処へ行合せて。——お夏さんに引込まれて、その時の暗あ  
 号いすになった、——山の井医院の梅岡という、これがまた神田ツ児  
 で素敵に気の早い、活澆な、年としわか少年な薬剤師と、二人で。愛吉に  
 一剃かみそり刀、見事に胸をやられたお夏さんを、まあとかくしてです。  
 私てまえ懇意な、あすこ、上野の三宜亭さんぎてい。もつともこりや谷中へ行く

前に、お夏さんが呼び出しをかけたその梅岡薬剤兄哥あにいと二人で、休んだ縁もあつたんでがすから、その奥座敷へ内証で抱え込んだ折でした。

愛吉に、訳を尋ねると、やつこ 奴人間の色はねえ。すえまなこ 据眼すえまなこになつて

しやべ 饒舌しやべつた、かねての相談、お夏さんの謀はかりごとというのをお聞きなさい。

(じゃね、愛吉、お前、何でもかでも私のために、せんせい 医学士おくさの奥

様んを殺して、願いを叶えてくれるんなら、水天宮様の縁日に、

かしらこぶん 頭の乾児かしらこぶんと喧嘩をするようにして暴れ込んで行つたつて殺される

ものじゃない。私うまがね、旨うまく都合をして、定子さんを可い処へ引

出すわ。

それにや、本宅の薬剤師に、梅岡さんといつて、大層私を可愛

がってくれる人があつて、いつでも先生を呼出すには、その方に手紙を出したり、電話をかけたりにして頼むんだよ。やつぱりお前とおんなじように、大の姫ひいさま様嫌い。おもて向き私を御新造にしてやりたい。でも定子さんがあつちや何だから、ちよいと一服モルヒネでも装もりましようか、手のもんでわけなしだつて、洒落しやれにもいっている人だから、すぐに味方して、血判をしてくれます。」

いや、遠山さん。」

と丹平苦り切つた顔がんしよく色で、

「愛吉が、手負ておいの傍そばで、口を尖とがらかして呼吸いきを切りながらせいせいいつて饒舌じやうぜつつた時には、居合わせた梅岡薬劑。神田の兄いだ  
が、目を円くして驚いた。

その筈はずでがす。隣家となりの隠居りゆういんの溜飲すいやくにクミチンキを飲ますんだつて、メートルグラスでためした上で、ぴたり水薬すいやくの瓶びんに封ふう。薬剤師薬剤師その責せめに任まかず、と遣やる人を、人殺りころしの相談さうだんに、わけなし血判ちけん。自分の医院いんえんの奥様おくさんに、ちよいとモルヒネをなんて、から、無法むぼう極ごくまる。

ねえ、先生。」

### 三十五

「これをまた真面目まじめにうけさせる気で、口へ出した、柳屋やなぎやのも柳屋やなぎやの。聞いてほんとうにした奴やつこも奴だ。で、お聞きなさい。

（その梅岡さんに頼んで、いつの幾日——今日だ。）と愛の野郎  
 がいいました。すなわち一昨々日。（やさきおととい）

そこで、またお夏さんの言を愛吉がいうんですが、  
（ことば）

（奥さんを上野まで連れ出させよう。お前、前へ廻つて支度して、  
 待伏せをしておいで。いい処があるかい。）

というから、愛吉が、  
（しめ） 占たな！ 占たな！

（それだつてお前、時の都合と、所はえ？）

トこりやお夏さんが心あつていつたんですな。考えていると、  
 愛吉は何、剃刀で殺すぐらいは、自分が下駄の前鼻緒を切るほど  
 にも思わない。都合をして、定子阿魔の顔さえ見せておくんなさ  
 りや、日本橋でも、万世橋でも、電車の中でも、劇場でも、どこ

でもかまわないツていったそうでき。するとお夏さんの方は覚悟があるから、

(谷中<sup>やなか</sup>なら、墓原の森の中を根岸で下りる、くらがり坂が可い。

踏切の上の。あすこいらで、笹ツ葉の下へでも隠れておいで。)

こりや、それ、今もおつしやつた歌の先生、加茂川の馬車新道へ、炎天にも上野まで、鉄道馬車。後を歩<sup>ある</sup>行いて通つたから、不幸にして地の理<sup>あかる</sup>が明い。

(私は梅岡さんに頼んで、こうしよう。奥<sup>おく</sup>様は歌<sup>うた</sup>が好<sup>すき</sup>で、今で

もちよいちよい、加茂川<sup>とこ</sup>ン許へお通いだから、梅岡さんに、――

私も歌<sup>うた</sup>が習<sup>も</sup>いたい、紅葉<sup>もみじ</sup>の盛り、上野をおひろいのおともをしな

がら、お師匠さんへ、奥<sup>おく</sup>様から、御<sup>お</sup>紹<sup>ひ</sup>介<sup>あ</sup>せ下さいまし。とこ

いって貰いましょう。

好な道だから、二ツ返事で。その日に限つて、おひろいかなんか。梅岡さんが、その上野をおともという間に、いい加減に日を暮らして、夜になつて、くらやみ坂へ連れ行かせるから、そうしたら、白薔薇の薫をあてに。)

その相談の出来たのは、お夏さんが三年ぶりで愛吉に逢つた夜で。余所ゆきを着ていた上衣だけ脱いで、そのまま寢床へ入つた。緋の紋綸子の長襦袢のまま、手を伸ばして、……こりや先生だと、雪の腕、という処だ。

手近な床の上の、鏡台の抽斗から、その壇を出して、まだ封も切つてなかつたそうで。これはね、ちようどその日行合わせた

山の井さんの土産でしたと。

くちが堅く入っていたのを、ト取ろうとすると、占しまっていたので、高島田にさした平打を抜いて、蓮葉はすはに、はらんばいになったが、絹蒲団にもつかえたか、動きが悪いから、するりと起き上つて、こう膝を立てていましたツてね。

抜けるほど色の白い処へ、その姿だから、媚なまめかしきは媚かし、美しさは美ししで、まるで画えに描いたように見えましたツて。

こりや何んです、小石川青柳町、お夏さんで名がついた、式部小路の内に居る、お賤しずツて女房かみさんがちようどその時、行燈あんどうを持つて二階へ上つて、見たんでがすと。

ね、洋燈ランプと取替に行つたんですと。先生、話はいろいろになり

ますが、お賤というのは洲崎で引手茶屋をしていたんで、行燈組あんどんでね、ことにお嬢さんには火が祟るたた、とかいつていたんだから、あの陽気家を説き伏せて、残燈ありあけは行燈と取極めたんでさ……洋燈ランプはかんかん明あかるかった。

すぐに消そうとすると、

(お待ち、見えなくなるわ。) ツてくちを抜いた。芬ぶんと薫かったでしよう。

(まあ、佳いい句にでございますこと。)

(光みちゃんいが好いなの。)

光起さんの事でさ。――

(私にこの句をさして、抱こうと思つたつて、そうはいかない。)

ちとやんちゃん。もつともね、少し飲んでいたんだそうで。

(ねえ、愛吉。)

と声をかけた。奴は、ぎごちなさそうに小さくなつて、半分もぐりながら、目ばかり、ぱちぱち。」

「じゃ、愛吉は、」と遠山が口を入れた。

「勿論、枕を並べて。」

遠山金之助、

「え。」

竹永丹平は、さもこそという片頬かたほえ笑み、泰然自若として、

「ま、ま、お聞きなさい。ここだ、これが眼目、此経しきようなんじ難持、若に暫時やくざんじ、この経は保ち難し。」

もししばらくも保たんものは、ただお夏いちにん一人という処でがすから。」

### 三十六

「そこで女房は、

(なるほど、貴女あなたには似合いません、でございますよ。)

愛吉かたわらにあり 傍あり 在。で、その際、ちと諷ふうする処あるがごとくに

つて、洋燈ランプを持って階下したへ下りた。あとはどうしたか知らないそ  
うでさ。

勿論普通の人間じゃ寐ねられるどころではなかったが、廊出くるわでの

女房<sup>かみさん</sup>。生れてからざつと五十年。一年三百六十五日、のべつ、そんな処には出<sup>で</sup>会<sup>つく</sup>わ<sup>わ</sup>していたんだから、さしたる大事とは思わなかつたし、何が何でも人殺の相談をしようなどは、夢にも、この私にしたって思いませんや。

その後で、愛吉の鼻のさきへ、顔と一緒に、白薔薇の壇を押つけか、何かで、

(可<sup>い</sup>いかい。この匂いだよ。もう一つはね、くらがり坂へ行つたら、奥さん！とその梅岡<sup>あたり</sup>さんが四辺を見計らつて声をかけて下さるように、相談をして置くから、可<sup>い</sup>いかい！この薫と、その奥さん！を暗号<sup>あいご</sup>にして、……とくれぐれもおつしやつたんで。)

と愛吉が云うんです、先生。

三宜亭で、夢中ながら目を光らせて、鼻をフンフンとやって、  
 (私<sup>わつし</sup>あ、固<sup>かた</sup>唾<sup>た</sup>を飲<sup>のみ</sup>んでた処<sup>ところ</sup>だ。符帳<sup>ふちやう</sup>が合<sup>あ</sup>つたから飛<sup>と</sup>出した、)と  
 拳<sup>こぶし</sup>固<sup>こ</sup>で自<sup>みづか</sup>分の頬<sup>ほ</sup>げたを撲<sup>なぐ</sup>りながらいうんでしよう。

いや、傍<sup>かたえぎ</sup>聞<sup>き</sup>きをした山の井<sup>せんせい</sup>光<sup>せい</sup>起<sup>き</sup>、こりやもう、すぐに電話<sup>でんわ</sup>で  
 お呼<sup>よ</sup>び申<sup>ま</sup>した。その驚<sup>おどろ</sup>いたより、十<sup>じゅう</sup>層<sup>そう</sup>倍<sup>ばい</sup>、百<sup>ひゃく</sup>層<sup>そう</sup>倍<sup>ばい</sup>、仰<sup>おほ</sup>天<sup>てん</sup>をした  
 のは梅<sup>うめ</sup>岡<sup>おか</sup>薬<sup>やく</sup>劑<sup>ざい</sup>で、

(国<sup>せんせい</sup>手<sup>て</sup>の前<sup>まへ</sup>じや申<sup>ま</sup>しかねるが、僕<sup>ぼく</sup>はまた、三<sup>さん</sup>宜<sup>い</sup>亭<sup>てい</sup>まで是<sup>こ</sup>非<sup>ふ</sup>とお  
 夏<sup>なつ</sup>さん<sup>さん</sup>に呼<sup>よ</sup>出<sup>で</sup>されて、実<sup>まこと</sup>は相<sup>あ</sup>濟<sup>せい</sup>まんが、友<sup>とも</sup>達<sup>たち</sup>に頼<sup>たの</sup>んでちよいと抜<sup>ぬ</sup>  
 け出<sup>で</sup>して来<sup>き</sup>ると、いっつも世<sup>よ</sup>話<sup>わ</sup>になると礼<sup>れい</sup>をいって、お小<sup>こ</sup>遣<sup>つかい</sup>が沢<sup>たく</sup>  
 山<sup>やま</sup>あるから御<sup>ご</sup>馳<sup>ち</sup>走<sup>そう</sup>するかわり、濟<sup>せい</sup>みません<sup>せん</sup>が、姫<sup>ひめ</sup>様<sup>さま</sup>におつし  
 やるように、奥<sup>おく</sup>さん、といいな<sup>い</sup>ながら歩<sup>ある</sup>行<sup>こう</sup>いて下<sup>くだ</sup>さい。貴<sup>あなた</sup>下<sup>げ</sup>を、且<sup>かつ</sup>

那さま、とでも、こちの人とでもいうわ。と大呑気だから、おもし愉ろ快ろい、と引受けたんで。あれから東照宮の中を抜けて、ぶらぶらしながら谷中の途中、ここが御註文と思うから、多勢人の居る処じや、奥さん——山の井の奥さん。時々、夫人——などというと、顔を赤くなすったツけ。

岡野へ寄ろうと、くらがり坂へかかった時は、別にそこで、というあつら誂あつらえがあつたわけではない。

いっそ、特にあの坂で、とでもいうことなら、いかにお夏さんが神色自若としていたから、といつて、こちらが呑気だからといつて、墓といい、森といい、暗さといい、たといそこまでは上の空でも、坂の下り口じやちよいとでも気がさして、ほか他の路を歩き

ましようぐらいはいえるだろうのに。

何事もなかった。

坂を下りかかると、今から思や、礼の心であんなすったか、並んで歩あ行るいていた僕の手を、ちよいと握とつて、そのまますたすたと、……さよう、六足むあしばかり線路の方へ駈かけ出しておいでなさると、……さよう、よろよるとなすったようだから、危あい！ と声をかけようと思つて、ここでつい我知らず、奥さん！ といった。

すると愛吉が飛出しました。

これでお助たすかんなすればよし、さもないと僕が手伝をして殺したも同然だ。）

と薬剤師、その責せめに任じて、涙ぐんでいったんでがすがね。

先生、命数、」

といった。同時に、

「命数、」

目と目を見合わせ、

「か。」

「も知れませんか。」

「竹永さん、貴老あなたはまたどうしてそこへ行き合わせました？」

「そりやこうでがす。」

ええ、お待ちなさいよ。」

と丹平前に屈かがんで、握にぎりこぶ拳したなを掌そこで揉み、

「そうだ、ただいまのその巢鴨の植木屋、卯之吉の庭で、お夏さ

んの車の、矢のように飛んだを見て、別にあとをつけようという考かんがえはなかつたんでがすがね。懐しくツてなりますまい。

青柳町だといった待て待て、どんな処すまに住つてるか行つて見ようと、逆戻りにもみじへ入ると、や、ぞろぞろと人が居る、通天門くぐを潜つて出ると、ばらばらと見物でさ。妙なことがあるもんで、ここで何も俗にいう死神が取着いたというわけではないから、私てまえのような筵むしろやぶ破ぶりは除外例、その死神がお夏いざなさんを誘うためにしばらく人を払つたというのじやがあせん。私の口でいっちや似合いませんが、死を決すれば如しんのごとし神かみで、名僧のごとく、知識のごとく、哲人のごとし。女とてかわりはない、おのずから浮世ちりの塵ちりを払つて、この仙境にしばらくなごりを惜おしんだのでありましよ

う。

その時はそうとも思わず、ははあ、こりややはり自分たちと同様風説うわさばかりで、一体、實際縦覧をさせるか、させぬか、そこどころちとあやふやな華族の庭。こりや、遠慮をして見合せていた処へ、二人。お夏さんはともかく、私というのまでその中からあら頭われたのを見て、卯之吉の庭に居た連中、気を揃えて推参に及んだな。

どうだ善知識だろうと、天窓あたまはこれなり、大手を振って通り抜けた——愚にもつかぬ。

あれから、今の真宗大学を右に見て、青柳町へ伸のして、はて、どこらだろうと思う、横町の角に、生垣の中が菊さかりの盛。そこに立

つてただ一人視ながめていた婆おばさんがあつた、その顔を見るとき、塞ふさがつたようになつた細い目で、おや！ といった。」

### 三十七

「（まあ、おめずらしい、）と莞にっこり爾りしたろうではありませんか。方かたなしの皺しわになりましたが、若い時は、その薄うすくれない紅はれに腫はれぼつたまぶたい瞼まぶたが恐ろしく婀娜あだだつた、お富といつて、深川に芸者をして、新内がよく出来て、相応に売つた婦人おんなでしたが、ごくじみな質たちで、八幡様寄よりの米屋に、米搗こめつきをしていた、渾名あだなをニタリの鮫鱈あんこう、鮫鱈あんこうに似たりで分かる。でぶでぶとふとつた男。ニタリニタリ笑

っているのに、どこへ目をつけたか、その婀娜な、腫ぼったいの  
をなくなすほど惚れましてな、勤めをよすと、夫婦になつて、資<sup>も</sup>  
本を注<sup>とで</sup>ぎ込んで米屋を出すと、鮫鱈にわかには旦那とかわつて、せ  
つせと弁天町へ通う。そこで見張り<sup>かたがた</sup>旁々というので、引手茶屋  
の売<sup>うりすえ</sup>据を買つて、山下という看板をかけていましたが、ニタリ  
殿はますます狂う。抱えの芸<sup>げいしや</sup>妓は、甘いと見るから、授けちや  
証文を捲<sup>ま</sup>かせましよう。せめてもの便<sup>たより</sup>にした養女には遁<sup>に</sup>げられる、  
年<sup>とし</sup>紀は取る、不景気にはなる、看板は暗くなる、酒は酸くなる、  
座蒲団は冷たくなる、火は消える、声は出なくなる、唄は忘れる、  
猫は煩らう、鼠は騒ぐ、襖<sup>ふすま</sup>は破れる、寒くはなる、大戸を閉める、  
どこへどうしたろうと思う……お婆さん。

串戯じょうだんではない、何時なんどきだと思う。仲ノ町ちやうじやチャンランチ

ヤンラン今時は知らないが、店すががきで、あかりがちらちら廻る頃を、余所よその垣越かきに立って、菊を見ているような了りようけん簡かんだから、引手茶屋退転だ。しかし達者たつしやで可いい、どうした、と聞くと、まあ、お寄んなさいまし、直すくそこが内だ、という二階家にかいけでさ。門か札どくだに山下賤やまのしず、婆さんの本名ほんなでしょう。

豪えらいな、というと、いや、御奉公ごほうこうをいたしております、御主人ごしゆじんというのとは？

旦那だから申しますが、……ちとこりや新聞のたねとりおにや可笑かしないいぐさだが。

ほんとうに世の中ツてもものはわかりませんもので、あの、木場

の勝山さんね、分散をなすつた。そのお嬢さんのお世話を、と半分聞かず、てまえ私、火鉢の前に腰を据えた。」

さて、女の主人は知れた。男の御主人は、と聞くと、これはなおの事。

ごくごく内証ですが、日本橋のお医師いしやで、山の井光起さんとおつしやる方、という。いよいよとなりましたらう。

いや、江戸えど児この医学士め、すてきなものを囲つたぞ。

フムお妾めかだ。これがお前まへだとちようど名も可い。イヤサお富と、手拭てぬぐいを取る、この天窓あたまで茶番になるだらう。というと、いえ、

私にも分りません、不思議なことには、ひさし久いあいだ、ついぞまだ一所におよつた事もなし。

(夏ちゃん、)

と洒落しやれにおっしやつたり、お真面目な時も、

(勝山さん、勝山さん、)と丁寧にお呼びなさる。

その癖、この通り、それはそれは勿体ないほど、ざくざくお宝をお運びで、嬢さんがまたばらばら撒まく。土地が辺鄙へんぴで食物くいものこそだが、おめしものや何か、縮ちりめん緬めんがお不断着で、秋のはじめに新しいコオトが出来ました。

しかしそれも旦那さままかせ。また珍らしい事には、櫛くし一枚、半襟一かけ、お嬢さんが、自分の口から、欲しいとおっしやつた事がないので。

旦那様は男の事、お氣がつくようでもぬかりがあつて、ちぐは

ぐでおかしくらい。ついこの間も嬢さんが、深川の浄心寺、御ご菩提ぼだいしよ所へ、お墓まいりにおいでなさるのに、当世のがないもんですから、私の繻子張しゆすはりのお持たせ申して、化けそうだといって、床屋の職人にお笑われなすった。——これから先生、婆さんが、その三日前に来て泊ったという、愛吉の野郎のことを話したんでがすよ。

もつとも私てまえもまた、床屋の職人というのが、直ぐに気になったから、床屋の職人？ 知己ちかづきか、といって尋ねたんで。」

「お待ちなさい。」

と金之助は、寝台ねだいの上から乗出しながら、

「気に入った！ ああ、そこにその人はまさに死なんとしている

が、気に入った、といわねばならんですよ。

じゃ何だ、医学士はざくざく注ぎ込む、お夏さんはばらばら遣う、しかも何一つ自分から欲しいといったことはないのか。そうして一たびも枕をかわさぬ、豪いな！ その清浄な膚をもつて、緋の紋綸子の、長襦袢で、高髻という、その艶麗な姿をもつて、行燈にかえに來た雇の女に目まじろがない、その任侠な気をもつて、すべてを愛吉に与えてその晩……」

「……………」丹平默然として少時不言。この間のしようそく、  
げにしやうとすべきなし 偈無可為証。

ややあつて丹平他をいう。

「その癖、光起さんを恋しがつて、懐しがつて、一いちんち日と顔を見ないと、苦勞にする、三日四日となると鬱ふさぎ出す、七日も逢なわな  
かろうものなら、涙ぐむという始末。

じゃ顔を合わせればどうかというかと、すねるような、くねるよ  
うな、その素ツ気のなさ加減、傍そばで見る婆さんの目にも氣の毒な  
くらい。

きちんとして、

(先生、)

(勝山さん、)

という工合が、何の事はない。大町人の娘が、恋煩いをして、主治医が診察に見えたという有様。

先生がうまい事をいたしましたつて。

（勝山さん、どうかその医学上の講釈を聞くのと、手習を教えてくださいだけはあやまる。私は藪やぶの上に悪筆だ、）というたのだそうです。

またきつと、心臓というものはどこにあるの、なぜ御飯おまんまが肺の方へ行かないで済むの、誰の目も綺麗なのは、水晶と同じ事か、なぞとね、番ごと聞く。第一顔を見ると直ぐに清書を持出して、お目にかける。

（いや、まずいこと、私の医者じやうだんのようだ、）と串戯じやうだんにいうの

を真にうけては、せつせと双紙に手習をするんだそうで。

そうかと思うと、時にやがりと巫山戯出して、肩へつかまる、羽織の紐を引断る、ひっき膝を打つ、くすぐ擽る。車夫でも待っていないと、かどぐち帰りがけに門口からドンと突飛ばす、もつともそんな日は、医学士の姿を見ると、いきなり飛出して框から手を引いて、かまちすぐそのまんまで二階へ上ろうとするから、狭い階子段、はしごだんで行詰つてどちらへも片附かずに、も揉む。

しなだれるんじゃない、媚びるんじゃない、甘えるの。派手なんじゃない、騒々しいので、恋も情もまだ知らない、素の小児かと思つと、帰つたあとを、二階から見送つて、そのまま消えそうに立っている。

そこで附添いが引手茶屋の婆さんだから、ちとその、そこん処をな。

何して、いい工合に、と独りで気を揉んだそうですが、さて口へ出そうとすると、何となく、氣高い、神々しい処があつて、戦場往来の古兵ふるつわものが、却つて、武者ぶるいで一言ひとことも出んのだそうで。

まあまあ、不思議な縁というのであろう。とても人間業わざで行くのじゃない。その内に、出雲いずもでも見るに見かねて、ということになるだろう、と断念あきらめながらも、医学士に向つて、すねてツンとする時と、烈はげしく巫山ふざけ戯げて騒ぐ時には番ごと驚かさねながら、ツンとしても美人の娼妓しょうぎのようでなく、騒いでも、売れる芸者の

ようでなく、品が崩れず、愛が失せないのには舌を巻いていた処、いやまた愛吉が来た晩は、つくづく目覚しいものだつたと言います。……」

それはこうである。愛吉は、長火鉢の前でただ旨うまそうに飲んでいたが、心しんもつて嬉しそうな顔に見えなかつたのを、酌をしながらお賤も不思議に思った。蓋けだし生れつき面つらが狼に似たばかりでない。腹に暗き鬼を生ずとしてある疑心の蟠わだかまりがあつたのも、お夏を一目見たばかりで、霧の散つたように、我ながらに搦つかまえ処もなく、て済んだその時、今そこに婆さんの顔ばかりとなつたのみならず、二杯三杯と重かさなるにつれて、遠慮も次第になくなる処へ、狂きちがい水みずのまわるのが、血の燃ゆるがごとき壮わかもの伎わざ、まして渾あだな名を火の玉

のほてりに蒸されて、むらむらと固る雲、額のあたりが暗くなつた。

「ウイ、」

と押おっつけるように猪口ちよくを措いて、

「嬉しくねえ、嬉しくねえ、へん、馬鹿にしねえや。何でえ、」

と、下唇を反そらすのを、女房はこの芸なしの口不調法、お世辞の気で、どっかで喧嘩した時の仮こわいろ声をつかうのかと思つていと、

「何てやんでえ、へッ笑かしやがら、へッ馬鹿にすら、へッへッ馬鹿にしやがら、へッ土百姓、へッ猿さるとうじん唐人め、」

太夫しやくりが出るから、湯のかわりに、お賤が、

「あいよ、お酌、」

「へッ、ありがとうざい、」と皆みんな一所。吃しゃつくり逆と、返事と御礼

と、それから東西と。

### 三十九

「おかみさん、難ありがて有え、お前めえさんの思おほしめ召しも嬉しけりや、肴さかなも嬉しけりや、酒も旨うめえ、旨えけれど可おかし笑くねえや、何てつてこ  
うおかみさん、おかみさん、」

「おや、私のことかい。」

「お聞きねえ、伺いやすがね、こう見渡した処、ざつとこりや一

両がもんだね、愛吉一年の取り高だ。先刻<sup>さつき</sup>お湯銭が二銭五厘、安い利だが持ちませんぜ。誰が、誰がこの勘定をしやがるんでえ。へッ、人をつけ、嬉しくねえ。」

女房は笑つて逆<sup>さから</sup>わず、

「景気がついて来ましたね、ちつとは可<sup>い</sup>い心持になりましたかい。」

「好<sup>い</sup>いにも、悪いにも何だか気になつてならねえんでさ、変てこにこう胸へつつかけて来るんでね、その勘定の一件だ。」

「まあ、何をいうんですね、お嬢さんが御馳走なさるんじやありませんか、おかしな人だよ。」といった、これはよめなかつたに相違はない。

愛の口まますます尖<sup>とが</sup>つて、

「分つてら、分つてらい、いや分つてます。御馳走は分つてら。

御馳走でなくつて、この霜枯に活<sup>いき</sup>のいいきはだと、濁りのねえ酒が、私<sup>わつし</sup>の口へ入<sup>へ</sup>りようがねえや、ねえ、おかみさん。」

「ですから、沢山めしあがれよ。」

「なお心配だ。何が心配だつて、こんな気になることはねえ。何がじゃねえやね、お前さん、その勘定<sup>りあい</sup>の理合<sup>りあい</sup>因縁だ。ええ、知つていら、お嬢さんの御馳走だが、勘定は誰がするんで。勘定は、へッ、」

としやくりをきつかけに声を密<sup>ひそ</sup>め、拇<sup>おやゆび</sup>指を出して見せ、

「レコだ、野郎がしやがるんだ。へん、異<sup>おつ</sup>う旦那ぶりやがつて笑

かしやがらい。こう聞いとくんねえ、私わっしアね、お嬢さんの下さるんなら、溝泥どぶどろだつて、舌鼓だ、這い廻つて嘗なめるでせ。

土百姓の酒じや嬉しくねえ。ヘツ、じや飲むなといったつてそうはいかねえ。第一私あ飲む気はねえが、腹の虫が承知しねえや。腹の虫は承知をしても、やっぱり私あ飲んでえや。からだらしがねえ、またたびだね、鼠のてんぷら、このしろの揚物だ。まったくでえ、死ぬ気で飲んでら、馬鹿にしねえぜ。何をいっていやがるんでえ。おかみさん、何をいつてるんだか、分りますめえ。御ご道理もつともで、私あ自分にも分らねえんだからね、何ですぜえ、無体しやく癩しやくに障るから飲みますぜえ、頂かあ、頂くとも。酌ついどくんねえ、酌ついどくんねえ、」

「可いから、まあおあがんなさい。」

「む、ああ、旨え、<sup>うめ</sup>馬鹿にしやがら、<sup>たま</sup>堪らねえ旨えや。旨えが嬉

しくねえ、七目れんげめ、<sup>しちもく</sup>おかみさん、お憚りながらそういつ

ておくんねえ、折角ですが嬉しくねえツて。いや、滅相、<sup>とてつ</sup>途轍も

ねえ、嬢的にそんなこといわれて<sup>たま</sup>堪るもんか、へッ、

と<sup>うなじ</sup>頸を窘めたが、

「内証だ、嬢的にや<sup>ごく</sup>極内だがね。旦<sup>だん</sup>の野郎にそういつておくん

ねえ、私<sup>いや</sup>あ厭だ、大<sup>だい</sup>嫌だ、そんな奴にや口を利くのも厭だか

ら、おひかえ下さいやし、<sup>てめえ</sup>手前ことはなんて頼んだって挨拶なん

ぞするもんか。

こう小馬鹿にするぜえ、へッ、癩だ、こいつをおさえるにや<sup>あ</sup>呷

おつきり

切だ、」とぐツと飲む奴。

「……………」

「こうおかみ、憚りながらそういつておくんなせえ、済まねえがね、私あ気に食わねえから勘定をして貰ったつて、お礼なんざいわねえつて、」

お賤は気が練れた苦勞人、厭な顔はちつともしないで、愛想よく、

「ああ、可いともね、また礼なんぞいわせるようなお方じやありません。」

「トおつしやる！　へへへへ、おかみさん、厭に肩を持ちますね、いくらか貰ったね。」

「貰いましたともさ、貰ったどころじゃない、お嬢さんだって、私だって、九死一生な処を助けて下すつた方ですもの、」

「九死一生、」

お嬢さんと聞いたばかりでもう眼まなこを据え、

「煩ったかね。もつとも肝の虫が強いからね、あれが病やまいだ。」

「しかもお前さん、大道だったろうじやありませんか。」

「大道で、何が大道で、ここはお嬢さんの内じやねえかね。」

「いいえさ、こちらへおいでなさらない前にさ、屑屋くずやをしていら

つした時の事ですよ。」

「屑屋？ 誰が、こう情なさけねえ、人間さがりたくねえもんだ。こん

ななりはしてるがね、私あこれでも床屋ですぜ、屑屋ひどは酷い、」

といたつた。

## 四十

「誰がお前さんを屑屋だといいましたよ。御覧なさいな、そういわれてさえ腹を立つ、その、お前さん、屑屋をしておいでなすつたんじやないか、それだもの、」

変な面つらで、

「誰が、」

「お嬢さんのことをいつてるんだよ、」

「はあ、問屋か。そう屑問屋か。道理こそ見倒しやがって。日本

一のお嬢さんを妾なんぞにしやあがつて、冥利みょうりを知れやい。べらぼうめ、菱餅ひしもちや豆煎まめいりにやかかつても、上段のお雛様は、気の利いた鼠なら遠慮をして嘗めなねえぜ、盜賊ぬすつと了、盜賊了、盜賊了、盜賊了、

と大音を揚げて、

「叱しつ！ どの野良猫だ、ニヤーフウー」

一杯に頬を膨らし、呻うなつて啼真似なくをすると、ごく低声こごえ、膳の上へ頤あぎとを出して、

「へい、ですかい屑屋ですかい。お待ちなせえ、待ちねえよ、こう旨うめえことを考かんげた。一番、こふんう、禪しんや切立きりだてだから、恥は搔かねえ、素す裸つぱだかになつて、二階へ上つて、こいつを脱いで、」

と胸をはだけた、仕方をする気が、だらしはない、ずるツか脱  
げた両肌脱ぬぎで、

「旦那、五両にどうだ、とポンと投げ出しはどんなもんで。へッ  
へッ、おかみさん。」

「いくらお嬢さんだつてその方にや苦勞人でいらつしやるから、  
お前さん、その拾あわせは五両にやおつけなさりやしまいよ。」

「へい、じゃ嬢的だんも旦那だんかぶれで、いくらか贓物ぞうぶつの価ねが分るんで  
?。」

さては、と女房心づいて、

「まあ、お前さん、おかしなことをおいだと思つていたが、じ  
や何にも御存じじやないんだね、私の留守のうちにお話しじやな

かつたのかい、」

「何をね、」

「それだもの、ちぐはぐになる筈だ。<sup>はず</sup>屑屋をなすつていらつしやつたのはお嬢さんだよ、お嬢さんなんだよ、お前さん。」

「お夏さん、」

「あい、そうさ。」

「や！ 串<sup>じょうだん</sup>戯<sup>ご</sup>じゃねえ、まったくですかい。」

「ほんとにも何にも、」

「あの、屑屋<sup>くず</sup>いつて。踊にやないね、問屋でも芝居でもなけりや、それじゃ、外<sup>ほか</sup>にやねえ、屑い、屑いつて、籠<sup>かご</sup>を担<sup>かつ</sup>いだ、あれなん  
で？」

「ああ、そうともお前、私がお目にかかった時なんざ、そりやおいとしかつたよ。霜月だというのに、汚れた中形の浴衣を下へ召して、襦袢じゆばんにも蹴出しけだにもそればかり。縞しまも分らないような裕のね、肩にも腰にもさらさの布きれでしき当あてのある裾すそを、お端折はしよりでさ、足袋はは穿はいておいでなすつたが、汚いことツたら、草履ぞうりさ、今思おもい出しても何ですよ、おいとしいツたらないんですよ。」

「おかみさん、逢ったのか、」

「そうですよ、」

「串戯くわだじゃねえ、どこでだね。」

「氷川ひかわの坂とこン処とこですよ、」

「いつ？」

「おととし  
一昨年の霜月だつてば。」

「串戯じゃねえ、ちよいと知らしてくれりや可いんだ、」

と膳の下へ突込つっこむように摺すり寄つた。膝をばたばたとやって、  
齒を嚙かんで戦おのいたが、寒いのではない、脱はだいだ膚には氣も着かず。  
太息といきを吐ついて、

「ああ、それだ。芥溜はきだめツていったなあそれだ、串戯じゃねえ、」

「それにお前、寒い月夜のことだった。道芝の露うちの中で、ひどく  
さし込んで来たじやないか。お頭つむりを草原に摺すりつけて、薄すすきの根を  
両手に縋すがつて、のツつ、そツつ、たつてのお苦くるみ。もう見る間に  
お顔の色が變つてね、鼻筋の通つたのばかり見えたんですよ。」  
「ま、ま、待つとくんなせえ、待つとくんなせえ、」

愛吉聞くうちにきよろきよろして、得もいわれぬおももち面色しながら、やがて二階をみつ瞻めた。

「待ちねえ。おかみさん、活きてるね、大丈夫、二階に居るね。」  
「お前さん、おいでなさいよ。先刻さつきからお上りなさいって、おっしやってじゃありませんか。旦那が御一緒いっしょじゃ厭いやなんですか。」  
「そこどころじゃねえ、フウそうして、」

「あとで聞いたら何だとき、途中の都合やら、何やかやで、まだその時お午飯ひるさえあがらなかつた、お弱い身体からだに、それだもの、夜露よるに冷えて堪たまるものかね。」

「なぜ、そんな時、大きな声で、一口愛吉って呼ばねえんだなあ、大島に居たって聞えらあ。」

怨めしそうなが真まことである。

## 四十一

「もつともね、日の暮れない内から、長い間そこに倒れたようになっておいでなすつたんだってね、何だとき。

晩方、あの坂を、しよんぼりして、とぼとぼ下りておいでなさると、背後うしろからお前さん、道の幅一杯になって、二頭立の馬車が来たろうではないか。

ハツと除よけようとなさる。お顔の処へ、もう大きな鼻頭はなづらがぬツと出て、ぬらぬら小鼻が動いたんだっておっしゃるんだよ。

除けるも退くもありやしません。

牛頭馬頭ごずめずにひツぱたかれて、針の山に追い上げられるように、土手へすが縫つて倒れたなりに上ろうとなさると、下草のちよろちよろ水の、溝どぶへ片足お落しなすつた、荷があるから堪らないよ。横倒れに、石へお髪ぐしの乱れたのに、泥ばねを、お顔へは匆ねて、三寸と間のない処を、大きな鉄の車の輪。

天へでも上るようにならぬとまわつて通りしなに、

(馬鹿め！)

ツて、どこの馬べつとう丁も威張るもんだけれど、憎らしいじやありませんか。危い、とでもおつしやることか、どこのか華族様でもあろうけれども、乗つてた御夫婦も心なし。

殿様は山高帽、郵便函ぼこを押し出し出したように、見返りもなさらない。らつこの襟卷の中から、長い尖とがった顔を出して、奥様がニヤリと笑っておいでなのが、仰向けあおむながらね、屹きつとお開あきなすつたお嬢さんの目に、熟じつと留とどつたとおっしゃるんですよ。」

「チヨツ、何たらこツてえ、せめて軍鶏しやもでも居りや、そんな時やあ阿魔あまの咽喉のどぶえ笛つつを突つつくのには、」

と落胆がっかりしたようにいったが、これは女房には分らなかつた——  
——蔵人のことである。

「余程お口惜くやしかつたつて、そうでしょうとも。……新しい秤ばかりをね、膝へかけて二ツにポツキリ。もつともお足に怪我をしておいでなすつた、そこいらぞツとするような鼻紙はなさア。」

屑の籠を引つくりかえして、

(モ死にたいねえ、) ツて、思わず音ねを出したよ、とおつしやるんですがね、そのままお足みあしを投出して、長くなつて、土手にひじま肱くらはをなすつたんだとき。

鶯ひよがけたたましく啼なき立てる。むこうのお薬園の森から、氷川様のお宮へかけて、真ま黒くろな雲が出て、仕切つたようにこつちは蒼空あおぞら、動くあられと霰あられになりそうなのが、塗つて固めたようになっていたんですつて。

その中へね、火の粉のようなものが、ぱらぱらと飛ぶから、火事かと御覧なされると、また白いものが、ちらちら交つたのを、霰かと見ていらつしやると、またきらきらと光るのを、星かと思

いなさる内に、何ですとき。見る見るうちに数が殖ふえて、交つて、花車を巻き込むようになると、うつとりなすつた時、緑、白しろたえ妙、  
こんじよう紺 青の、珠を飾つた、女雛めびなが被かぶる冠を守護として、緋ひの袴はかまで  
ねりぎぬ練衣の官女が五人、黒雲の中を往来ゆさきして、手招てまねぎをするのが、  
 遠い処に見えましたとき。

ずつと立つて行こうとなさると、直ぐに消えて、隠れていたお  
 月夜になつたそうで。

そこへ私がね、」

と仕方をして、

「テンプラクイタイ、テンプラクイタイか何かで、流して行つた  
 んですよ、お前さん。」

「へッ、人の気も知らねえで、」

「いえ、ところが、私だつて喰うや喰わず、昔のともだちが、伝通院うらの貧乏長屋に、駄菓子ことうもりを売つて、蝙蝠こうもりのはりかえ直しと夫婦になつて暮している処へ、のたれ込んで、しよう事なし門かどづけに出たんですがね、その身になつてもお前さん、見得じやないけれど極きまりが悪くツて、昼間はとも出られないもんだからね、その晩も、日が暮れてから出たんでね、直ぐ上へ出りや久ひさかた堅かたの通りだし、家の数も多いけれど、一寸のばしに下へ下りて、田圃たんぼとお薬園の、何にもまだ家のなかつた処を通つて、氷川の坂へ、むかしの事をおもいながら、夜露と涙で、音ねがしめつたのを。

どうお聞きなすつたか、土手に腰をかけておいでなすつて、お

嬢さんが、（もし、おかみさん）ツて声をかけて下すつたんです。犬は遠くで吠えてたけれど、狐の居そうな処ですもの、吃驚びっくりしたろうではありませんか。」

お夏が、すつと、二階から下りて来た。

「おかみさん、何のお話？」

フト屑屋さんの、と行きつまつたから、

「氷川で御覧なすつた、お雛様のことなんでございますよ。」

## 四十二

「そう、この人なら話が分るの。はじめから私とお雛様のことを

知っているから。ねえ、愛吉、」

と膳の横。愛吉に肩を並べて腰を浮かしていたのは、ついしばらくの飯の宿、二階に待つ人があるのであろう。

お夏はその時、格子の羽織を着ていたが、年も二ツ三ツ、肩のあたりに威が出来て、若い女主人のように見えた。

二階から降りるあしおと躑音を、一ツ聞いて愛の奴、慌ててはだえ膚を入れたのはいうまでもない。

「愛吉、」

「へい………」

「たんと沢山おあがりよ。おいしいものがなくツて、なまこ気の毒だね、おお、その海鼠なまこがおいしそうじゃないか。」

「ええ。一ツいかがでございます。へへへへへ。」

「そうね、御馳走になろうかね、どれ、」

女房が気を利かせて、箸箱をと思ふ間もなく、愛吉のを取つて、  
臆おくめん面なし、海鼠は、口に入いつて紫の珠はつるりと皓しろは齒を潜くぐつた。

「おお、冷ひやっこい！」

すつと立ち——台所へ出ようとする。

「何でございます。」

「二階が寒くなつたの。台じゆうが欲ほしいんです。」

「唯今、私が、」

と立つて出る。お夏は、真まっしかく四角に。但しひよろひよると坐つ

た愛吉の肩をおして、

「大分<sup>だいぶん</sup>おとなしいのね。」

「お嬢様、ちとお叱<sup>ち</sup>んな……」と台所から。

「なッ！」

とだしぬけに押伏せて、きよとんとして、

「納豆、納豆ウい、納豆、納豆ウ、」

「おばさん、屑屋より、この方にすれば可<sup>よ</sup>かつたのね。」

女房は火を入れながら、生真<sup>きまじめ</sup>面目<sup>めい</sup>に、

「どちらがどちらとも申されません。」

「お嬢さん、」と仰<sup>う</sup>ぎさまに、酒くさい口をあけて、熟<sup>じつ</sup>と顔<sup>かほ</sup>を視<sup>み</sup>

て、

「そんな時に、私<sup>わっし</sup>を尋ねて下さりや可<sup>よ</sup>いんだのになあ、」

「それだって、お前、来てくれたって、逢ったって、お酒も飲ませられないし、煙草たばこも与やれないし、可哀相だもの。」

「いえ、頂こうというんじやねえんで、そんな時だ、私わっしあ、お嬢さんぢやうさんにどうにかすらあ。盗賊どろぼうでも、人殺ひところしでも、放火つげびでも何でもすらあ。ええ、お嬢さん、」

「愛吉あいきち、難有ありがとうよ、」

とかけた手で、軽く二ツばかり揺ゆぶって、うつむきざまにはらはらと落涙らくなみした。

ただ、ここに赫かっとしたのは台十能の中である。

「二階へおいでな。」

「ええ、なに………」

「構いはしないよ。」

「ええ、なに………」

「もう、お嬢様、この方はね、」

「おっと納豆ウ、納豆なつと、納豆い、」

「あの、唯今、屑屋さんのかわりに、私の蘭蝶をお聞きなさろうという処ところなのでございます。」

「そうですね、ほんとに思出すわねえ、良い月夜で、露霜で、しとしとしてねえ。」

「草の中においてなすったお嬢さんのお姿が、爪先まで明あかるいんですもの。私は慄然ぞつとしましたよ。そうしてちつとばかり聞かしておくれ、こんな風で済まないけれどもッて、銀貨のお代を頂きま

した時は、私はてのひら掌へ、お星様が降ったのかと思いました。

追分をお好き遊ばした、弁天様のお話は聞きましたが、ここらに高尾の塚もなし、どなた誰方が草刈になっておいで遊ばしたんでしよ  
うと、ただ、もうたつと尊くなりましたね。おんぼろのばばあ婆じやありまして  
ございますが、一生懸命、あんな役やくざ雑な三味線でも、思いなし  
か、あの時くらい、隅田川の水にだって、冴えた調子は出たこと  
がございませんですよ。」

当時の光景、いかにせいぜつ凄絶なるものなりしぞ。

「ああ、私も聞いている内に、ひとりで涙が出たんですもの、愛  
吉、おばさんはそりや上手だよ、」はしごだん階子段に、  
つた葛がからんだもすそ裳の紅、きれないするすると上つて行つた。

「ヘツ笑かしやあがら、ヘツ旦だん的ていめえ、汝うぬが取りに下りれば可いい。寒いてめえが聞いて呆れらい。ヘツ、悪く御託をつきやあがると、汝うぬがの口へ氷を詰めて、寒の水を浴びせるぞ、やい！」

「愛吉、おいでな、」

皆まで聞かず、上へ聞えたかと、「納豆、納豆。」

## 四十三

丹平は言ことばを改め、

「さて、先生、何んでも愛の奴は、その中うちでも、お嬢さんが酷ひどく差込んだというのを気にして、尋ねますから、婆さんが、その時

だ。

一心不乱に蘭蝶を、語り済ましている内に、うむといつてお夏さんが苦しみ出したんだそう。いや、驚くまい事か、糸も撥ぼちもほうほう投り出して、縫すがりついて介抱をしたんだけれども、齒を切く緊しつぱてしまったから、遊おいらん女の空そら癩しやくを扱あうようなわけには行ゆかない。

自分も打ぶつ坐すわり込んで、意気地はがあせん、お念仏とを唱となえ出でした。

ト珍らしく人声がして、俣くるまが来たでさ。しかも路が悪いんで、下町の抱車夫かかえにやあがきが取れなかつたものと見えてね、下りて歩ある行あるいて来かかった。夜目にも立派な洋服で、背は高くないが、

極きまり処きのきちんとした、上手めいじんが鑿のみで刻んだという灰色の姿。月つきあかり

明あきらに一目見ると、ずつと寄つたのが山の井さんで、もう立向へきえきうと病魔辟へきえき易い。病人を包んだ空気が何となく澆べっとひらくというせんせい国手せいだから、もう大丈夫。――

やがてお夏さんの望みで、名が良いという今の青柳町へ、世話を  
する事になつたに就いて、その時の縁で、お賤が、女中、乳母、  
兼帯のおもり役。

とここまで……愛吉にお賤が言つて聞かせて、見なさい、そう  
いう御恩人だ、といつても、奴泡を吹いて、ブウブウの舌を引込ひっこ  
ませない。

日本一のお嬢さんを妾にするたあ何事だ、妾は癩だ、恩人も糸へ

瓜ちまもねえ、弱り目につけ込んで、すけべいの恩を売る奴は、さし込み以上の疫病神だと、怒鳴るでがしよう。

一体何という藪やぶだ、破竹か、孟もう宗そうか、寒竹か、あたまから火をつけて蒸焼にして嚙かじると、ちと乱だ。楊枝ようじでも嚙かむことか、割箸よこぐわを横よこ啣ぐわえとやりやあがつて、喰い裂いちや吐出しまさ。

大概のことは気にもかけなかつたが、婆さん貧病は治して貰つた、我が朝の、耆婆きば扁鵲へんじやくと思う人を、藪はちと気になつたから、山の井さんを何だ、と思うと極きめるとね。

先刻承知だろうと思つていたのが、耳を立てて、何山の井だ、どこの藪だ。

光起さんとおつしやつて、日本橋の真まん中なかにある大藪、という

と、（やや先生か）といつて、愛吉が、呆氣あつけに取られて、しばらく天井を視ながめていたそうだッけ。

（親分か、）と吹ツ切つた。それで静まるのかと思うとそうでない。

（あん畜生、根生ねおいの江戸ッ児この癖にしやがつて、卑劣な謀叛むほんを企てたな。こつちあ、たかだか恩を売つて、人情をかう奴だ、贅ぜいろくだな

六店の爺番頭か、三河万歳の株主だと思ふから、むてえ癩いに障つても、熱湯にえゆは可哀相だと我慢をした。芸妓げいしやや娼妓じよろうでも困うぬいがりや、いざござはちつともねえが、汝うぬが病家さきの嬢さんの落目をひろつて、搔きあげにしやあがつたは、何のこたあねえ、歌を教えて手を握る、根岸の鴨川同断だ。江戸ッ児の面汚し、さあ、

合がつてん点が出来ねえぞ、）とぐるぐると廻つて突立つたつから、慌あわてて留める婆さんを、刎はね飛ばす、銚ちようし子が転がる、膳ぜんが倒れる、どたばた、がたぴしという騒さわぎ、お嬢ぢやうさん、と呼んで取さえてもらおうとしても、返事もなけりや、寂ひっそり閑かんはどういうわけ？……

（もう寐ねやがったか、太え奴だ。）

とドンと襖ふすまへ打附ぶつかつて、眼まなこの稲妻いなづま、雷らいの聲こゑ、からからからと黒くろけむり煙けむりを捲まいて上る。ト、これじゃおもりが悪いようで、婆ばあさん申訳まことがありますまい。

あとから夢中で駆け上った、この時でさ、——先生。

二人とも驚いたのは。

二階の二人が、クスクス笑っていたというんですものな。

気の抜けること夥おびただしい。

ちんちんをするような形で、棒を呑んでしやつきりと立った、

愛吉の前へ小さな紫檀の食卓の上から、衝つと手を伸ばして、

(親方、申上げよう、)

といつて猪口ちよくをさして、山の井さんが、呵から々と笑つたとお思

いなさい。」

光起は藍あゐと紺、味噌みそ漉こ縞し縞ま一楽の袷羽織、おなじ一楽の鼠と紺を、

微塵みじん織おりの一ツ小袖、ゆき短みじかにきりりと着て、茶の献上博多の帯、

黄金きんぶちの眼鏡を、ぽつりと太い眉の下、鼻隆たかく、髭ひげ濃まかに、頬

へかけて、円あぎとい頤と一面に胡麻ごまのよう、これで頬がこけていれば、

正に卒業試験中、燈下に書を読む風采であつた。

## 四十四

お夏がまた叱言こづことでもいうことか、莞爾にっこりして、

(さあ、お酌をして上げようね、)

愛吉は手術台で、片腕切落されたような心持で、硬くなつて盃を出した。

お夏の手なる銚子こそおかしけれ。円く肩のはつた、色の白い、人形の胴を切つた形であつたもことわり、天女が賜たまう乳のごとく、恩愛の糸をひいて、此方こなたの猪口に装もられたのは、あわれ白酒であつたのである。

きて、お肴さかなには何がある、錦手にしきでの鉢と、塗物の食籠じきろうに、綺麗に飾つて、水天宮前の小饅頭と、蠣殻かきがら町の煎菰豆いりえんどう、先生を困らせると昼間いつたその日の土産はこれで。丹平がここに金之助に語りつつある、この黒旋風を驚かしたものは、智多星ちたせいご呉軍師の謀計でない、ただ一盞いっさんの白酒であつた。――  
 丹平語ことばを継ぎ、

「そこで医学士が、

(どうです、親方、いけますか、) などとおつしやる。

お嬢さんの下さるもんなら、溝泥どぶどろも甘露だといった口にも、

これはちと辟易へきえきだ、盃にらを睨み詰めて、目の玉を白く、白酒を黒

くして、もじつくと、山の井さんが大笑いして、

(いけますまいな。いや、私も弱る。大辟易だが、勝山さんは、白酒でなくッては、一生お酌は断ちものだそうだ。)

また全く徹頭徹尾、白酒でなくッては酌というものをしないのでがすとき。婆さんがなかなかおりに、

(私が助けましよう、)

と取つて飲んだのを、

(頂戴な、)とお夏さんが請け取つて、ここで一杯、珍らしく三猪口、ちよこ愛吉の酌で飲んだそうで。

山の井さんは止むやことを得ず、例のごとくそこに持出して——いや、突きつけてある草紙を取つて、一枚ずつ開けて見ながら、白豌豆をポツリ、ポツリ。

時々、

(旨い、) うまなんて小児こどものような洒落しやれをいうんだ。

そうしちや、

(私は小児科はいかんよ。) は可ようがしよう。

お夏さんがね、ばたりと畳へ手を支ついた、羽織の肩が少しずれて、

(ああ、もう眠い、) ツて恐ろしい愛想づかしじゃありませんか。

(さあ、お寐ねなさい、)

というと、かぶりを振って、

(厭いやです、寐いかして下さらなくツちや、)

(お婆さん、床を取っておあげ、私も、もうそろそろ帰る。)

(いいえ、先生、貴下あなたが、寐ねかして、)と切々きれぎれにいったが、いっになく酔っちやいるし、ついぞないことをいうんだから、婆さん、はツと気がついて大喜び。

(さあ、愛吉さん、下へ行つてもう一杯、今度は私も頂くよ。)  
善は急げで立ちかかると、愛吉、前へ立つて、膠にかわが放れたようだったが、どどどど、どんというすべと四五段すべり落ちた。

(危い、)

と婆さんが段の途中でいった時、

(危いよ、)

という医学士の声が出たは、お夏が、愛吉を憂慮きづかつて、立とうとして、酔つてるからよろけたんだそうです。

愛の奴は台所へ仁王立ちで、杓ひしゃくのみ呑やを遣やつた。

そこいら、皿小鉢が滅茶でしよう。すぐにその手で、雑巾を持つて、婆さんが一片付け、片付けようとする時、二階で、

(親方々々、)

と医学士が呼んだそうです。

上つて見ると、どうでしょう、お夏さんは高島田を横に学士の膝につけて、腕かいなをかけて、横顔で寐ねていたのです。

(そこらに搔かいまき巻まきがあろう、見てくれ、)とある。

おつとまかせろナは可いが、愛の野郎、三尺の尻しつツこけで、ぬツと足を出して夜具戸棚を開けた工合、見習どんいの喜助殿どんというのがす。

勿論、絹の小搔卷。抱えて突出すと、

(かけてお上げ、)

というお声がかかり。」

## 四十五

搔卷がかかると、裳もすそが揺れた。お夏は柔かに曲げていた足を伸ばして、片手を白く、天鵝絨びろうどの襟を引き寄せて、軽くかろ寝返りざまに、やや仰向あおむけになったが——目が覚めてそうしたものではなかった。

愛吉は搔卷の裾ひざますに跪ひざまずいて、

(先生、酔ったんで、)

(ああ、ちと酔ったと見えるが、女も、白酒を小さな猪口で寐るようだと真まことに結構だ、)

(愛吉、)

(へい、)

(男も君のように飲んじや困るな。)

納豆なっどを売るわけにも行かず、思わぬ処でぎよつとする。

(ちつと控目にしないか、第一身体からだが堪たまらない。勝山さんも大層気にかけて心配してるぜ。

待て、)

といって、尻ツこけに遁にげ出そうとするのを呼び留め、学士は

黄金時計をちよいと見た。

(少し待て、)

そのまま黙つて、その微塵縞一楽の小袖の膝に、酔はさめたが、唇くれなるの紅も搔卷にかくれて、ひとえに輪廓の正しき雪かと思まがう、お夏の顔を熟じつと見ながら、この際大病人の予後でもいいいきけらるるを、待つごとく、愛吉呼吸いきを殺して、つい居ると、

(こつちへ来い、)

(ええ、)

(ちつと膝をかせ。)

(先生、飛んだ御串戯ごじょうだんもんですぜ。)

(いや、私わしは時間の都合がある、婆さんは片づけものがあるだろ

う、すやすや寐ているから、可いか、密そつとだ、静かな膝は、わななく枕と入れ交った、お夏の夢は、月に月宮殿をあくがれ出でて、廃駅の時雨に逢うのであろう。

立つて、衣紋えもんを正した時、学士の膝は濡れていた。が、鬢びんずらの梅しずくの雫しずくではない、まつげのそよぎに、つらぬきとめぬ露であつた。

（私は一向、そんな方はぞんざいだったが、この勝山さんもちら娶むおうとした時、親類うわさが悪い風説うわさを聞いたとか言つて、愚図ぐずぐず々々面倒あちこちだから、今の、山河内あちこちのを入れたんだが、身分が反あちこち対だあちこちとよかつた。女世帯むすめの絵草紙屋かかを棄かかてて、華族むすめの女かかを媽かかにしたといふので、酷ひどくこの深川ひどツ児こに軽蔑こされるよ。はははは、）

と恐縮をしたように打笑い、

(どうだ親方、ちつと粹なのを世話しないか。)

と上り口で振返つて、爽さわやかに階下かしたへおりた。すぐ上つて来るだろうと思うと、やがて格子戸が開いたのは、懐手で出て帰つたのである。

転うたたね寝はかぜを引くと、二階へ床を取りに行つた時、女房は、

石のように固くなつて愛吉が膝を揃かえて畏かしこまつていたのを見た。月の夜の玉川に、砧きぬたを枕にした風情、お夏は愛吉のその膝に、なおすやすやと眠っていた。

密そつと起して、先生がおつしやつた、愛吉さんもお泊り、という時、お夏はぱっちり目を開けたが、極めて鷹揚おうように無雑作に、

(……………)

枕かわの異かわつたことは何にもいわず、

(お前もお手つだい、)

と愛吉に教えて、自分も枕など持ち出して、急いで寢床が出来ると、(このまま寝ようや、)と云つたのが、その緋ひの紋もん綸りん子の長襦ながじゆばん袷あ。

おんなじよそおい  
同 一 装あで。香水の瓶の口を開けていたのを、二度目に行あ燈とうを提ひげて上あつて女房が見た。が、その後のちの事は分らぬ。もつとも屏風びやうぶをたてて下ありた。その後ごはいかにしけんか知らず。

ただ、真夜中の頃、みしみしと二階を一人が降りて来た。お夏

の登あしおと音ではない。うとうとした女房、台所の傍かたわらなる部屋で目を覚すと、枕許を通るのは愛吉で、憚はばかりかと思うと上あがりがまちがまちの戸を開けた。

（おや、帰るんですか。）

（私わっしも店がございます、済みませんが、あとのしまりを、）と不思議なことをいって、戸を開けて出たと思うと、日和下駄を穿はいて来たのに、カラリとも音がせぬ。耳を澄ましていると、ひたひたと地を踏ふむ音。およそ池の坊の石段のあたりまで、刻んできこえたが、しばらく中絶えがして、菊畑の前、荒物屋の角あたりから、疾風一陣！護国寺前から音羽の通りを、通り魔の通るよう、手足も、衣きものも吹ふき靡なびいて、しのうて行くか、と犬も吠えず鼠もあ

るかぬ寂しんとした瞬間のうつつに感じた。

女房は夢かと思つた。が、起き出て土間へ下りると、幻ではない。格子戸は開いたまま、大戸はしまつていたが、掛けがねが外ずれていた。

火沙汰を憂慮きづかつて、行燈で寝るほど、小心な年寄。ことに女主人るじなり、忘れてもこんな事は、とそこで何か急に恐くなつたか、密そつとあけて見ると良い月夜、式部小路は一筋蒼あおい。

塵ちりごみも埃も寐静ごみつたろうと思ふ月明りの中に、曲角うちあたりものの気勢けはいのするのは、二階の美しいの魂が、菊の花を見に出たのであろう。

女房はフト心着いた。黙つて歸して、叱ちられはしまいか、とそ

こで階子段はしごだんの下に立寄つて、様子を見たが、寂寞ひっそりしている。  
覗くのぞくようにしたけれども屏風はたつたり、行燈の火も洩れもず。

（お嬢さん、）と小声で呼んで見たが、答えがない。その夜に限つて、上つて見ようとは思わず、いつの間にか時が経たつたと見えて、もう冷くなつた寢床へ入つて寐た。

あくる日は、平日いっより早く目が覚めたが、またお夏が例になく起きて来ぬ。台所もすっかり片づいて、綺麗に掃除が出来、朝飯が済んで、しばらくして茶を入れて、毎日飲む頃になつたが、まだ下りぬ。

沸たぎり切つていた湯が冷めるから、炭を継いで、それから静しずかに上つて見た。屏風の端から覗くと、お夏は床の上に起上つて、暖あたたか

日のさす小春の朝。行燈の紙真白まっしろに灯がまだ消えず。ああ、時ならぬ、簾すだれ越こしなる紅梅や、みどりに紺段だんだら々八丈の小搔卷を肩にかけて、お夏は静じっとしていた。

（おや、もうお目覚。）

（ああ、今起きようと思つてゐるの。）

女房が、不思議というのはこの事ではない。ただ愛吉が夜中に帰つた時の、戸外おもてが凄すごかったもののけはいの事である。

それとなく、

（昨夜ゆうべ夜中に帰りましたね。）

（喧嘩の夢を見て、寐惚ねとぼけたんだよ。）とばかりお夏は笑つていたが、喧嘩の夢どころではない、殺人の意気天ちゆうに冲ちゆうして、この気き

疾ばやの豪傑、月夜に砂すなけむり煙ねを捲まいて宙を飛んだのであつた。

この意気なればこそ、三日握り詰めたお夏の襟をそつた剃刀に、鎮西五郎時ときむね致とが大島伝来の寐刃ねたばを合わせたとはいえ、我が咽喉のどならばしらず、いかで誤つてお夏の胸を傷つけんや。衣きていた絹は、膚よりも堅いのに。

くらがり坂で躍り出して、

(こん、畜生！)

コオトの背中を引ひっ抱かえて、身からだ体をおし圧おにグサと刺した。それで  
も気が上ありつたか、頭巾の端を切つて、咽喉をかすつて、剃刀の  
尖さきは、紫の半襟の裏に留とまつたのである。

お夏がよろける。奥さん、と梅岡薬劑。――

啊呀と、あなや 駆け寄つた丹平は、お夏が刃物を引きつけるように、  
 我を殺すものの頸を、うなじ 両のかいなでしつかと絞めて抱いたのを見  
 た。その身は坂を上の方、兇漢は下に居た。

(あ、)

と一声、もつと刺せとか、それとも告別の意であつたか、

(愛吉、)

とお夏が呼ぶと、丹平が引放そうとする愛吉の手は、力も用い  
 ないで外ずれたが、頸を巻いたお夏の腕は放れない。

もが いて解くと、ほど 道の上へ、お夏の胸は弓なりに反つたが、梅岡  
 に支えられた。

(国手に、せんせい 国手に、)とお夏は、その時くりかえしていったの

である。

愛吉は下へ、どんと尻餅をついた。そのまま咽喉のんどにあてた剃刀を撈もぎ取ったのは丹平で。

時にはじめて声を出した、江戸ッ児の薬剤師の声は異様なものであつた。

(非常だ、)

(お騒さわぎあるな！ 引きうけました。)

兀はげ天窓あたまの小男の一言は、いうまでもなく大いなる力があつたのである。

竹永丹平が病院でなお語り続ける。

「で、三宜亭で聞きますとな、愛の野郎は当日お昼過から、東照

宮の五重の塔に転がっていたんですがすつて。暮かかってから、の  
ツそり出かけて、くらがり坂に潜んだんだといえますから、巢鴨  
じゃ、ちようどお夏さんが、私と話を<sup>てまえ</sup>していなすつた時でがす。

影も薄し、それ神々しかろうじやありませんか。

また、青柳町で。婆さんが云うのには、その晩、<sup>くだん</sup>件の一陣の兇

風、砂を捲いて飛んで返つたツきり、門口はもとより台所へも、

<sup>ひあわい</sup>廂合の路地へも寄ツついた様子はなし、お夏さんも二日たつて、

その日の午過ぎ湯に行くまで、どツこも出なかつたというんです

から、白薔薇と、平打の簪と<sup>かんざし</sup>で、生命<sup>いのち</sup>がけの相談、定子を殺そう、

と一人は、一人は定子になつて殺されようというのが極<sup>きま</sup>つて、打

合わせもしないで両方とも立派に覚悟をして出かけたばかりか、

とうとう真ほんものにしてしまった。

生命いのちを軽かろんずること 鴻毛こうもうのごとく、約を重かさんずること 鼎かなえに似

たり。とむずかしくいえばいうものの、何の事はがあせん、人殺ままごとしの飯事ままごとだ。

が、またこの飯事が、先生、あの二人でなくツちや、英雄にも豪傑にも、志士しんじん仁人にも、狂人にも、馬鹿にも出来ない、第一あなたにも私にも出来ませんで。

何の出来ずとも事だけれど。……」

と丹平は附加えた。

「てまえ私、愛吉が来てからの一件。また当日お夏さんがちよいと関戸の邸のもみじを見て来よう、と……もつともいつか中から行って

見よう、といいながら、出ぎらいな方で行かなかつたのを、お午過ぎに湯から帰ると、一人でずんずん着ものを着かえた。直近じきいのに吾妻コオトなり、頭巾なり。ちつと帰りが遅いから、気になつて、婆さん、横町の角まで出ていた処を、私に会つたと云うんでがしよう。さあ、気になる。私一向遣り放ばなしで、もの事を苦にはせんから、虫が知らせたというようなわけではない。

が何だか、卯之吉の門かどから俵くるまが行つてしまったのが、なごり惜おしくつて、今にもその姿が見たくてならぬ。

おかしいね。

何も三年越見なかつた人なり、殊にそういう知己しりあの婆さんが在つて見れば、これをつてで、また余所よそながら尋ねられないことも

ないが、何となく、急に見たい。

そこででがすよ。

茶を入れかえる、といったのを振切つて出て、大塚の通りから、珍らしく俵を驕おごると、道の順で、これが団子坂から三崎町、笠森の坂を向うへ上つて、石屋の角でさ。谷中の墓地へ出たと思うと、向うから——お夏さん。

ちと柄がかわり過ぎた。私、目についているのは、結ゆい綿わたに鹿かの子の切きれ、襟きものかかった衣まえに前だれ垂たれがけで、絵双紙屋の店に居た姿だ。

先刻さつきの文金で襟なしの小袖でさえ見違えたのに、栗鼠のコオトに藍鼠のその頭巾。しかもこの時は被かぶつていました。

おまけに、並んで歩<sup>あ</sup>行<sup>る</sup>しているのが、茶の中折で、絣<sup>かすり</sup>の羽織、  
 粋づくりだけれど、お商売がら、どこか上品に見える、梅岡葉劑  
 でがしよう。

私もし、青柳町へ寄らないで、この体<sup>てい</sup>を見ると、いよいよ戻<sup>もどり</sup>  
 橋<sup>ばし</sup>だ。紅葉の下で生血を吸う……ね。

そのなりで。思いがけない二人づれなり、ちよいとはお夏さん  
 と見えないけれど、そこは私、通から一目で見取った、俵を下  
 りて、くらがり坂まであとをつけたですよ。何とももって残念千  
 万。

や、梅岡さんの方が前<sup>まへ</sup>へ行<sup>き</sup>つたそうですが。あの石段の上の床<sup>し</sup>  
 几<sup>ようぎ</sup>、入<sup>はいりぐち</sup>口のね、あすこだ。毛氈<sup>もうせん</sup>を敷いて出<sup>で</sup>してあるのに

腰をかけて、待合わしていたんでがすな。

そこへ柳橋とも、芳町とも、新橋とも、たとえようのないのが、急いで来て、一所になった。紅葉の時だが、マビで、そんなにたて込まず、座敷もあいていたけれども、上らないで、男はカラカラと高たか談話ななし。

一室ひとまだとたちぎぎがしたいなぞと、氣を揉もんだ女中が居たそう  
で、茶代が五十にぶ銭。

それから連れ立って、東照宮の方へ行くゆのを、大勢女中がずらりとならんで騒いで見送ったのは、今しがただ、といつて、三宜亭の主人がな。

奥座敷を閉め込んで、血だらけのコートを脱がした時、目を眠

っているお夏さんの、あでやか艶麗なのを見て、こりや、薬やほうたい繻帯をなさるより、真綿で包んで密そつとして置く方が可いツて、真面目にいった。

もつとも夢のようだといいましたっけ。

先生、私まことなども、真まことと思わん、どうしても夢でがすよ、それが一さきおととし昨々日の晩だ。」

といつて歎息した。

金之助は悩める右手をひしと抱いて、

「私は却つて、その顔も見ないから、ちつとも夢のように思われんでなあなたお困る。幸ひ貴老が見えてから、あの苦しむのが聞えないから……」

「てまえ私のその、御おんきようどくじゆ経読誦が、いくらか功德がありましたもんでがしよう。」と、泣くより笑いというのである。

「ああ、どうぞあけ方までに、繰返して、もう一度その経を誦したまえ、絶えず、念じて下さい。私も覚えて念じよう。明日あす、また明後日あさって、明々そのあさって後日あさって日も、幾度いくたびも、本尊の前途を見届けるまでは、貴方は帰さん、誰にも逢わん。」

「宜よろしい。」

竹永が天井を仰いだ時、金之助も齊ひとしく見たが、例いつよりは壁が  
高いと思うと、電燈がすつと消えた。

あわれな声で、

青葉しげれる桜井の、里のわたりの夕まぐれ、

と廊下で繻帯を巻きながら、唐糸の響くように、四五人で交る低唱していた、看護婦たちの声が、フト途切れたトタンに。

硝子窓へばらばらと雨が当った。

廊下を馳せ違う人の登音。

二人は呼吸を詰めた。

電燈が直ぐに点いた、その時顔を見合わせた。

木の下蔭に駒とめて、

とまた聞える。

吻と、といきをつく間もなく、この扉が細目に開いた、看護婦の福崎が、廊下から姿を半ば。

「貴下、お案じなさいました五番の方が、」

二人は肩から氷を浴びて、

「どう、」

「どうした。」

「容ようす子こがかわりました。」

「そうか、」

期ごしたりといわんよう、落着いていつて、丹平は椅子を放れる。

と同時である。

「大変だ、」と激はげしいと、金之助は寝台ねだいからずりりと落ちたが、

齊ひとしく扉から顔を出して、六ツの目は向むこう、突当りの廊下へ注いだ、

と思うと金之助が身を挺ていして、少しよろけながら廊下をすたすた

と其方そなたへ行く。後から竹永が続いたので、看護婦も引添うた。

遠山も丹平も心はおなじ、室の外から、蔭ながら、別わかれを惜おしもうとしたのであつたが。

五番の室の前へ行くと、思いがけず扉が開いていたので、思わず兩人、左右の壁へ立ち別れた。

と見ると哀しき寝台を囲うて、左の方に、忍び姿で、肅然として山の井医学士。枕許に看護婦一人、右に宿直の国手いしやがたたずいで、その傍わきに別に一人、……白衣びやくえなるが、それは、窈窕ようちようたる佳人であつた。

その背後うしろに附添つたのが、当院の看護婦長。

入口を背せなにして、寝台の裾に、ひよろひよるとして瘦やせた、三尺帯は愛吉である。

ト遠山の附添福崎が、静しずかに室に入つて行つて、二三語を交えたのは、病人に対する金之助の同情の節ふしを伝えたのであろう。

医学士の傍そばに居た看護婦が、一脚椅子を持つて出て挨拶をした。

「お掛けなさいまし。」

金之助は辞せず、しかし入りはしないで、廊下へ受取つた時、福崎は急いで遠山の病室へ行つたが、これも椅子を提げて引返して来て、

「お掛けなさいまし。」

と丹平に。自から直ちに遠山の背後うしろに来て、その受持の患者を守護する。両人は扉を挟んで、腰をかけた、渠等かれらこうず好事なる江戸ツ児は、かくて甘んじて、この惨憺さんたんたる、天女廟びようの門衛となつた

のである。

雨がドツと降って来た。

しばらくすると、宿直と、看護婦長は、この室を辞して出た。

その時、後を閉めようとして、ここに篤志とくしの夜伽よとぎのあるのを知つ

ていちゆう一揖いした。

丹平すなわち、外から扉を押そうとすると、

「構いません、」と声をかけて目礼をしたのは医学士山の井光起である。向い合つて右の側なる一人にんの看護婦が、

「宜しゆうございます。」

といった、渠は窈窕たる佳人であつた。

「いや、御遠慮を申す、御遠慮を申す。」

と丹平は徐おもむろに。かくて自ら自分等を廊下の外に閉め出した。その扉が背せなを圧するような、間近に居たから、愛吉は身動みうごぎをしたが、かくても失心の体ていで、立ちながら、貧乏ゆるぎをぞしたりける。時に、ここを通り過ぎて、廊下の彼方かなたに欄干てすりのある、螺旋形らせんがたの段の下り口の処どまに立ち停どまつて、宿直医と看護婦長と、ひそかに額たまを交えてたたずゝんだのが、やがて首こうべを垂れて、段を下りるのが見え

た。  
 同時にそれまで、青葉の歌の声を留めて、その二人の密話を傍か聞たえぎきして取り巻いた、同じ白衣の看護婦三人。宿直の姿が二階を放れて、段に沈むと、すらすらと三方へ、三条みすじの白布しらぬのを引いて立ち別れた。その集っている間、手に、裾に、胸に、白浪ひるがえの翻

るようだった、この繻帯は、欄干もとに本とどを留めて、末の方から次第に巻いて寄るのである。

渠等も、お夏のこの容体を今聞いた、無意識にうたいつるる唱歌の声の、その身その身も我知らず、

身の行末をつくづくと、俣しのぶよろい鎧の袖への上に、

散るは涙か、はた露か、

より低く、より悲しげに、よりあわれに、より多くかしら頭を垂れて、少しずつ、巻き込みながら繰り寄る繻帯。

遠く廊下あやつに操る布の、すらすら乱れて、さまよえるは、ここに絶えんず玉の緒の幻の糸に似たらずや。繫つなげよ、玉の緒。勿断なたち

そ細布。

遠山と丹平は、長き廊下の遠き方に、電燈の澄める影に、月夜に霞の漾ただようなかに、その三人の白衣の乙女。あわれ、魂を迎うべく、天使来るきた矣い、と憂えたのである。

雨は篠突しのつくばかりとなつた。棟に覆す滝の音に、青葉の唱歌の途切る時、ハツと皆、ここにあるもの八九人、一時に呼吸いきを返したように、お夏の、我に返る氣勢けはいを感じた。

「ああ、熱、」

すわや驚破と二人。

「何て暑いんでしよう、私はどうしたの。」

というのが、耳許に冴えた調子で聞えながら、しかも幽かすかに、折から風が颯さつと添つて、次第々々に大空へ遠く消えて行くようにな

つて、また寂しんとした。

雨はいよいよ降るのである。時もわきまえずなるまでに、夜よは次第に更けるのである。

「愛吉、愛吉、」とお夏が呼んだ。

遠山は面おもてを背けた。

「愛吉、苦しいから殺しておくれ。」

しばらくして、

「早くしておくれよ。」

答うるものはないのである。

「国手せんせい、どうすりや、可いの。私は国手の奥さんになりたいの

、  
」

優しい声で、

「してあげますよ、」というのが聞えた。

「だって奥さんがあるんですもの。」

「いえ、もうありません、貴女あなたに生命いのちを救われて、山河内の家へ  
帰りますよ。」

遠山も耳を澄す。

お夏の声で、

「でも不可いけないもの、私は、愛吉が可愛かわゆくツて可愛くツて、」  
廊下の外でもはらはらと落涙する。

「可愛くツてならないの、だから奥さんになつて殺されたんだわ、  
なぜこんなに暑いもの、なぜ熱いの、私のした事が悪いから、あの、

それで、ひどいの、どうすりや可いんですねえ。」

答うもののあらざるを見て、遠山金之助堪えかねたか、矩を躪こしてずツと入った。

蓬頭垢ほうとうこうめん面すだま、窮鬼のごときわかもの壮佼あり、

「先生！」

と叫んで遠山の胸にすが縋りついた。

「お嬢さんお嬢さん、貴女が兄さんのようだとおいいなすった、新聞社の先生ですよ。」と、いまだ全くその気は狂い果てなかつた。

金之助、声高く、

「貴女のしたことは決して間違つた事じゃありません！」

これにうなず頷く趣に見えたが、

「もう死んでも可ごさんす、」といつて、起上ろうとするのをかの看護婦が、密そつと抱いて、

「いえ、私が死なせません。」

渠かれは窈窕たる佳人であつた。この窈窕たる佳人は、山の井医学士の夫人定子であること——ここで謂いおう。

医学士は衝つと進んで、打うちまかせたような、お夏の右手めての脈を衝と取つた。

除のけよ、とあるので、附添と、愛吉は、山を崩すがごとく、氷囊うしなを取り棄てた。医学士は疾しつ病ぺいの他に、情の炎の人の身を焼やき亡ううことのあるを知つたであらう。

丹平は、そこに掲げられた、体温の表を見て、はげ烈しい地震系を描いた、噴火山のようなものだと思つた。

あわれ、その胸にかけたる繻帯は、ほぐれてたなび鬢鬚いちだいて、一朶の細き霞の布、あけがた暁方の雨上りに、きず疵はいえていたお夏と放れて、眠れるごとき姿を残して、ようえい揺曳して、空に消えた。

内裏雛の冠かむりして、官女たちと、五人囃子して遊ぶ状さまを、後に看護婦までも、幻に見たと聞く。

明治三十九（一九〇六）年一月



## 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年6月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第六卷」岩波書店

1941（昭和16）年11月10日第1刷発行

初出：「大阪毎日新聞」

1906（明治39）年1月1日～1月27日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5・86）を、以下の個所を除いて大振りにつくっています。

「雑司《ぞうし》ケ一谷《や》」「熊ケ谷」「程ケ谷」「明石ケ

浦

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2012年5月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 式部小路

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>